

号数	発行日	見出し	内容等1	内容等2
19	昭和34年6月6日	市街の美 絵と文 見聞紀談 興味ひく民間信仰 美術館の一年 当館主催のもの 展覧会案内	川端 弥之助 岡部 三郎 小牧 源太郎 第10回記念京展 33年5/1-14 川合 玉堂遺作展 33年10/21-11/3 第1回日展 34年1/27-2/15	第12回市民美術展 33年8/19-24 ファン・ゴッホ展 33年12/3-30、34年1/2-5 1959年京都アンデパンダン展
20	昭和34年7月3日	ロダンとル・コルビュジェ 見聞紀談 トピック 奥深い漆芸の世界 大原美術館を見学 展覧会案内	最高傑作同志の協同 開館した西洋美術館 国展のこと 重 達夫 ザッキン未日 相次ぐ須田展 中村 弘子さん 友の会	岡部 三郎 平八郎の自選展 朝日新人展
21	昭和34年8月5日	日本の現代洋画 その弱点の克服には 見聞紀談 伊太利・風景画 展覧会案内	夏期講座講演要旨 岡部 三郎 小野 竹喬氏	京大教授 上野 照夫
22	昭和34年9月10日	秋のことば 秋のスケジュール 見聞紀談 変貌した五条坂 展覧会案内	秋野 不矩 美術館を中心に 岡部 三郎 清水 六兵衛	
23	昭和34年10月15日	大観特集 見聞紀談 展覧会案内	横山大観遺作展 11/1-23 当館 岡部 三郎	横山大観という人 在洛画家にきく
24	昭和34年11月17日	横山大観の芸術 遺作展に寄せて 見聞紀談 展覧会案内	河北 倫明 岡部 三郎	
25	昭和34年12月7日	日展に語題を拾う 宮展50年の回顧		
26	昭和34年12月28日	冬山のスケッチ 1960年こしの仕事アンケート クリテイク(1) 日展見学座談会 見聞紀談9 展示会案内	西山 英雄 広田 多津 楠部 弥一 岡本 庄三 京大名誉教授・美学 京都国立博物館技官 京都大学文学部嘱託 岡部 三郎	来野 月乙 芝田 耕 野村 耕 植田 寿蔵氏 此身帰する所無し 日畑 よし 乾由明
27	昭和34年2月15日	1960 京都アンデパンダン展作品募集 アンデパンダン忘備録 見聞紀談 美術研究所一覧 クリテイク(2) 展覧会案内	岡部 三郎 自由美術京都研究所 京都美術彫刻研究所 関西美術院 瑞美苑 京大人文科学研究所教授・考古学	新制作油絵研究所 現代美術研究所 紫野洋画研究所 市民美術共同アトリエ 水野 清一氏 時代の流れ
28	昭和35年3月25日	梅原 龍三郎展 クリテイク(3) 見聞紀談11 美術館の一年 展覧会案内	梅原の京都時代 関西日仏学館長 岡部 三郎	黒田 重太郎 モリス・マンコンクル氏 地中海 後素協会 明治30年代の京都美術展覧会
29	昭和35年4月15日	アンデパンダン展特集 展覧会案内	質・量ともに発展 和気 史郎 小笠原 誠次 バーンステイン 京都アンデパンダン展出品者 京都アンデパンダン展4年の歩み	アンデパンダン展に出品して 富谷 道信 市村 司 井島 勉
30	昭和35年5月31日	常設展特集 クリテイク(4) 見聞紀談12 展覧会案内	7月開催の予定 当館の所蔵品について 国立近代美術館事業課長 河北 倫明氏 岡部 三郎 新古典美術品展覧会 明治30年代の京都美術展覧会(2)	常設展への手記 当館学芸主任 加藤 一雄
31	昭和35年7月10日	わが師わが友 浅井 忠先生 美術館ちかごろ クリテイク(5) 見聞紀談 展覧会案内	黒田 重太郎 京都・バリ陶芸交換展、常設展開設は秋に延期 京都市美術館、美術品購入審査委員 大宮 浩堂氏 シェル美術賞展 美術館夏期講座 岡部 三郎	北脇・梅原氏の作品寄贈、美術家の経歴調査進む 訪中日本画展 イルミネーション絵画展 今年の市民美術展 日本南画協会明治30年代の京都の美術展覧会(三)
32	昭和35年8月15日	新中国の印象 近作自評 わが師わが友 TOPIC 見聞紀談 展覧会案内	日本画家 西山 英雄 麻田 鷹司 黒田 重太郎 「集団現代彫刻」生れる。20代の陶芸家たち 明治30年頃に出来た京都の画塾	雲煙 那智 河合 新蔵さんの思い出 京都書院画廊再開、堂本尚朗の新作購入
33	昭和35年9月30日	常設展を開いて 常設展の前と後	館長 重 達夫 岡部 三郎	

		わが師わが友3 展覧会案内	厳しかった鹿子木さん	洋画家 黒田 重太郎
34	昭和35年11月15日	小林古径・遺作展 わが師わが友4 展覧会案内	古径の作品 鹿子木さんの門人たち	洋画家 黒田 重太郎
35	昭和35年	ここの日展	そろった大家の出品 壮観立ち並ぶ立像群	写実の水準を示す洋画 特選の作家たち

展覧会案内

5月

美術館

- 第十一回京展 3日-17日
- モダンアート展 22日-31日
- 光風会展 22日-6月1日
- 青陶会展(陶芸) 23日-28日
- 新匠会展 26日-31日

京都府キヤラリー

- 朴土社第一回展(日本画) 7日-11日
- ネクタイ図案展 13日
- 二科会京都作家展 15日-19日
- 響々社作品展(日本画) 21日-25日
- 京都洋画家協会展 27日-28日
- 京都新制作油絵研究会 30日-6月3日

京都書院画廊

- 染織グループむげん展 8日-11日

- 京都三大学写真展 12日-17日
- 藤川化繊デザイン 18日-21日
- 研究グループ展 18日-21日
- 竜大京女大美術部展 22日-26日
- 立大美術部展 27日-31日

- ▽土橋画廊 5日-10日
- 雙走会展(日本画) 16日-20日
- 矢野光土画展(日本画) 16日-20日
- ぶらり第二回展(洋画) 22日-24日
- 朴土社小品展(日本画) 26日-31日

- ▽大丸画廊 5日-10日
- 吉田翠鳳画展 12日-16日
- 竜土会展(日本画) 12日-16日
- 背竜社小品展(催場では春の青竜展) 19日-24日
- 東丘社展 26日-31日

- ▽丸物画廊 9日-14日
- 吉田吉彩画展(油絵) 23日-28日
- 三輪高秀個人展 23日-28日

- ▽べんてる画廊 (寺町三条上ル) 12日-17日
- Q9展 12日-17日

京都国立博物館

常設陳列

▽名古屋松坂屋

ギリシア芸術展 20日まで

×モ

フランスから日本に返還された松方コンクッションの絵画と彫刻はすでにさる四月十七日東京上野の国立西洋美術館に到着、待望のコンクッションがファンの前に披露されるのも近々のこと、そうならば当分は美術愛好家の西洋美術館詣でが続こう。こんど帰って来たコンクッションは三百七十一点で、その中にはドラクローア、クルーベ、ゴッガン、ゴッホ、セザンヌ、ドガなどが名を知らねているが、一つの中心はロダンで、大作「地獄の門」をふくめて五十三点を数え、世界でも屈指のロダン・コンクッションを形づくっている。

友の会

○4月19日に総会を行いました。出席者が少なくて残念でしたが、昨年度の会計報告事業報告を行い、本年度の事業計画の説明を行いました。

- 1 申込は20日までに美術館へ
 - 2 募集は50人とし申込順
 - 3 会費は会員三千円、非会員三千三百円、小人二千円
- た。又、役員については会長に前年同様田中豊氏を、委員は後刻会長から委嘱して決めることにしましたので、次号にはお引き受け願った方を発表いたします。又、美術館への希望などを話し合い、プロラクシオンにはオールカラーの「白鳥の湖」「私たちの石油」を上映鑑賞しました。
- 大原美術館見学会は、要項を会員各位に送付いたしましたので詳細は省きますが、民芸館考古館等を尋ね、岡山市内に一泊して備前のくにの情緒を味わい、熊羽山に登つて内海第一と称される塩飽諸島を眺望する計画も加えました。なお、往復は急行列車で、その他はバスを使うなど楽しい旅行ができるよう注意しました。
- 児童美術教室の第一回展覧会は各界に非常な反響を呼び、友の会の立派な事業であることが認められました。教室顧問の井島勉先生、御指導下さった西田秀雄先生、その他の方々に誌上をかりて厚く御礼申し上げます。

お願い

会員竹田潔史氏(二五八番)の台帳住所を照合したいので、ご本人またはお知りの方はご連絡下さい。

No.19

昭和34年6月6日発行 毎月一回

京都市 美術館ニュース

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

誰しも郷土を愛するの心に変りはない。京都に生れ京都に育ち、そして京都に生活を営んで今日に到るを思えば、わがふるさと京都をこよなく愛するに何の不思議があろう。汽車から下り立つた京都駅頭のあの身にせまる爽かさ、そして寂けさを旅人ならぬ私でさえいつも感じるものは、恰も若き日の旅でパリやフィレンツェの駅頭に下り立つたときに受けた印象の如きものである。

自然現象が醸し出す立ち迷う水蒸気が淡灰色に光陰を駆けらげ、自然と人工を調和させて京都の美しき雰囲気を作り出しているのである。市内を取り囲む山々三方三様の山容遠近や市内を縦走する加茂川の清流の自然は人工の背景となり近景となつて、重大な役割を果し来り果しつつもある。斯かる山紫水明の環境にこそ古来数多い画人達をも生み出したのであろう。

十二世紀の初頭、パリ万国博覧会の景物の一つにエッフェル塔が建てられた。閉会と共にこの鉄骨の材料むき出しの景物は、一部市民の非難にあつて取り壊しの運命に立つたが、その破壊の困難と費用不足の障害に遂に



の環境によくも調和をもつて作られたことが今日名物として存在して居る所以である。パリにも京都に似た灰色の雰囲気がある。今日の出版物やスライドを通し

て見てもパリの色彩は一たいに中間色の配列を持つて居り、たとえ原色を取り扱つてもこれを媒介する間色によつて軟かな調子が求められて居る。パリの自然が人工を助けて居るとともに、人工が自然を援けて居る。斯様な美しい所はパリをおいてあまりない。裏通りに過ぎなかつた河原町が高壮な建物や世に出た天主堂によつて、想像もしなかつた新しい街道を作り出し、間の筋であつた御池通が広い交通の要路となつて新装の京都の姿を見せた成果は無論背景の自然や雰囲気助けによるものがある。先づ市民のよき施工の結果であると思ふ。

市街の美

絵と文 川端弥之助

嘗てパリのパンテオンの前の階段にロダンの考える人が据えられた。清浄な整然とした建物の前に、巨匠ロダンのこの彫刻は幸にして場所を得ず調和を欠いて居た。パリ市民の非難の声に遂にロダンも低頭巨像を取扱つてしまった。と言う事実がある。恵まれた自然の環境に甘んずるばかりでなく、よき人工を以てよりよき京都たらしめるためには、市民の美への関心の一層深からんことを希うものである。(春陽会会員、美大教授)

見聞記

— 3 —
岡部三郎

「冬日帖」のこと

戦

争で中止されていた作品買上制度が一昨年より復活した。御承知の通り、従来は買上の基準が、作家奨励の意味だけに止まれる傾向にあつたが、一昨年から学識者によつて委員会がたれ作品価値に重点をおいて合議されることになつた。竹内栖鳳「雨」、小野竹喬「冬日帖」は一昨年度の買上作品である。

「冬日帖」は昭和三年七回画展の出品で、竹喬の最も代表的な作品とされている。昭和三年と云えば、七月に画展が解散したのだから、最後の展覧会だつたわけだ、すでに華岳は神戸に引きこもつてしまつて、出品しなかつた。妻徳は「朝顔」を、紫峰は「つと」おとされて「冬朝」を出品した。その中で、「冬日帖」が衆目を集めた。

いた。新聞雑誌の評論が一齊に、この作品に向けられたことは勿論で、この年も、日本画の洋画への偏向の問題がやかましく論ぜられた。当時の画展評には「これは決して油絵の真似ごとではない。が、この自然の視点は洋風画の畑のものである。小野氏の企ては画面に空気の表現を試みて、その調子も取入れている。しかも、その線、その運筆、ともに日本画の伝習的にも一つの技法である」(川路柳紅)とひどく興奮した調子で書かれている。特に洋画と云う意識は、国展作家に共通して見られる著しい傾向であつて、「冬日帖」に限つたわけではないが、竹喬のこの頃の作品は、いつも洋画と結びつけて考えられ、それが新しさをもちつて好評を博している。十年前「志摩波切村」を画展に出品した時も、鍋木清方は、この画に注目して、洋画風な見方、現わし方と語つてゐる。

明

治後日本画と云えば、いつも絵の近しさ(近代性)がやかましく問題にされるのだが、私は、奇妙な言い方だが、日本画と云う限り、元来そのようなものであると考へてゐる。そこで、私は、先ず、日本画と云う言葉の成立にさかのぼり、日本画の概念を幾分でもはつきりさせておきたいのである。今日の日本画と云う言葉なり、意識は、明治の西歐文明移入後の新造語であつて、洋画に對立させられた意識である。だから、伝統画そのものを

差す場合とか、様式概念として使う場合だけでなく、日本伝統画が西歐の伝統画に出遇う刹那に触発せられる自意識——結論を急ぎすぎるかも知れないが、思想体系としての原理的な概念であるところの芸術体系の意識と云えないだろうか。つまり、一つの思想なのである。この側面が、近代的なイデオロギーに確立されたのが今日の日本画の原理的な概念と考えられないだろうか。

私

は、この源流を米人フェノロサと、岡倉天心の新興日本画運動に求めたいのである。フェノロサの運動は、日本伝統美術の保護と開発とに、その主張の焦点があつたのであつて、当時の画壇で最も主動的地位を占めていた文人画と洋画の二つを弁証法的に對立させて取り上げ、そこに新しい絵画、つまり日本画を想定しようとする。「油絵は磨機の頂点にして文人画は其底石に等しく真誠の画技其間に介して速りに錫碎せられるが如し」と當時の論調が伝へてゐる。この日本画と云う新しい意識なり思想(イデオロギー)については、フェノロサは、機会あることに、繰り返し、繰り返し繰り返す表現で主張しつづけたにちがいない。しかし、私は今その正確な資料をもつていない。彼の死後に出版された Epochs of Chinese and Japanese Art (東亞美術史綱)の緒言に、特に明瞭な表現ではないが「凡人間世界における

たして竹喬が、このような考え方をしていたかどうかは知らないが、この画は竹喬の外遊後の作品であることにまちがいない。大正十年に表僊や波光らと渡歐するのである。竹喬はその頃「不自由な日本絵具を以て近代人の感ずる絵を表現しようとする態度」と人に語つてゐるが、油絵具に比して日本絵具の限界をなげいたものである。私はかつて菊池契月から「小野君の業績は今ではもう忘れられてゐるが、風景画を現代人の目で表現した最初の人です」と云われたのを聞いたことがある。竹喬の自然観照の近代的な性格を指摘したものであつて、過去の表現形式を近代化した吾々の生活感情と一致せしめようとする試みであつた。



竹喬「冬日帖」(六枚中の一)

要

なるにこの場合、日本画と云う概念は、様式概念としての固有の民族芸術を呼ぶのでなくて、明治なり大正の知識人のイデオロギーの所産である原理的な観念のコムプレックスと考へてよい。今日、院展や画展の作家達が高く評価されているのは、こうした考え方が来たものであつて、「冬日帖」(昭和三年)は大正

芸術上の仕事は帰属するところ皆一なりと視る時期、漸く近づきつつありし」と記述し、芸術の普遍的なシェマとして次のような一種の技術論から各時代の様式的な特質を描出しようと試みてゐる。「すべて美術とは、特種な技術が、それぞれの条件のもとで、調和ある空間を構成するわざである。空間は必然に限界をもつ。従つて空間は比例によるところの調和ある形の結合をもつ。眼は限界を追い、手は限界を描く。そこに線が生れ、かくして線は表現の根源的な媒介となる。目に映する光の相対量は空間に他の差別をつくる。これらの量の調和ある取扱いは更に新しい美即ち濃淡を生み、これによつて、心像を表現する能力を更に加える。最後に光の性分即ち色彩がある。その色彩は生来の能力ある手によつて限らない多様と独自のな組合せをつくり出す」と。そして、各時代の美術は、空間構成、線、色の美において特異である」と云うのである。

こ

れは明らかに洋画の技法論であつて、この線、光線、色などの概念は、日本の伝統画(日本画)に新しさを加えるマニエラとして働いたことは芳崖や雅邦の作品を見てもわかるのである。岡倉天心は、フェノロサのこれらの主張を継承し、老荘的な自由精神から雄大なアジア芸術論を提唱したが、国画復興の意識は流石にすつと強い。天心の表現は、暗示的で

期を代表する日本画意識の強い作品なのである。この絵は、竹喬の作品のうちでも「長門峡」(五回画展)「波濤・青梅」(六回画展)と共に竹喬の南画風な系列に入れるべきものであるが、前者に比して温和な自然観照が当時の人々の共感と呼んだのであろう。「ここで永年苦勞して来た阿氏の仕事ははじめていい結果を生み出した」のである。

十

五才の頃、郷里笠岡(岡山県)を出て栖鳳宅に寄門した。竹喬が一番親しくしていた妻徳とはここで知り合つた。明治四二年京都絵画専門学校が創立されると、妻徳と共に、専科に入学した。華岳・紫峰・波光らほかに妻徳や竹喬の名が見える。彼らは四条派の自然主義を基本として習つた筈だが、卒業する頃には、もう新しがつた画を描いていた。その頃の出品と云えば文展であつたが、文展では、いつも彼らのうち誰かが落選した、竹喬も落選組の仲間だが、「鳥二作」が特選になつたとして一応は世に出たのである。彼らが文展を離れて新しく美術団体を結成したのは大正七年であつた。これがやかましい画展である。そして「冬日帖」を出品した年に解散し、竹喬は妻徳と共に文展に復帰してしまふ。今では華岳も妻徳も波光もいなくなつて、紫峰と二人だけになつてしまつた。衆知の通り、京都の最長老であつた。

「冬日帖」が当館に入ったことは、まことに大きな収穫であつた。(本館囑託)

観念的な意味としたとらえ難いものであるが、洋画を、彼が非常に高く評価した科学に立脚した近代技法と認めながらも、彼の立場上、芸術闘争上の武器と弱い表現を用いてゐる。彼は、洋画と云う一芸術問題よりは、西歐文化と云うものをとつと広く考へていたのであろう。しかし、ここで私が問題にしているのは日本画の概念であつて、それに必要な日本画の領域だけに限るならば、日本画と云う観念は、過去に洋画との格闘を常に繰り返して来た歴史をもつてゐる。時には全く対立し、或る時は一部が共存し、一部は同化し、しまいに、そのために全勢力を消耗してしまふ。(決してこれで終りはしない)。はじめ洋画の技法をマニエラ・モデルナとして熱心に摂取しようとした時、不動の原理と見えたこの日本画と云う原理的な観念も広く一般化してしまふと、いつか色褪せた形式概念に退化してしまふのである。また、近頃のようにな西歐における絵画観念の革命の執拗な反響に遇つと、無力な自差しをなげ返すだけで、屈從してしまふほかないか、自壊してしまふか、イデオロギーの性格をはつきり露見する。

合う時に形成される日本画と云う観念或は意識は明治以前のものではない。だから今日美術史家達が古美術と現代美術とを互にフレムトなものと考えて、うづめることの出来ない深い断層をつくつてしまつても別に不思議はない(この問題は、非常に重要であつて、将来の問題に残される)。しかし、同時に注意しなければならぬことは、今日吾々が使つてゐる日本画とか洋画とか云う意識内容は、決して一様でなく、時代や個人によつても同じものではないのであつて、大正期に入ると、つまり、ラル・プ・ラル(芸術至上主義)の芸術観が移入されて、洋画の観念も別な特異な性格をもつて来る。日本画の考え方も可なりちがつたものになつて来る。例えば、画展について、当時の評論を見ると、「近代主義に立脚する画展は所謂洋画的な手法、日本画の手法の間に差別を認めなくなつてしまふ」(川路)のである。更に、この「冬日帖」についても「こう云う画を見ると全然西洋画との区別は無用だと思ふ。……その表わし方(観照)に至つては、西洋的であつて、決して東洋的ではない」(川路)ことになるのである。

興味ひく民間信仰

小牧源太郎氏

△小牧さんは京都より東京の方が有名なようですが▽
いやあ、どちらにしてもあまり有名ではありません。しかし京都なんかでは、画家の名は、

△小牧さんの絵は変つていまして▽
道祖神やイナリさんやオシラ

神などというものを盛んにかくのでそういわれるのでしよう。ここでオシラ神というのはカイコノ神さんで、オは敬語、シラは白、東北地方では桑の木をきつて簡単に目鼻をシミでかいた人形があるが、これが神さまということになつてゐる。こういうものは都会の若い人たちには何の興味もないでしょうが、明治以前には民間信仰として生きていたものです。稲荷さんにしても元来は五穀豊饒の神さんですが、現在では使ひのキツネが本尊みたいになつてゐる。そういうところがまた面白いので絵のテーマにします。

△面白いといひますと▽
若いときは仏教の学校へはいつていました。しかしそこで正直に仏教をやつたというよりはよくサボつた方でした。学校で教える宗教、すなわち宗教学



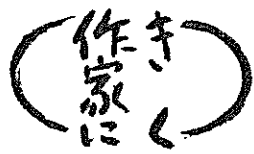
の対象となるような宗教は形而上学的であり、高度のものです。しかしほんとに生きてゐる宗教、信仰というものはそんな高級なものじゃなくて、むしろ形而下的な、実際のものだと思ふよつたのです。そういうものとして民間信仰に興味をもちました。それから精神分析の考え方もある。人が捨て

△京都にも前衛美術の系譜があります▽
「前衛」という言葉もいまと昔ではかなり違います。昔は「左翼」という意味がかなり強かつたようです。津田青楓さんが議事堂と貧民窟を並べてかいて筆禍事件を起したというのが、いまの意味で

前衛画が盛んになつたのは昭和十年以降福沢一郎が独立展にシュールレアリスムを輸入してからですね。北脇君や独立の松崎八笑亭、今井憲一、高木四郎、それに私らでした。その中で北脇君の仕事は高く評価されてよい。北脇君は制作と同時に、あらゆる機会をとらえてシュールレアリスム運動のための会合を催し、意見を發表し、実に積

極的に活躍しました。シュールなどといつても画壇も一般も無関心かきにあらずんば排撃に務めていた時代ですからその熱意は立派だつたと思ひます。それに比べていまの前衛派は恵まれています。

△さきごろのブラジル旅行はいかがでした▽
今までかきためたものを四十六点もつていきましたが、売るといふ点では無理でした。とくに本腰を入れてかいたものはダメでした。しかしそのほかはかり知れないほどの収獲がありました。日本にいたるときと外圍を回つてきてからの結論は同じなのですが、一口にいって同じだといふ結論を得られたことが有難かつた。それをこれからの仕事で發表します。



△戦争中は仏画風のものもかかれまして▽
あのころは絵を描けるほどの人は戦争協力画をかかねばならぬとされましたが、私はそういう気持ちになつたので筆置にあ

一九五八年グループ連合展
行余書芸院展
京都染色美術展
鳳雛書道展
水明書道展
職場美術展
桜学校美術展
御苑サマー・スクール児童画展
時代風俗人形展
京都市中学校書展
私学綜合展
京都工芸展
第13回行動美術展
不思議の種子供アトリエ展
京都学生書道連盟展
勤労者文化祭展
走泥社展
第22回新作展
笹瀬アトリエ展
立命館大学美術展
京都学生美術連盟展

一九五九年京都アンデパンダン展
3月4日-9日
当館では第三回目のアンデパンダン展、主として油絵を二八点陳列。8日には、井島勉、中原佑介、中村義一、矢内原伊作各氏に御出願願つて出品者懇談会を催した。
△印は市後援

第22回自由美術展 16日-27日
第二回美術展 17日-25日
パトリアル美術展 17日-23日
墨人会展 21日-23日
第26回独立美術展 8日-22日
警察美術展 9日-15日
日吉ヶ丘高校美術コース展 15日-19日
書道展 22日-24日
全京都高校美術展 22日-25日
東邦書道院春の作品展 22日-25日
京都書道連盟展 28日-3月1日
美大作品展 15日-20日
日本文化展 16日-20日
日本文化展 25日-4月16日
なお以上の展覧会の外に、八月一日から七日まで五回にわたつて夏期美術講座を開きました。即ち、一日は井島勉氏の美術概説、二日は運実重康氏の藤原美術、五日は黒田重太郎氏の印象派、六日は島田修二郎氏の水墨画、そして七日は河本敦夫氏のモダンアートについてでした。
また春のモダンアート展には村井正誠氏に解説を依頼し、秋の川合玉堂展には川合真一氏と源豊宗氏に講演をうかがいました。

美術館の一年

昨年一年間に当館で開かれた展覧会を、全部収録しました。

当館主催のもの

第十回記念展

33年5月1日-14日
記念展をもちあげるため特別賞をもうけるなどささやかながら手をうつたところ予想以上の点数が集り、京展始つて以来の盛況となつた。陳列数は八八六六。

第十二回市民美術展

8月19日-24日
京展とはちよつと違つて、いわば日曜画家展、日本画、洋画、彫刻合せて二一七点を陳列した。

川合玉堂遺作展

10月21日-11月3日
玉堂が奥多摩で亡くなつたのは三十二年六月。その遺作を集めて展覧する計画が遺作展委員会のもので進められ、先ず東京では近代美術館を主会場として公開、続いて当館に会場を移した。

日本画の性質上長期の陳列は許されないので二週間であつたが、もう少し見せておいてほしい展覧会であつた。
34年1月2日-5日
例年ならば丁度日展の時期で美術館の賑わう頃であるが内容が内容だけに、日展以上の盛況を迎えた。陳列したのは直接オランダから来たものばかりで、大部分はクロラ・ミューラー美術館のものであつた。油絵、サン、水彩を含めて一三〇点。クロラ・ミューラー美術館、東京国立博物館、読売新聞社との共催。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

第一回日展

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

34年1月27日-2月15日
官の手をはなれて民営になつた第一回展。今回は大きな制限が撤廃されたので大作が多かつた。又地元作家のなかでは、西山英雄氏の「更替梯」が文部大臣賞を受け特に注目を引いた。陳列点数は五三九点、内選定作は二七五点、地元作二六四点。

6月

○青陶会展 25日-30日
○モダンアート展 22日-31日
行動美術京都作家クラブ展
○新匠会展 5日-9日
新制作日本画展 11日-17日
保地謹哉指摺児童画展 12日-14日

10月

○走泥社展 27日-30日
○第22回新作展 1日-14日
笹瀬アトリエ展 1日-3日
立命館大学美術展 8日-13日
京都学生美術連盟展 15日-19日

11月

○第22回新作展 1日-14日
笹瀬アトリエ展 1日-3日
立命館大学美術展 8日-13日
京都学生美術連盟展 15日-19日

京都市 美術館ニュース

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

No.20

昭和34年7月3日発行

毎月一回

展覧会案内

6月	京都府制作油絵研究会 5月30日-3日	岩田順三個展(油絵) 26日-28日	▽大阪市立美術館 6月 グループ連合展 8日-14日
6月	福島淳志郎・中井史郎二人展 5日-9日	砥園会諸大家日本画展 10日-16日	▽大阪高島屋 6月 新匠会新作工芸三人展 9日-14日
6月	商業デザイン展 11日-12日	▽大丸画廊 10日-16日	中村尚玲日本画展 9日-14日
6月	黒鷗会展 13日-17日	6月 秋人社展(日本画) 2日-7日	青桂会展(日本画) 16日-21日
6月	陶芸家クラブ受賞者展 19日-23日	緑沼会展(日本画、洋画) 9日-14日	汎欧州秘密美術工芸展 23日-28日
6月	京都木工芸展 26日-30日	淡島雅吉個展(ガラス工芸) 16日-21日	須田剛太郎自選展 23日-28日
6月	池田進郎スケッチ展(日本画) 3日-7日	好美会展(日本画) 23日-28日	▽神戸市立美術館 6月 須田剛太郎自選展 23日-28日
6月	▽京都書院画廊 池坊寛大・府立医大美術部展 1日-5日	ハクライ美術工芸 コレクション展 6月30日-5日	明治の名筆展 16日-25日
6月	同志社女子大こぶし画会展 6日-9日	春虹会展(日本画) 7日-12日	兵庫県日本画家連盟展 2日-10日
6月	白美会展(油絵) 10日-14日	▽丸物画廊 6月 谷本教室ろうけつ染作品展 5月30日-4日	5月14日-16日
6月	京大・成安院大美術部展 15日-18日	吉田吉絵画展 6日-11日	5月17日-19日
6月	美大日本画制作グループ展 29日-7月2日	アン・フアン会(洋画) 13日-18日	5月20日-22日
6月	京都自由写実写真展 7日-12日	同連ホスター展 20日-25日	5月23日-25日
6月	▽土橋画廊 新浜会(日本画) 18日-21日	春の京都猿蓑会作品展 27日-7月2日	5月26日-28日
6月	常設陳列	▽京都国立博物館 6月 朱玄公墨芸展 13日-18日	5月29日-31日
6月	常設陳列	前田竹房密竹芸展 20日-25日	6月1日-3日
6月	常設陳列	6月 卯月会展 9日-14日	6月4日-6日
6月	常設陳列	新吉美術展 16日-21日	6月7日-9日
6月	常設陳列	和田信太郎、鈴木善次郎油絵 23日-28日	6月10日-12日
6月	常設陳列	▽大阪三越 6月 13日-18日	6月13日-15日
6月	常設陳列	20日-25日	6月16日-18日
6月	常設陳列	13日-18日	6月19日-21日
6月	常設陳列	20日-25日	6月22日-24日
6月	常設陳列	13日-18日	6月25日-27日
6月	常設陳列	20日-25日	6月28日-30日

傑作同志

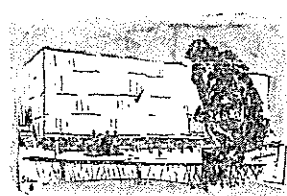
東京の宿で、これから西洋美術館へ行くのだと云つたら、宿の娘さんがすぐに「あたしも行きたいと思つてはいるんですがとても大変な人で見られないんじゃないですか」と云う。美術雑誌は勿論のこと、新聞や週間雑誌にまでさわがれて東京では西洋美術館ブームで大変だとは聞かされていたが、なるほどと思つた。

六月十七日、少し蒸し暑い梅雨晴れのいい天気だつた。国電上野駅の山側から出れば百米も歩かないうちに、右側にあの窓のない四角い石で造つた基盤のような建物が見えてくる。つまり科学博物館の向つて右隣、都立美術館や動物園とむかいあつて位置している。

近づいて行くと周囲にめぐらした鉄の垣が低いので道路から館の庭内が一望出来る。幾分黄味がかつたマッシュウな建物と、一面コンクリート打ちの広い前庭が白っぽいドライ



ロダン<私は美しい>



最高傑作同志の協和 開館した西洋美術館

重 達 夫

な空気をただよわせている。その非情なコンクリートの前庭にロダンの大作「考える人」「地獄門」「カレの市民」等が所々に生きもの黒い塊りの様に建つている。まだ館に入らない先に、路上でこの大胆なル・コルビュジエの設計に心を奪われ、フと四年前同氏に逢つた時のことを思い出した。

それは、西洋美術館設計のための敷地検分に来朝した時のことである。京都に二・三日滞在したが、談たまたま京都の木造の古い建築と現代の新しい建築との調和の問題に移つた時、氏は「時代、様式は変わつてもその時代時代の最高の傑作同志は必ず相和する」という云い方をしたことがあつた。今、この黒っぽい彫刻と白っぽい構造物と「ロダンとル・コルビュジエ」をまのあたりに見てその言葉が頭に浮んだ。

ともかく、今までは日本では見られなかつた風景に打たれたが、ガラス張りのモダンな切符売場と改札を通つて庭内に入る。「カレの市民」を右に「説教するヨハネ」を左に見てファサードの正面入口にゆく。入口の大硝子面は、フランスのサンゴパン社の特製で風圧その他を考慮して造られた見事なもの、「旧松方コレクション展示」の金色のすかし文字も印象的である。

ロダンの群

屋内に入ると、ゆつたりした明るい広間で、目録売場とベンチを置いた休憩場を兼ね



女化粧の化粧

た支障になつてゐる。十時頃だつたがすでに相当の入りである。折よく、富永館長が参院文教委員長が来るとかでそこに居られた。無事開館式を了えてホツとした表情だが、作品到着からその整備と陳列、それにフランスの文化使節を迎えての開館式まで、富永さんの御苦労は察するに余りある。それでも「公開初日の来館者は五千、翌日曜日は八千、今日は四日目で...

越しに、有名な「青銅時代」や「接吻」「永遠の青春」等々がすぐに目につく。吹抜き天井のこの大広間は、三角のトップライトを通過してふりそく自然光線と、床面から作品を照し上げる人工光線との、程よい交錯によつて理想的な彫刻展示場となつてゐる。列べられたロダンの傑作は、先に述べた前庭の作品やファツサードにある「アダム」「エヴァ」「冥想」等モニュメンタルな作品を合せて...

のような間仕切りはない。しかし、天井の高さや光線の加減や壁面の材質などに種々の工夫をこらし、ル・コルビュジエの所謂モデニール(彼の建築のすべてに利用しうる調和のとれた美しい尺度)が適用されてゐるのであるか、変化に富んだ素晴らしい会場である。絵画は約三百点揃つて来たうち今回は百六十点程が先づ陳列されてゐる。ドラクロワ、ミレー、クールベ、あたりからピカソに至る十九世紀後半から二十世紀初期にかけてのフランス作家のものだが、印象派がその中心をなしてゐる。周知の通りである。こんど揃つて来た作品は松方幸次郎氏が収集された全作品の四分の一位だと云われてゐるから、この外に八千点以上の浮世絵の大収集と思ひ合せ...

見終つて、中二階の館長室を訪れた時は、長時間の緊縮で相当疲れてゐたが、早速、若し地方巡回展を計画される場合は真つ先に京都でやらして欲しい旨をお願いした。しかし評議員会で門外不出の原則が決つたようで残念乍ら困難な事情にあることが判つた。しばらく難談して館長、次長にお別れして一階ピロティの事務室に立寄る。事業課長の嘉門安雄氏が連日活動の疲労でしばらく休んでゐると聞いて淋しかった。今回は陳列されてゐない百三十点余りの作品にはかなり被損してゐるものがある。修復作業に忙しそうである。ついでに所蔵庫の内部も見せて貰つたが、完全なもので羨しかつた。館員の諸君にお別れして屋外に出た時は、屋通りの太陽が相当地暑かつた。(当館館長◎カントも筆者)

第二回の日展は当館ではこの十二月中旬から一月中頃まで開くことに先の日展会議で決まつた。昔から東京の次は京都で開くのがしきりになつてゐたが昨年の第一回展だけはゴッホ展のためにこの定例が破られた。今度はもとに戻るといふのである。京都からの審査員は、(日本画)福田平八郎、麻田舟次、宇田萩郎、山本倉丘、猪原大華(三ツ山鹿清華、桶部弼式、小合友之助、番浦省吾、浅見隆三、井上治男(書)日比野五郎の各氏である。また梶原耕三、岸田竹史、宮下善寿、谷辺橋南氏らは会員に推挙された。なお出品規則は昨年とは幾分違つてゐる。例えば、昨年は全く無制限であつた大きさが、今年は日本画、洋画、書に制限がつけられてゐる。日本画百五十号以内(額装を含まず)、洋画F百号以内。但し審査員、出品委員者などはF八十号以内。書は仕上り縦25cm×横120cm横巻は240cm以内となつてゐる。

Table with 2 columns: 見 (View) and 聞 (Listen), 紀 (Record) and 談 (Talk).

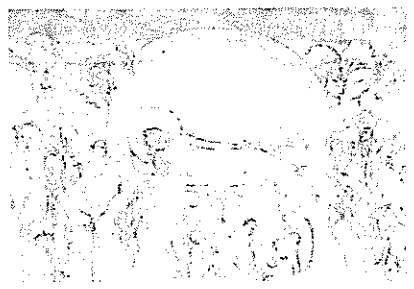
岡部三郎

国展のこと

一二年に当館が収蔵した作品を別にわけもなくかきつづけて来たが、取り上げた作品或は取り上げようとする作品がどれもみな戦前のものばかりで、大正期に何かの意味で画壇に出た作家に限られて来るのは、日本画の蒐集と云う立場から云うと、栖鳳以後の、この時期に所謂京都派の問題作家が多く集つてゐるのだから、自然とそういう結果になるのである。そこで私は大正期の京都の新しい感覚と精神とを代表すると一般に考えられてゐる国展を、それらの作品の時代的背景として極く手短かに取り上げ、前号までに挙げた作品紹介の不足を補い、号を追つて館の収蔵品に触れて行くときの予備知識として役立つたいのである。

展と云つても、若い皆様は御承知ないかも知れないが今日の国展(洋画団体画会)のことでなくて、正しく云うと国画創作協会のことである。四〇年前のことである。京都絵画専門学校の一回生であつた華岳・紫峰・晩花、同じく専科生であつた麦穂・竹喬らが卒業して間もない頃、明治の時分からつづいていた文展から独立して結成した日本画の団体であつて、発会式を上野の精養軒で挙げたのが大正七年一月であつた。宣言書には以上の五名のほかに鑑査顧問として竹内栖鳳・中井宗太郎の名が運ねられてゐる。それを普通に国展と呼んでゐるのである。それも、そう長く続いたわけではなく昭和三年第七回展覧会を最後として解散してしまつたのであつて、その間、大正一〇一二年に麦穂・竹喬・波光(一年おかれて会員となつた)ら同人が外遊したので展覧会としては前後七回開催しただけである。丁度文展が帝展に改組される直前のことで、いつもながらごたごたしてゐたが、洋画ではもう四年前に二科会が独立してゐたし、日本画でも同じ年に大観や春草らによつて美術院が再興されたし、翌大正四年には田口拘汀は清方・豊華・百穂・素明・映丘をあつめて金鈴

社を結成した。これらのことは今の言葉で云えば、文展はもうすでに曲り角に来ていたのである(翌年には帝展に改組されねばならなかつた)。まだ二〇代をいくらか出ないこれらの若い世代の出品に對して文展が充分な理解を示さなかつたのである。しかし、彼らはもう在学中から文展に入選してゐたし、紫峰「花くもり」麦穂「大原女」竹喬「島二題」華岳「阿弥陀」など受賞もしてゐたのだが、当時鑑別と云つて今日で云う落選もたびたびしたのである。それが彼らを文展から去らした直接の理由であつたと竹喬は後年語つておられる。



死の聖者(草稿) 村上華岳

展の宣言書の最後にわざわざ理由書と云うものが付け加えられていて「世間には本会を以て反文展だと誤解する人が

あるかも知れませんが自分の理想はそれより一層高く云云」とあつて流石に若い人達らしい表現で彼らの立場を釈明してゐる。それに引き続いて「純粋な芸術の全一に生き、其創作を後世に伝えたい」と途方もない語句で自負を語つてゐるが若い彼らはまた本気でそんな風にも考へてゐたのであろう。品は未完成の技術から来る共通した独特な類型のようなもの認められるが、一貫した西歐的なイズムの意図があつたわけではない。彼らにとつては「個性の創造は作品の生命」であり「各自固有の素質」を重んじる至極観念的な集りであつた。大げさな云い方かも知れないが、文芸復興期にレオナルドは中世の組合的な地位にあつた画家を近代の芸術家の地位に解放しようとして人文主義に接近したように、彼らの場合、学校が職人画家から近代の芸術家に育て上げる役割を果したのである。私は栖鳳を稀有の才能をもつた最後の職人画家と解してゐるが、確かに彼らは栖鳳とはちがつてゐた。華岳や波光が形而上的なセンチメントをデオートーに求めたり、麦穂や晩花のように自然観照の態度や構図や線の原理をセザンヌやゴッガンなその西歐画家の作品に求めようとしたことも

ル・コルビュジエの空間 二階の絵画展示場はロダンのデッサンから始る。一階の大広間の吹抜の部分を中心に、その周囲全体が広い展示場になつていて部屋

第二回の日展は当館ではこの十二月中旬から一月中頃まで開くことに先の日展会議で決まつた。昔から東京の次は京都で開くのがしきりになつてゐたが昨年の第一回展だけはゴッホ展のためにこの定例が破られた。今度はもとに戻るといふのである。京都からの審査員は、(日本画)福田平八郎、麻田舟次、宇田萩郎、山本倉丘、猪原大華(三ツ山鹿清華、桶部弼式、小合友之助、番浦省吾、浅見隆三、井上治男(書)日比野五郎の各氏である。また梶原耕三、岸田竹史、宮下善寿、谷辺橋南氏らは会員に推挙された。なお出品規則は昨年とは幾分違つてゐる。例えば、昨年は全く無制限であつた大きさが、今年は日本画、洋画、書に制限がつけられてゐる。日本画百五十号以内(額装を含まず)、洋画F百号以内。但し審査員、出品委員者などはF八十号以内。書は仕上り縦25cm×横120cm横巻は240cm以内となつてゐる。

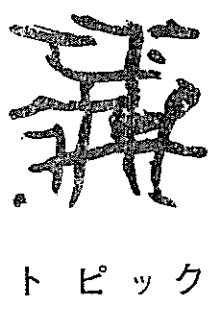
当時彼らの存在を特異なものにしたには相違ないが、その底流には彼らの若い世代の生活感情を学校で習得した古い四余派の技巧では表現し得ない矛盾の意識があつて、それが彼らを結束せしめたのであり、その同一矛盾の処理と云う問題から出発した発展過程の中で、彼らが宣言書で予見したように各作家の素質がそのような様々の形で出て来たとも見られよう。つまり東京で日本画が明治に経験した問題を彼らは大正の問題として経験したのである。その解答は彼らが夫々の作品で示したように立派なものであつた。

彼らが学校を卒業すると、華岳は高台寺の円徳院に、紫峰は岡崎別院の前に住んで美術工術学校以来十数年の交友をつづけた。晩花は知恩院の真源院に、もと栖鳳門であつた麦穂と竹喬は同じ知恩院の崇泰院に夫々寄寓してゐた。その頃であらうか、華岳が文展に「白頭翁」を出品して落

ザツキン来日

六月の二十四、五の両日、大阪新朝日ビルの文化ホールでフランスの彫刻家ザツキンの披露展が開かれた。ロシア生れのこの彫刻家はことし六十九歳、船橋好からしても世界彫刻界の長老の一人である。わが国でのなじみはつとに深く大正八年二科会に彫刻部が設けられて以来毎年作品を送つて来たし、昭和三年の二科展ではザツキンの特別陳列も行われた。次いで昭和六年には外人としては珍らしく二科会員に迎えられたが、立体派彫刻の展開という仕事を通じて日本の美術界を啓蒙し、かつ親しまれて来た。披露展で当のザツキンは「この会場は私の作品が構成する私のジャングルである。ジャングルはおのずから迷路をもつているが、貴紳淑女が自由に鑑賞されることによつてそこに別の迷路が生じるだろう。それがこの展覧会の意味である」といつたあいさつを試み、とにかく文化ホール全体を使った豪壯な会場がひどく気に入つた様子であつた。今度将来された作品は一九二七年から昨年まで、およそ三十年間の仕事で年代を追つてまんべんなく集められているのが特徴で、彫刻五十点のほかにはブアツンユ二十点がある、

ザツキンは詩人的資性の豊かな人で、内包するポエジーは音楽の微妙さをもつて作品の創造に繊細、敏銳に働き続けている。さらに層厚く幾重にもとりまかれ、よく熟れた文化圏で育つたという香りが濃厚である。そういえば同じくニグロ彫刻などにヒントを得たにしても、それをテコに美術の二十世紀を開いたピカソなどと異つて、その情緒的でテンパラメントにあふれた作風はむしろ「立体派の十九世紀的解 積」という時代転置さえ感じさせる。ともあれ今秋には朝日新聞の主催で一般公開される



福田さんの個展が五月二十二日から六月三日まで銀座松屋で開かれた。出品作品約六十点、昭和九年以来のこの人の画歴にとつて二度目の催しであるが、今度は場所が東京で開かれたことに意義がある。氏は画壇へ出発の頭初から東京の文化圏とは違つた方向を目指していた——つまり裸形思想が

絵画から浮出することを拒否して来たのである。氏の聡明な知性にとつては思想は喧騒に過ぎたのだから、画材を花鳥風月に限定し、この中へ厳密に、しかし静かに、精神を沈めて了つた。それでも尚氏の知性の微かに滲み出ているのがあの装飾画風を為しているのだと思う——殊に氏独特のあの乾燥を。若し静かな散文と云うものが絵画にありとすれば氏はその見事な一典型をなしていると思える。若しこの個展の更に未来へ延びる線を予想すればそれは思想だろう。氏が拒否した思想が、しかしやがて、靈然として氏の画面に漂揺してくる所にあるだろう。

平八郎の自選展

相次ぐ須田展

朝日新人展

洋画家須田太郎氏はここ数年病床になじんでまだ快癒に至らないが、その業績に対する世間の注目と評価はようやく本然のものとなつてきた感がある。画面の幽暗の中につねに強靱な精神が鎮座し、層の厚い大人の感性に支えられた作品は通俗的な外見の派手さと無縁のものであつたため広くも

この間京都の高島屋で開かれた朝日新聞主催の「朝日新人展」は日本画、洋画、彫刻、工芸のイキのよい新人の披露展として話題をよんだ。さらに今年は大坂の新人と合体して「朝日新人連合展」に発展したが、来年から作家の選考には委員会制度を設けて行方意向もあるらしい。年を追つて現われてくる新人を世間に紹介するのが眼目だが、これからの勉強という層に励みを与えるし、新人同志の間でも、ここに招待されれば美術家としての脈があるということにもなるようだ。

選んだのも、紫峰や竹喬が文展に善選した作品を院展にもちこんだりしたのも、全く不遇な数年がつづいたのである。だが、第一回國展が開催されると、彼らが予期もしなかつた大きな反響を呼んだのである。

館には國展の作品は紫峰「獅子」と昨年収蔵した竹喬「冬日帖」があるばかりでまことにお淋しい次第なのである。近代美術館は華岳「日高川」・麦穂「舞妓林泉」をもつており、紫峰「奈良の鹿」を買上げようとしている。しかし、当館には幸い華岳「聖者の死」の草稿をもつている。本画はすでに焼失してしまつたから大切な資料なのである。(当館囑託)

奥深い漆芸の世界

中村弘子さん



▲漆の仕事をはじめられたのはいつごろからですか▼
江戸時代の中頃から家が代々千家のお仕事をしてみましたので、小学校のころから二階の父の仕事場の上つてトノコをこねたりして小さいときからなじんでいました。しかし本当にやり出したのは美大へはいつてからです。

▲漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

やないですが大変新鮮に見えたことを覚えています▼
草花の咲く野原に三人の少女が踊っている図柄でした。人体は真黒に仕上げ、緑の野はタタキ塗りです。やわらかい感じを出しました。タタキ塗りというのはウルシの粘着力を強くしてたたきつけるようにしてかいていくのですが、自分のもつている情感や気分を自由に

とにかく漆芸にはほんとに奥深い技術がいります。下地に漆を塗り、磨き、さらに漆を塗り、漆の結晶から出来上つていきます。そしてこれは創造的な仕事の場合も、伝承的な仕事の場合でも、漆器の本当の美しさ、強さを

中村弘子さん 昭和七年京都生れ、千家十職中村宗哲市立美術大学工芸科塗装専攻卒業、同年日展に初入選、以来出品を続けています。朱文会会員。現住所は京都市上京区武者小路新町西

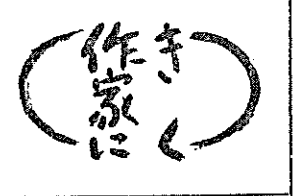
▲漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼



漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼
漆の仕事を始められたのはいつごろからですか▼

京都市 美術館ニュース

発行所 京都市美術館 京都市左区岡崎公園

No.21

昭和34年8月5日発行

毎月一回



ヴァン ドンゲン
〈ターバンの女〉 油 絵

西洋美術館の作品紹介

日本の現代洋画

— その弱点の克服には —

京大教授 上野 照 夫

〈夏期講座講演要旨〉

絵と向い合つて

大体われわれは絵に限らず芸術作品をみる場合何を見るのだろうか。目を開けば何かは目に映る。何かを見れば何かを感じられる。それでよいという人もある。しかしそれはただバク然と觀賞することであり、作品を娯樂的に楽しむにとどまつている、もう一歩踏み込んで作品を積極的にとらえるためには目のつけどころが必要である。ただ漫然と見て自然にまかしておくと、うだけでは成果は保証できない。ところどころに目をつけるか。人によつていろいろ目のつけどころがある。それは無数であるかも知れない。しかし無数というのは、個人的な勝手

三つの着眼点

とも結構できるのである。絵も有機的な統一で考えてよいが、その統一を分析してみることは、絵を深く理解するためにぜひとも必要である。さてこれらの三つの観点から日本の現代洋画の問題にすればどういうことになるか。日本の洋画がどんな点で問題をもっているかを点検したいと思う。

きままな見方をもちかぞえてのことである。こと芸術的な目のつけどころとなつてそんなに無数にはない。私は作品ができるには次の三つのものがなければならぬと思う。すなわちテーマ、材料、形式の三つである。これは一つの作品の中に別々に存在するのではない。この三つは融合し一体となつていなければならない。しかしわれわれが作品を点検する段には一つ一つ切り離して見たつて構わない。またそう見るこ

大原美術館を

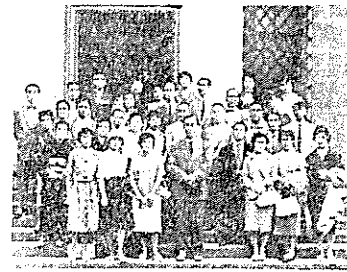
見学 友の会

待望の大原美術館見学会も六月六日・七日両日に無事終了しました。京都駅集合の際は小雨に見舞われましたが、神戸を過ぎる頃から予報を覆して晴れ間も見え、殊に七日は真夏のようなカンカン照りで予定通り瀬戸の風光も満喫できました。

さて、倉敷では先ず民芸館の主任さんの説明に感服を被りました。要するに民芸品とは、「名もない民衆の間で、親切に作られ、よく働き、簡素な美しさを具えた、健康で保ちのよい品物」だそうで、いばらない美しさを具えた頑丈なこれらの品々によつて誰もが美しいよい暮らしをして頂きたいと主任さんは述べられました。われわれは、高性能の乗用車や冷蔵庫、蛍光灯、扇風機などの電化製品のイメージをしぼし忘れ、果ては手にしたこうもり傘の代りに「ミノ」を着て歩かねばならぬような錯覚にとらわれつつ館内を一巡しました。

次に考古館を見学しました。ここでは中国歴代の考古品、わが国各時代の近頃からの出土品などを興味深く見せて頂きました。

この民芸館考古館の附近は、多くの写真雑誌や観光紙を賑わして



大原美術館での一行

いるところで、蔵屋敷と河岸のたすまいは流石に江戸幕府の天領としての貫録と情緒を偲ばせま

しむことができました。ここから倉敷に別れを告げた一行はバスで岡山市内の旅館に向い、繁華街に近い宿では夕食を共にして楽しい夢路をたどりまし

明くる日は快晴に恵まれてすがすがしい散歩のあと十時からバスで鷺羽山に向い、筆舌につくし難い展望を堪能、淡川海洋博物館に寄つて宇野駅に着いた頃は少々疲れました。けれども宇野からは全

員ゆつくり座つて移りゆく備前平野に別れを告げ、午後九時半無事京都駅で解散しました。友の会としては始めての見学旅行であつたため、お世話する者の手落ちから何かと御不満もあつたと思ひますが、始終和やかに、御協力頂き厚く御礼申し上げます。同時に、おこし願えなかつた方々も次回には是非参加下さるようお願いし、御報告いたします。

グループ連合展(14日-19日、当館)は会員証提示で無料。同展は「京都青年美術家集団」「実体美術」など新人グループの連合展で、出品は油絵など約二百点。

展覧会案内

7月

水明書道展	10日-12日
グループ連合展	14日-19日
職場美術展	15日-19日
書道祭展	25日-26日
▽京都府キヤラリ	
池田遙邸スケッチ展	3日-7日
四階美術展	9日-13日
アルフレット・パウレット個展	14日-17日
独立美術五人展	18日-22日
上村淳・隈部琴子二人展	24日-28日
第三回日本画新人展	29日-30日
▽京都書院画廊	
古津三男個展	3日-6日
京都自由写壇展	7日-12日
川村幸久二人展	13日-16日
久保駒太郎グループ展	18日-23日
滋高美術展	27日-30日
▽土橋画廊	
祇園会展	11日-15日
扇会展	18日-20日
孫隆会日本画展	23日-26日
▽大丸画廊	
舶来美術工芸品展	5日まで
トリマ(泰西名画複製展)	7日-12日
中古道具市	14日-19日
竹杖会展	21日-26日
晨光会展	28日-8月2日
▽丸物画廊	
第十回東大京大連合写真展	4日-9日
宇治川写生大会作品展	11日-16日
▽高島屋	
第一回青丘会展	1日-12日

美術館夏期講座

7月27日-31日

好評を博した美術館夏期講座の第2回を次のように開催いたします。前回同様一流の講師を迎え、「現代の美術」をテーマに開講し、プリチストン美術館から特別フィルムを借用して美術映画映写も行いますが、人数の制限がありますから早くお申込み下さい。

講座の概要

期間 7月27日-31日の5日間
毎夕6時半から約3時間
会場 京都市美術館
募集人員 申込先着順一〇〇名
受講料 全期間1名につき 二〇〇円
(友の会会員は一〇〇円)

申込は 7月10日(金)から
受講料をそえて美術館へ

▽講師(五十音順) 京都大学教授 上野照夫、京都学芸大学教授 成基、関西学院大学教授 源豊宗、シナリオライター 依田義賢、評論家 吉村正一郎の各氏を予定しております。

▽映画は、福田平八郎、高村光太郎、鍋木清方、横山大観、梅原龍三郎その他有名画伯のアトリニにおける日常生活や、制作のようすを収録しています。



モロ一 <聖チエチリア> 水彩

内面的に自己の世界をつくりついで、もうその白墨はただの材料でなく素材となす。芸術的に生かされた材料が素材であり、芸術作品になるためには材料が素材に高められなければならないのである。ところがこの材料の素材の扱いについてもわれわれの洋画家のレベルは低い。

材料と素材

第二に材料の点についても日本の洋画家は少なからぬ弱点をもっている。ここでも材料と素材の関係について筋道を立てておく必要があるが、材料という場合単なる物質を意味する。ここに白墨がある。これはものをかく材料であり道具である。ところが私がこれに刀で彫つて彫をつくつたとしたら、もうその白墨はただの材料でなく素材となす。芸術的に生かされた材料が素材であり、芸術作品になるためには材料が素材に高められなければならないのである。ところがこの材料の素材の扱いについてもわれわれの洋画家のレベルは低い。

四角ばつてかかれたり、いろいろ変形される。そしてそのようにかかれたリンゴは、その独特の形を通じて独自の思想、情感を語るわけである。だから絵画における色と形も、ものの形を示すといふにとどまらず(全くものの形を伝えない絵画もある)言葉と同じ表現の機能をそれ自身の中にもつている。一般に造形言語とよばれるのがそれであるが、日本の洋画家にはこのように色と形で語ろうとする造形言語的思考が希薄である。日本の画家の色はせいぜい「あきれい」という程度に止まると、それ以上に色が語つていない。早い話が国際美術展などをみれば、気がつくことは色がきたなく、輝きがないことである。チューブにはいつた絵具はキャンバスにつけられてはじめて素材となるのであるが、すぐれた作品となるためには絵具という物質に作者の気持が乗り移つて生命をもち、画面において生きたまものか本当な「美しさ」というものはそうなつてはじめて得られる。すぐれた画家といふものはテーマのモチーフに神経を使うと同様に材料の素材にも神経を使うものである。ことしの国際美術展には福沢一郎の大作があつた。これなどは絵具がはりぼての岩のような具合につけられていただけで材料の素材化が手薄である。というよりそんなことは忘れ去つていふようにみえる。

形式割れの画家

さて第三に形式の点からみて日本の洋画はどうか。さてここでも用語の予備の整理が必要だが、△形式△といふは狩野派、琳派といふようなもので、個人に直接結びついたスタイルではなく、一般的な流儀のことである。それが個々の作家の内面を通過したときはじめて△様式△ないしは△作風△となる。現代洋画の根本になつていふものはヨーロッパの二十世紀の作品であり、これに学んでいる。しかし出来上つた絵づらを見てそれを

横すべりにとり入れるだけでは学んだことにならない。どういふ切実な要求があつてこのような表現形式が出てきたか? それを追求し理解して、作品の裏にあるものを見る。そして追求の結果、個々の作家の内面を通して既得の形式が理解されたとき、それははじめてその人の様式として利用活用されるのである。ところが日本の画家はあまりにも形式にこだわりすぎる。しかもそれが様式化されるほど研究され、骨肉化されるのならばよいが、絵の表面だけにどまつていふ。大きくわけて具象と抽象という形式についてはどうだろうか。たとえば作家も世間もあの画家は抽象なら抽象と頭から決め込んでいる。だからそういう抽象画家が写実的な絵でもかいたとすると、△これは完結か△△それとも画風が変つたのか。そうだとすればいつから? △しかしそんなことはどうでもよいのである。また反対に石井柏亭のような人が生前に抽象画をかいたとする。そうすると△よい年をしていまだと抽象画をやつていふ△というようないふもいわれる。しかしそんな評判はどうでもよいのである。画家は自分の絵のスタイルについてどうと自由に構えているのがよい。ところが抽象の画家は具象を無視し、具象は

秋に横山大観展

横山大観は昨年二月二十六日九十一才の高齢を以て死去した。彼が明治・大正・昭和の三代代を通じて日本画壇一の巨匠であり、天心歿後の日本美術院を率いて奮闘の生涯を終つたことは周知諸人の三嘆するところである。彼の絵には優れて気魄と情熱が溢れていることはけだし当然であろう。

二十一人の新人

「京都日本画家新人展」が八月中旬に東京と大阪で開かれるが、その披露が先月の二十九、三十の両日京都府ギヤラリーで開かれた。下見としての公開であつたのと折からの酷暑で観覧者は少なかつたが、写真入り、略歴付きの目録も出来上つてなかなかの心意気がみられた。肝入りは京都府で地元の日画家をにぎやかな東京、大阪へ少しも紹介し、これを機に一層奮奮してもらおうという趣旨。他都市への進出は費用の点でも大変だから新人にとつては有難い。今年で三回目である丘社、衣裳会、朴土社、パンリア



TOPIC

出来栄であるが、これについてはひとまず東京や大阪の観覧者にかけておこう。

「作家訪問」試写会

七月末に開かれた美術館夏期講座にはプリヂェストン美術館制作の美術映画「作家訪問」が上映されたが、これは別にスクリーンに登場する作家やその家族を招いて観賞会を行った。フィルムは美術界の大御所、大家の日常、制作風

景を描き、後世への美術資料をも兼ねようというもので、地元作家では故西山翠嶂、徳岡神泉、堂本印象、福田平八郎、小野竹斎、榎原紫峰氏らが取められ、観賞会には作家のほかには榎原夫人、西山綾子さんの顔もみえた。静かに庭を歩み草木を愛でるありし日の翠嶂、植込みの香葉に「サミ」を入れる印象、老僧のような面持ちで西洋古典音楽に耳を傾ける紫峰、つましい数個のナスビをみつめて造形の妙技を展開するアトリエの平八郎など、美術家の生涯や普段には立入れない仕事振りがのぞかれ、興味深いものがあつた。

府キヤラリー改装

立地条件がよく美術家から愛用されている四条御旅町の京都府ギヤラリーは会場を美化するため八月一ばいをかねて改装工事を行う。このため七日以後九月まで閉館するが、今回は工事で風抜きの仕口のあとを残している天井に吸音テックスを張り、ハダカの螢光灯を間接照明に切替え、球数を増して現在より五割方明るくする。さらに四条通に面しているガラス窓を閉ざして陳列壁面にする計画もあるが、これは予算の関係で見送りになつた。

抽象と具象の間

しかしこれは偏狭な誤つた態度である。イギリスの評論家リドもある評論の中で「イギリスのある作家はあるときは具象に、またあるときは抽象に近づく。具象抽象の間をいきましている」といっている。それでよいのである。大切なのは具象と抽象の間であり、具象、抽象はその両極端にすぎない。だから気がむけば具象にあるいは抽象に、自由な試みを展開すればよい。それを抽象画家、具象画家という風に自らをしばりつけて身動きをとれなくしているのは馬鹿なことである。日本の抽象画には味もつけもないものがある。こんな絵がよくかいたものだと思うほどである。△現代絵画は情緒を排除する△といふことをウノミにした結果である。しかしそれは情緒を捨て去るのではなく情緒を画面の底に沈めることである。また一方では写実には違いないが看板絵のような作品もある。ともに自からを狭く限定し、動脈硬化した証である。そしてこれは結局画家が形式ばかりにこだわることから起る。しかし制作の本質は形式にはない。それよりも形式に対してもつと自由に構えたいで自己の様式を築かなければいけない。

見	聞
紀	談

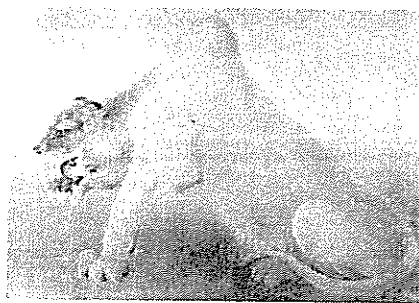
榊原紫峰の作品

展は地元の京都でまゝから高く評価されて来たが、近頃東京でもそれに劣らない評価を耳にするようになった。ところが京都美術館では、極く最近まで、同展同人の出品作は榊原紫峰の「獅子」を収蔵してただけでまことに淋しいものであった。それも館が出来る前、大札を記念して市に寄贈されたものである。終戦後になつて村上華岳の草稿二点が遺族から寄贈されたが、国展と直接に関係のあるものは前号で述べた第一回国展出品「聖者の死」の草稿である。他の一つはその二年前の文展に出品して特選をうけた「阿弥陀」の草稿である。表徳の作品では第十四回帝展出品「平牀」があるが、国展が解散して五年後の、表徳の死の三年前の作品

である。入江波光・野長瀬晩花の作品はない。そうして見るとこの「獅子」屏風は館にとつて、昨年当館の収蔵した小野竹喬の「冬日帖」と共に非常に重要な作品となるわけである。

紫

峰は生粋の京都の人で、絵でもどこかそのようなところがわかれる作家であり、花鳥画を得意とした。小学校を卒えると京都市立美術工芸学校に入った。同級に華岳がいたし、



榊原紫峰「獅子」半双

二年上級に波光がいた。当時榊原文幸と云う画家の名が見られるので何か血族関係があるかと思つていつか紫峰さんにお尋ねしたら全然関係がないと云うことであつた。何んでも高島屋と職業上関係の深いやはり画人の家に生れたそのうであるが紫峰さんからはつきりした答を得たわけではなかつた。昔山・始更らも兄弟である。紫峰はこのような家で生長したのであり、早くから画人としての教育をうけたのである。紫峰の名も山紫水明の地に因んだ父の命名とか。しかし、紫峰が近代画家として実際に育つたのは京都市立絵画専門学校に入つたからである。紫峰が花鳥画を選んだ動機らしいものを、自己の小さな魂の発展として幼少時からの動植中への熱中と結びつけられているが、それは絵画

「アール」とか云う文化サークルが作られ、この時代らしい文化的な雰囲気をつくり上げていた。

表

榊や竹喬は黒田重太郎・新井謙也らの洋画家と共に、最初からこのグループに属していたが紫峰の名は見えない。同じ明治の末頃に美術工芸学校で一年以上級であつた平井操仙の桃花会の会員として波光の名と共にその

名を連ねている。しかし、紫峰が洋画家に接近して行つたのもやはりこの頃であつたらしい。紫峰の卒業制作「花ぐもり」（第五回文展出品）の写真（本画は焼失）を見て、既に新しい時代の絵であつて、純粋な日本の契機からばかりでは到底理解し得ないものである。紫峰の画壇活動は初期の文展と国展に限られていて、代表作も国展に集つてゐる。

画

風は、精緻な写実を契機としたもの、例えば「青梅」（第一回国展）、桃山障壁画に摸く「赤松」（第二回国展）の系列、中国画つまり宋元明時代の花鳥画の感化の強いもの、例えば「雪柳白鷺図」（第四回国展）の系列に属するもの三つに大別することが出来る。「獅子」はこの最後のグループに属するものであり、表現様式から云うと「奈良の森」（第三回国展）と近い関係にあるものである。その外主要な作品を挙げれば「蓮」（第五回国展）「冬朝」（第七回国展）があるが、中国画からの感化は紫峰のどの作品にも一貫して見られるものである。そして当時は花鳥画の空白時代であつたから新しい花鳥画家の出現は多大の期待をもつて迎へられたのである。

この「獅子」が出品された年は、表徳の「大原女」のほかは、

（当館囑託）

伊太利・風景画

小野竹喬氏

京都画壇の大先輩小野竹喬さん。頭髪こそ大分うすくなられたが、先代羽左衛門に似た福耳で、ここにこ笑われると実に若い。血匠も平常、明治憲法発布前年の生れとしては真に斐録としてられる。家は等持院の静かな一隅、椽側に夏陽をうけた楠が枝を差伸べ、床の間には僧寂巖の誦詩読書

「いつ頃からここに在住いのですか」

「大正十一年。当時この辺はひどかつたですよ。一面の藪でね、夏の果がありましたが、殊にひどいのが蚊で、便所にゆく時なんか先に紙を燃しておかないと



岡をね、馬車で登つてゆく路なんに実には綺麗だ。尤も、あそこはオットはバツアのものには及びませんよ。ナポリも好きですね、綺麗な女がいて、それが君、襦袢をまとつてゐるんだから余計綺麗だ。表徳君なんか感激しちつてね。僕は伊太利では実はマンテナアに感激しました」「それは、しかし、先生の趣味に……」「成程、

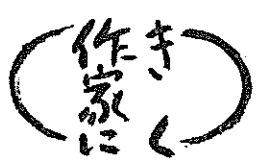
しませんでした。好かつたのはブレネクだ。それからこれは一寸意外ですがね、大英博物館にある羅之の女史箴が傑作だ。細くて美しくて風霜を孕んでゐるところ——何千里の異邦で東洋の美に打たれようとは思ひませんでした」「すると結局、東洋の美に対する自信を得て帰られた訳ですか」「反対です。あの壁画や油絵の大集積を前にして日本の墨や紙を想うと意気沮喪しましたよ。けれどこれは我々の宿命ですからね、仕方がない、この宿命を甘受しようとの静かな心構はこれを得ましたね」

こう云い乍ら小野さんは机上にある水墨画集をばらばらとめくつて行かれた。黙庵・可翁・如拙・周文・梵芳、

「こら辺りの禅僧はいね」。そして氏の指は暫く一葉の上に凝と止つてゐる——浦上玉堂「東雲歸雪図」。僕は同郷人だから云うんちやないが、玉堂は好きだなあ、何時どんな所で見てもびんと来る。詩的精神が山谷にこたまするとこんな絵に成るんちやないか

小野竹喬氏 明治二十二年岡山県笠岡生。竹内栖鳳の門に入り、同時に京都絵師第一回卒業生。大正七年国画創作協会設立に参加、大正十一年欧洲に留学す。昭和三年同協会解散後は帝展に入る。現在、芸術院会員・日展常任理事

そして氏は続いて風景画の話題には入つてゆかれた——氏の精神の深所にふれる、だから、氏としては語り難い話題である。「僕は人物画は下手だ。これは問題でない。花鳥静物ね、見る分には実に好きだなあ、君、宋元のあれらを見て御覧、あんな冷い静かな世界が他にありませんか。到底僕などの及ぶ所でない。成程僕は五十年來風景ばかりかいてます。別にそんな積りもなかつたのだが、まあ僕の本姓ですなあ。僕は自然を相手にしてヤコブと天使みたいな激しい格闘はできませんよ。僕の本姓を素直にはつておくと山や河には入つてまああの程度の遊びをしてるんですね。素直な戯れか。僕の兄がね、小さい時侯の頭をなげやら、こいつの取柄は素直なところだけだ」とよく云つたものですがねえ」。



「それでどうでした」「伊太利が好つたですな、あの画ならもう一遍行つてみたい。アツシジの

展覧会案内

8月

美術館

4日—9日
核学校美術展
御苑サマースクール作品展

12日—13日
22日—31日
25日—30日
25日—30日
25日—30日
25日—30日
27日—31日

5日—6日
室内装飾織物意匠圖案製品展

大丸画廊

19日—23日
日本画四人展
京都在住作家日本画小品展

丸物画廊

29日—30日
雲閣会展(南画)

京都書院画廊

10日—13日
14日—17日
24日—27日
27日—31日
福沢忠夫個展

京都市美術館ニュース

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

No. 22

昭和34年9月10日発行
毎月一回

▽大阪市立美術館
常設古美術展 絵画、彫刻、工芸、考古資料のほか古代イタリア土器、土偶など。
新協美美術展 25日—31日
新協作家協会展 25日—31日

清水六和氏

京都陶芸界の長老であった清水六和氏が八月一日亡つた。老衰によるもので八十五歳であった。清水家は代々五條坂の陶芸家として知られているが、初代は摂津富田の出で、江戸時代明和年間京都に窯を築き、清水六兵衛と号した。六和氏は五代六兵衛で、昭和二十一年現在の六兵衛氏にあとを譲つた。

六和氏は明治八年生れで京都府画学校の日本画科を卒業、さらに当時の日本画壇の先達幸野楳嶺に学んだ。このことは陶器の意匠に新風をふき込む力であつたと思われ。

当時京都の陶芸界には伊東陶山、三浦竹泉、真新水蔵六、清風与平、高橋道八、帯山与兵衛ら世襲の名家があつたが、これらの多くが伝統を保守し、そのわく内での研鑽に努めたに対し、清水家は進取的であり、六和氏も陶業を積極的に時流に組入れ、新時代に対応

した新しい陶芸家の在り方を示した。当時工芸界として革新的色彩の濃かつた中沢岩太の遊陶会にも参加している。

しかし特筆すべきは昭和二年帝展に第四部工芸が創設されたとき、選ばれて審査員となり、以来官展を通じて多くの後進を育成したことであろう。陶芸を美術の位置に高め、陶工から作家へと陶芸家の社会的地位を移すのに帝展は決定的な役割を果たしたが、そのような方向の中で六和氏の果たした役割も非常に大きいものがある。絵付についてはつねに自負するところであつたが、染付、青磁、色物などを得意とし、近年は香炉などに枯淡な作風をみせていた。芸術院会員、日展顧問を歴し、当館顧問でもあつた。

略歴

明治8年 京都五條坂で四代六兵衛の長子として生れる。本名栗太郎。
明治20年 このころ幸野楳嶺に学ぶ。のち京都府画学校に学ぶ。
明治29年 このころ新設の陶磁器試験所に入る。新技術の吸収に努める。
明治38年 中沢岩太の遊陶会創設され、これに参加。

大正3年 五世六兵衛を襲名。
大正10年 仏國サロンに出品。
大正11年 フランス政府よりロルドル・ド・レトアル・ノアール勲章贈られる。

昭和2年 帝展工芸部開設。審査員となる。
昭和3年 マジヨリカ(音羽焼)旋式の功により縁授優章。
昭和5年 このころ陶芸家団体五条会結成。会長となる。
昭和6年 帝國美術院会員となる。
昭和12年 山鹿清華らと京都工芸院をつくる。
昭和21年 六兵衛を退隠し、六和と称する。
昭和30年 満八十歳回願展を京都、大阪、名古屋、東京で開く。

夏期講座を終る

本年度夏期講座は27日から31日まで行なわれましたが、充実した講師陣に加えて、一般館では見られないような映画の上映もあり、終始有意義に終了しました。熱心に参加して下さいました方々に御礼申し上げますとともに、今回の講座についての御批判や、今後の催しについての御意見をお聞かせ下さるようお願いいたします。

うしても出来ないことだ。

ことしは京阪電車が木津川を渡るあたりの川洲に興味をひかれて、これと取組んだ。川洲の描く文様が面白くみえたのが動機であるが、単なる風景でなく、そこにたまたんだ私が何を発見したかという答えのようなものが出て来たらと思う。

さて九月も半ばになると東京まで行って審査と陳列。審査というのは他人の作品についてあれこれと判定を下すのであるから憂鬱で気の重いことであるが、そこで若い人達の瞳目に備する仕事ぶりに接するとき、それは心の底をゆさぶるような深いよこびとなつてはねかえつてくる。私たちの間では若い人たちが道で会つても、こんどはどんなものをかいているといったことを向うからほとんど口にしなないし、下見もないから、作品が何であるかは東京へ行つてみなければわからない。従つてそれだけ印象が強いわけである。もう少し示唆を与えてやれば、落選しなくても済んだと思われる作品も少くないし、それは親切なことでもあるだろう。しかし自主的にあくまでも自分だけの力で作品をつくりあげ、そのために刻苦するという態度には、教えることによつて達せられない貴重なものをおくんでいる。作家としての魂もそのような態度の中で育つてくるにちがいないのである。このようにして若い人達がもち運んで来た立派な作品に接するとき、「ほんとうに有難う」と頭を下げたい気持ちになる。

秋のことば

日本画家 秋野不矩

がもち運んで来た立派な作品に接するとき、「ほんとうに有難う」と頭を下げたい気持ちになる。

東京で展覧会が終ると大阪、次いで京都である。地元ではできるだけ多くの作品を並べて新作の全容を示したいという気持ちと、運送費や入場者の見込み、宣伝法、税金などむづかしい問題がからみ合つて、画家の商法に知恵をこぼす。展覧会の評判が気にならぬことはいけれども、とにかく毎年十一月の半ば、京都での展覧会が終り、名古屋展のために作品を送り出したときにはほつと一息である。すでに秋も深まり、ようやく夏からの緊張も心の中に終止符を打つのである。(談)



アトリエの秋野さん

く、一向そういう自信がわいてこないときは、秋がうらめしくなつたりする。もつとも石本正さんや麻田藤司さんといった若い人達は春展が終るとすぐ秋の準備にかかるらしいが、そのように時間をかけてできあがつた作品はさすがによいものである。作品の出来が悪そうだと、出品もやめたい気になるが、出さないとなると会員でも「済みません、済みません」といつて隅の方で小さくよつて支えられている私たちの会のことであるから、ほかの人が頑張つているのに自分だけが肩すかしを食わせることは責任の上からも

いかにもけいけい今日の現実であるが、秋の気配とともに「美術の秋」が新聞雑誌をにぎわせる。

すでに東京では二科、行動、院展、青龍展が開演し、季節の詩を綴っている。これらの団体展を迎えて京都のシーズンが本格化するのは十月に入ってからだが、それですべて美術館や町の画廊では各種の展覧会が相つきシーズン

の気配はさやかである。美術館では十二月までスケジュールはぎつしりつまつているが、十一月の横山大観遺作展は今秋のメイン・イベントの一つ。美術館を中心に秋の主な展覧会を紹介しよう。(日程は6頁の展覧会案内を参照)

十月には笹瀬悦子氏指導子供アトリエ展、行余書芸院について第十四回行動美術展が開演する。油絵の匂いがむんむんするという実感はこのころから高まるだろう。出品は油絵と彫刻約二百点。古家新、向井潤吉、伊谷賢蔵ら幹部のほか田中忠雄、山中春雄、斎藤真成、河野通紀、佐藤真一ら働き手も多

秋のスケジュール — 美術館を中心に —

い。社会性や現実感の強い画風が一特徴であるが、今年是一般出品者にアンフォルメル風の作品が増え、最近の画壇の流行が物語られている。京都の新人では藤波晃が奨励賞を受けた。勤労者文化祭展は今年で第十回展を数え、各職場の美術愛好者が日頃の文化サークル活動の成果を示す。出品は絵画

と写真。このあと立命館大学美術展と墨人展が開かれて十月のスケジュールを終る。墨人展は森田子龍氏らを中心にする前衛書画団体で、既成書壇をはなれて独自の活動を続けている。形式化した書を破壊して、本質的な生命の把握を主唱しているのが一般の書展とは自か

十一月には横山大観遺作展が開幕する。九月十五日からまず東京で開かれるが、大観は近代日本の画壇史を一筋に押しひらいてきた中核的人物であるので、展覧会は大きな期待をかけられている。美術館における会場も一階全館が予定されている。昨年の川合玉堂遺作展をはるかに上回る規模である。大観は明治元年水戸市に生れた。東京美術学校で橋本雅邦らに

さらには十一月には新制作展、自由美術展、パンリアル展、二紀会展、走泥社展と恒例の団体展が続く。新制作展は例年日本画、洋画、彫刻、建築三百余点が展覧され、日展につぐ規模を誇っている。都会的に洗練された洋画部門のほか山本丘人、吉岡堅二、加山又造、麻田鷹司、上村松篁らの働き手をもつ日本画部門の動向も話題をよぶだろう。パンリアルは京都の若

友の会
入会のおすすめ
友の会会員になれば、シーズンを迎えた美術館でのいろいろな催物に対して、有利な特典の数々が得られます。これからあと、本紙で御紹介のような盛り沢山の展覧会も控えていますから、まだ御存知ない方々をおさそい、まだ御入会下さい。
10月1日から会員登録が切り替ります。来年3月分までの会費の既納者には、9月中旬に会員証を郵送しますが、その他の方は同封の振替用紙(2名以上一括申込のときは、通信欄にそれぞれ住所氏名を御記入下さい)を利用して、事務所へお申し込み下さって、お申込下さい。

見	聞
紀	談

— 6 —
岡 部 三 郎

表僊の作品のこと

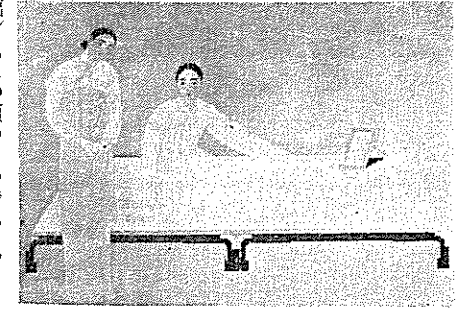
美術館には表僊の死の三年前、四七才の作「平牀」がある。朝鮮に取材した二点の主要な作品のうち一点でしかも完成された一つの作である。画展が解散されて五年ほど後のものである。

表僊は二度朝鮮へ旅行した。そして二度目の朝鮮旅行から帰って一年もたないうちになくなってしまうたのである。昭和十年九月から一月半の旅行であったが十一月京都に帰るとすぐに画稿を整理し「妓生の家」の下図を仕上げた。二月にはもう本紙にかゝつていた。それから間もなくと云つてもその年を越えて翌一月末にその製作の途中にたおれてしまったのである。はじめは府立医大に入院した。二月中旬に赤十字病院で腹部

切開の手術を受けた。手術の経過が良好と云うので三月退院したが五月に再び悪化し遂に二八日午後五時半過ぎ逝去した。肺臓病と発表されている。昭和十年は所謂松田改組事件の起つた年で、帝展もとうとう開かれなかつた。事件の発端は文部省が帝國美術院官制を廃止し組織の改革に着手したことからである。それにその発表の仕方が余りにも突然であつた。新聞は連日のように「美術界空前の混乱」と云つたようなトップ記事でうづめられた。まあ一口に云うと文部省側を代表する松田文部大臣と院展系作家群と官展系作家群の文字通り入り乱れた確執であつて、画家らしい感情上のもつれとも云うべきものが様々の形で事件を発生せしめて行つた。

帝

國美術院会員であつた表僊は病中その渦中にあつたと云われる。京都でも風潮は文部省の改組案に反対した。それが京都側の帝展不出品声明事件に発展する。絵画専門学校の教授であつた梨月・翠嶂・曼舟らまでが連袂辞職するに至つた。病中の表僊にも焦心の日が続いたことは云うまでもない。表僊のこの事件に対する態度は勿論諷刺によつて代表されているが、表僊の個人的立場はもつと複雑であつたようだ。い



土田 表僊「平牀」

つか院展の安田叔彦は、自分に宛てた表僊の長文の手紙について話されたことがあつた。その手紙は表僊の当時の模様をよく伝えていそうである。

手術後赤十字病院を退院すると酒原を湯河原に訪ねている。勿論この事件についてである。そして画も描いている。普通表僊の絶筆とされる「燕子花」(二尺五寸横幅)もこの頃のものである。

画家の生涯で五十才と云えば弱々しい老年に襲われるほどの年でもなく、マサツチヨヤラフアエロほどの早死でもなかつた。しかし世間は表僊の死を早死のように惜んだ。

表僊はこれまでいろいろな批判を受けて来たが、晩年の行動の中にも、酒原に師事する前後の事件にしても、それは誰にでも出来る

と云うものではなかつた。表僊の生涯は決して平穩な生涯だつたとは云えないが、画家としてはその価値通りに認められたのであつてまことに幸運な一生であつた。

この頃には長巻「生々流転」「夜桜」「瀟湘八景」をはじめ余生にわたる約五百五十点が陳列される予定である。

隋・唐の美術

東山七条の博物館では毎春秋に特別展を催しているが、今年は十月十一日から十一月八日まで「隋・唐の美術」を催す。隋唐、特に唐は華かな文化を発達させた国で、日本はしきりに接触を求めて文物を取入れようとしたものだから美術品が盛にもたらされ、その幾分かが今日まで遺つている。それらはあちこちの社寺に散在しているので個々には人目に触れる機会があつたのだが、こんどの展覧会ではそれらが一堂に集められて一目で見渡すことが出来るという訳である。また近年注目を浴びて来た敦煌やその他西域地方にも重点を置いてゐるのとことである。

主な出品物を拾つてみると、東寺の真言五祖像、大谷探検隊の発見になる西域の仏画、宝慶寺の浮彫石仏、金剛峯寺の大師枕木尊、普門院及び岐島神社の枕木尊、元徳修寺蔵の刺繍の釈迦説法図、それに陶器類が集められ、総数は百点近くになるとのことである。なお、九月八日からは岐阜県岡市春日神社で発見され最近修理のなつた能衣袋八領が特別陳列される。九月二十七日まで。

鉄鶏と具休

例年八月は美術館も夏枯れで恒例の市民美術展が開かれる程度であつたが、こゝしは鉄鶏会展と具休展が繰込んで時ならぬ盛況をみせた。鉄鶏会展は京阪神在住の独立美術の会友によるグループ。メンバーは七人で「七つの個展を同時に集めた形式で開いた」という但書通り、一人がそれぞれ百号に余る大作十点以上を並べ、その馬力に人を驚かせた。関西独立美術クラブの運営に対する不満から同クラブを離れ、独自のグループ活動を及んだもので、主流は非具象、真正面からの取組みぶりであつた。一方具休は相変わらず、画面に工業資材や砂などを持込み、おなじみの電気什掛作品もあつて人目をひいた。依然ダダイストの血が濃厚であるが、一面外優雅で繊細な美意識をひそませており、行き方がむしろ不徹底だといふ批評もきかれた。足でかく線の白髪一雄はアンフォルメル運動の理論家タビエ氏の推選で展覧作品をふくめた十二点をバリのスタジオラー画廊へ送ることになつたが、その白髪一雄も「足で絵具をこねてかくにしても、だんだんやつてい



TOPIC

うちに足も手並みに言うことを利くようになり、案外細かい仕事になつてしまつた」といつていた。

大作に制限(日展)

第二回日展は十月末から東京で開幕するが、出品者の制作もようやく本格化してきた。夏夏のうちやくスケッチ、さらに小下絵、下絵で推敲を重ね、秋とともに本番にとりかかるまで、すでに制作の第一段階で生みの悩みは深い。日展本画の場合は十月の声をきくころ、研究団体ごとに見学を聞くのが恒例。ひと昔前まではこの下見会で、作品について熟主

美術館のブロンズ像

最近美術館の二階貸室前に菊池一雄作の彫刻「青年の像」が飾られた。菊池氏が昭和二十三年の新制作展に出品したもので、清新な作風で評判を得た。氏の代表作として昭和三十三年当館の所蔵品となつたが、館にうるおいを与え、そのため今回公開された。等身大のブロンズ像で新しい台座のうえに立てられている。なお美術館では日本画、洋画、彫刻、工芸二百七十点の所蔵品があるが、これを常設陳列して公開する計画も進められてゐる。

変貌した五条坂

清水六兵衛氏

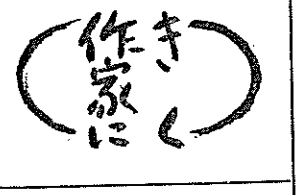
△六和先生が亡くなられましたが……
これといふほどの病氣はなかつたのです。枯れ木が倒れるようなもので大往生でした。何の苦痛もなかつたようです。
明治の末から大正にかけてよい時代に活躍した人で、得も多かつたが苦勞もしたと思ひます。陶芸の名家といふものは京都に多かつたのですが、六和は外園のものを撰取したり、時代の要望に應じて将来を見通すマナコをもつていたのは偉かつたと思ひます。昭和二年帝展の審査員に選ばれましたが、これは父の行き方にも大きな影響を与えたと思ひます。もし父



△家柄といふことをどういう風に考えられますか
六和はいつも先祖のお陰で自分である。その名をはずかしめないようにしなければいかん、といつていました。私も仕事のうえでそうありたいと思つてゐます。
戦後のことですが新鴻へ行つたとき、ある旧家からせひ来てくれたいといふのです。行つてみて驚いた

の花瓶、茶器、菓子皿、水注、それからサン皿のような食器に至るまでみな初代から五代までの六兵衛のものばかりです。六代目のものも入れて頂かんといかんです。これほど熱心にうちのものを収集し楽しんでくれる人があるのだから、うかつかりした仕事は出来ぬぞと肝に銘じる思ひです。
△五条坂も随分変わったでしょうね
五条のたたら坂をあがつてくると細い道の両側に陶器の店が並び、ノレンが深くたれてゐるといふのがこの町の風情でした。しかしいまは疎開で跡形もありません。私の子供時分にはそこに、清風、竹泉、道八、蘇山など名家も並んでゐたのですが、いま残つてゐるのは竹泉一人ですね。陶器問屋でも昔からあるのは平岡ぐらゐです。その代り新しい作家、陶器屋もふえました。私の方は初代が明和八年に建仁寺町五条下ル東入ル、面だと思ひます。これからはアバウト暮しもだんだん増えてくるでしょうから研究に傾する分野でしょう。

清水六兵衛氏 陶芸家。明治三十四年京都生。大正十二年京都絵画専門学校卒業。京都陶芸家クラブ会長、日展評議員、昭和三十年度芸術院賞を受けた。現住所京都市東山区東山通五条坂東入ル。



意味だつたんでしよう。まあ父からこうせよ、あせよといふのです。行つてみて驚いた

た。壁を表現する線の処理にはたしかに日本在来のものではない近代の絵画意識が働いてゐるが全体を抑制しようとする意識の方が強く働いてゐる。
妓図に見るようなどカントな色彩はもうなくなつてゐる。表徳は近代人らしく西歐画ことに後期印象派の作品に強い関心を示し作ら、それに対立させた日本画の立場を桃山障壁画の様式によつて解決を試みようとして自らに荷した課題を一作ごとに押し進めて行つたしかも舞妓図なぞと異つた新しい回答を試みようとしたのがこの「平牀」なのである。
表徳は死ぬ前の四年間に「平牀」「燕子花」それから「妓生の家」を描いた外に主な出品作を挙げる昭和九年の大札記念京都美術館(当館の旧称)美術展覧会に出品した「朝顔」がある位で他は清光会・七枝会・春虹会に出品した作品で大作はない。この「燕子花」も昭和九年の帝展に出品された方の作品で文部省の取藏品であつたが焼失してしまつた。それから「平牀」は最晩期を代表する一番重要な作品となつてしまつた。(当館嘱託)

京都市 美術館ニュース

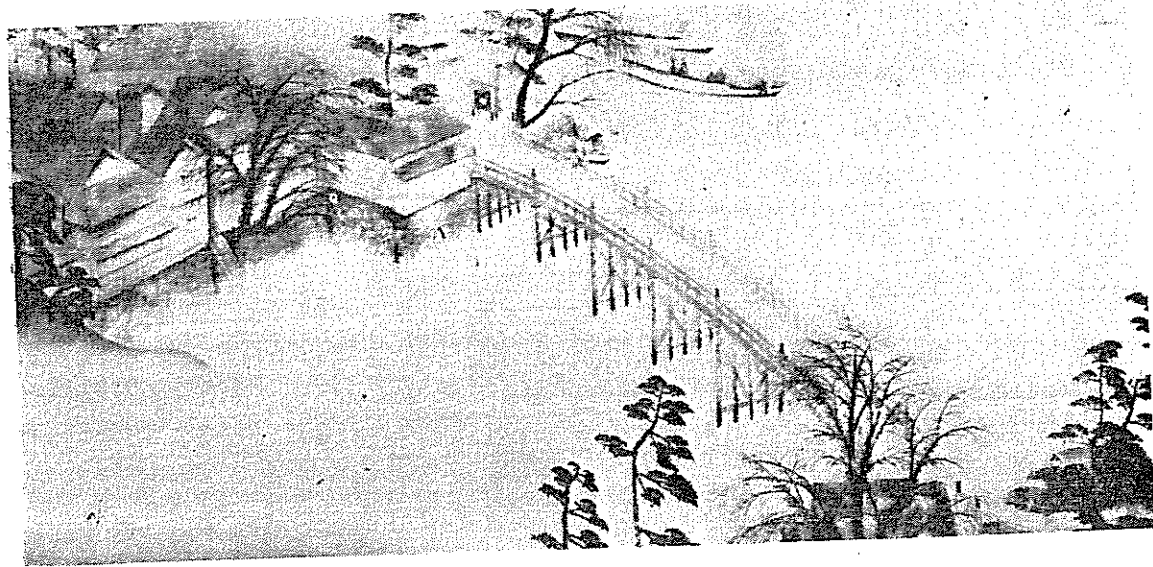
発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

No.23

昭和34年10月15日発行
毎月一回

横山大観遺作展

11月1日—23日 当館



大観集
大特

展覧会案内

美術館	展覧会名	開催期間
京都府キヤラリー	改裝記念油絵展	2日—6日
	陶磁器デザイン展示会	8日—10日
	ミダニアート京都作家展	12日—16日
京都青年美術作家集団展		18日—22日
丘雲会陶芸展		25日—29日
京都書院画廊	辻村之作陶展	7日—10日
	山城高校美術部展	11日—14日
	日本画展(笠城誠三)	15日—20日
	紫野高校美術部展	21日—24日
	同志社大学クラマ画会秋季展	25日—29日
	小溝一夫染織展	29日—10月1日
土橋画廊		
	藤原始更画展	22日—27日
	大丸画廊	
	新作花器展示	1日—6日
	茶道具展示	8日—13日
	五合展(日本画)	15日—20日
	玄月会日本画展	22日—27日
	丸物画廊	
	外国商業ポスター展	5日—10日
	布地オブジェ展	19日—24日

美術館	展覧会名	開催期間
第一回インドネシア児童画交換展		26日—10月1日
高島屋画廊		
	中沢弘光油絵小品展	15日—20日
	河合武一新作陶器展	15日—20日
	母由良染織工芸展	22日—27日
大阪高島屋		
	小磯良平素描展	1日—6日
	寺池菊秋個展	8日—13日
	小杉放庵展	15日—20日
	池田遙邨素描展	15日—20日
阪急百貨店		
	宇野三吾父子陶器展	15日—20日
	千家十職茶道具展	29日—10月4日
大阪市立美術館		
	常設古美術展	1日—30日
	日本水彩画展	8日—17日
	創造美術展	18日—26日
	行動美術展	27日—10月7日
大阪大丸		
	秘境ブータンとインド仏教展	1日—13日
洋美術名作展		22日—10月11日
逸翁美術館		
	常設展(蕪村・呉春の画幅染付)	5日—25日
	(阪急池田下車、月曜休館)	
藤田美術館		
	高野山秘宝特別展	20日—10月4日
神戸市立美術館		
	キリンタン美術館	1日—25日
市民美術展の受賞者		
八月二十五日から三十日まで美術展が開かれた第十三回市民美術展は日本画、洋画、彫刻合せて二六六点の出品があり、盛況であった。レベルも一般に向上し、入賞を争う作品も多かった。惜しくも賞を逸した作品は「佳作」として表示された。またこれまで入賞を重ねた先輩格を対象に「出品依頼」も設けられた。二十九日には会場で授賞式が行われた。		
〔日本画〕	市長賞 永久悠美子「百合」	
	優秀賞 藤松昌佐子「水仙」	
	産経新聞社賞 奥村耕司「笑」	
	努力賞 光田洗山「湖の朝」	
〔洋画〕	市長賞 平野多樹子「建物」	
	優秀賞 的場正夫「作品B」	
	朝日新聞社賞 橋本幸二郎「風景」	
	夕刊京都新聞社賞 進藤博子「楽」	
	京都新聞社賞 小野鈴子「木々のかたらい」	
	読売新聞社賞 佐藤伊百子「習作」	
	日出新聞社賞 太田敏「リビエドその一」	
	日本経済新聞社賞 浅賀雅子「風景」	
	NHK賞 多田越子「五月は過ぎた」	
	KHK賞 広畑美代子「作品」	
	京都美術懇話会賞 光森弥栄子「無題」	
	市長賞 八木生次「作品C」	
	優秀賞 松本爽末「首」	
	毎日新聞社賞 芦田好美「ポーズする雛」	
	努力賞 木内喜雄「女の首」	
	市長賞 八木生次「習作2」	
	嘉世「作品」	
	努力賞 八木英樹「パレリーナ」	
	「浜野安広「TWILIGHT TIME」	
	「藤内忠子「習作2」	
	「木本美智子「仏」	
	「熊谷富美子「赤いセーター」	
	「奥田忠雄「採掘」	
	「藤谷進「少年」	

一生々流転

加藤 一 雄

大観の「生々流転」は関東大震災の年の作です。幸にして災禍を免れその年の秋深く大阪で陳列されました。当時少年だった私もその時の絵を見たのです。そして子供心にもこの絵の語るところをよく了解しました。一滴の雨が谷に落ち、やがて細流となり大河となつて、遂に海に入つて竜巻と共に再び天空に帰つて行く。万象流転の状が四〇メートルに亘る長巻に墨一色で、時に金泥を混えつつ、静かに語られています。雄大でもあり、また少し、寂しい感じも起りました。

大観という人は絵は思想を語るものだと言っていました。勿論一個の林檎も抽象された線条も思想を語る事が出来ますが、大観はもつと素材に英雄と殿と松と富士山を以て彼の思想を語ろうとしました。我々の祖父たちのこれは明治の精神です。我々現代人は一つの思想を前にすると直ぐ分析を始めます。しかし大観はいつもこの分析の一手手前に堅く立止りました。そして一種慣りにも似た強い力で絵筆をおろし始めます。明治と雖も既に綜合の時代ではありません。それは急速に諸思想の分解分析に傾いていきます。この傾斜の一步前に踏止つている大観——私は彼の男々しい写真を見る度に矢張り微かに悲壯の感に打たれます。明治は遠くなりました。もう大観は二度と出ないでしょう。現代の若いエネルギーは、いみじくも科学に向つて躍進していますから。

(当館学芸主幹)



遊刃有余地



横山大観 という人

—在洛画家にきく—

まれに見る大才

榊原 紫 峰

明治の終りでした。文展に横山さんの「流燈」が出たときからこの画家のことが相当しつかりと頭の中に残りました。私はそのとき絵画専門学校の学生でしたが、大観という人はこの調子でいけばどんなにすばらしい絵をかくだらうかと想像したりして作品の前に長い間立っていました。もつともそれより早く大観や観山、春草らの若い人たちが岡倉天心の指導のもとに勉強していた時期を知っており、それをうらやましく思い、あこがれました。京都画壇の傾向と違つて向うは絵に思想があつたか

らでしょう。われわれの若い時分はそういうものを求めていました。私が第五回の文展に「花くもり」を出したとき、紹介してくれ人があつてはじめて横山さんに会いました。私の絵をほめてくれて、しかしもつと古画を見、模写しなければ駄目だといわれたのを今も覚えています。

粗野な野人的な、そのくせ脱俗の茶人のようなものを全体におおせている人でした。横山さんは岡倉天心の統率のもと、岡倉さんの東洋思想にきびしく徹していることとされた。その点学ぶべきものがあつて、全体としてみると、東洋画人として最近めづらしい傑物であるといえましよう。人間としての素質はただものでなかつたの

ためにいくらか痛手を受けられたのです。もし横山さんが足利時分にも生れていたら、もつとよい仕事を遣し、その思想を充分に実現できたと思います。そういうことを思い合わせ、あの卓越した横山さんの資性からすればまだまだあの程度で終る人ではなかつたと思うと、残念でたまらないのです。(談話) 日本画家

大観先生

福田平八郎

横山先生とは戦争中からちよいちよいお目にかかった。私が富田溪仙先生の箱書かしていたといふという関係もあつて、あるとき私を料亭によんで下さつた。「福田さんは九州ですね」といわれるの

です。しかし、きびしく、あつただし、く、いそがしい世の中が横山さんの素質、絵を一筋にのぼすための障害になつたといふことは事実だと思ひます。そういうものは晩年に近づくにつれて顕著になつて来ました。横山さんは世の中の

で「富田先生は博多ですが、私は大分です」というと「博多だとか大分だとかいうことはやらんじやないですか。だから九州といふことでよいと思ひますね。むしろ日本対フランスという時代です」といふ意味のことをおつしやつた。小さいことにこだわらない精神と時代に対する認識が先生の頭の中にたえず新しく動いているのを感じた。

古武士のような

北沢 映月

またあるとき、「先生は角ばつた富士山をかかれますが、どこから見られた富士ですか」といふと、「私は福田さんのように写生しませんからね。眼で描くのではなく腹で描くのです。あなたも写生をやめたらもう少し絵が上手になる」といわれた。とにかく、若いとき白山に登つたが、日の出の瞬間に雲間のはるかかなたに富士が赤々と照らし出され、右手に大平洋、左に日本海のひろがるその印象が強烈に残つた。それ以後あまり写生をしない、ということであつた。しかしあとで先生と親しい人から聞いたところでは、大観先生はうす高くなるほどの富士の写生を遣されていたといふ。なるほどと思つた。私の好みとしては線を使わず、群青だけで描いた比較的早い時代の富士の方が好きである。またあるとき先生は「福田さんもツリがうまい」といふことですが「そして」「しかし私も五浦にい

見	聞
紀	談

—7—

岡部 三郎

麦僊の画稿

僊は出品画を描く時にはいつも夥しい数の画稿を用意すると云われている。倉敷の大原孫三郎氏は麦僊を追悼した一文の中で「一人の大原女の脚の写生だけに数百枚の稿を重ねた」と書いておられるが、七弦会

の「歌妓」(昭和十年)のような作品のために五、六十枚の写生を必要としたそうだから、大原家に所蔵されている第六回の国展に出品された「大原女」は完成までに三年もかかつたのだから決して誇大なものとは思われない。つまりこの絵は麦僊としては一番長くかかつてゐる。美術館にも前号に書いた「平牀」の四ツ切り大の草稿一六三枚と、ほぼ本画に近い大きさの二曲半双の屏風に仕立てた下

図が収蔵されている。四ツ切りの方は頭部とか、脚部とか、衣紋とかの部分の写生で、それを朱線で描き起している。一枚として纏つたものはない。屏風の方は構図としてはもう完全に仕上げられてゐる。前者は恐らく朝鮮滞在中の写生の一部で、後者は勿論帰国後の二ヶ月中に出来たものであつて、その間に非常な数の草稿があることが想像される。ルドンと云う象徴派の画家はただ何んとなく鉛筆で線を引いているうちにあのような幻想的な形を発見して行くやうなあるが、麦僊は全然そのような画家ではないが、幾回も幾回も写生するうちに最後の線を見出す方法をとつていたやうである。麦僊にとつては線と云うものは作画上の重要な契機であつて、それは西歐でも近代に起つた新しい傾向である。つまり素描をも独立した芸術作品として観賞するやうになつたのである。

「鮭と鯉」「舞妓」の写生二点を自分の作品として出品してゐるのである。麦僊は生前「僕は不器用な生れである」と云つたそうだが、所謂パン画と云われるものを見ると、これが麦僊かと驚くほどのものも少なくない。まあ、調子をおとしたと云つてしまえばそれまでだが、



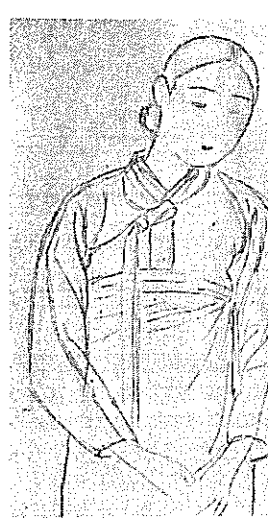
描き込みが足りないばかりでなく、このような努力が省かれていくからであらう。その他いくつかの傑作と云われている作品にはどれだけの準備が払われていたかわからないと云つても余り大げさではなさそうである。麦僊の生涯はこのやうな緊張と努力の連続であつたやうに云わ

たとき絵が売れなかつたので、おかつた。生活のために真剣に腕をきつたのだから、福田さんとツリくらべをやつても負けない」といわれた。常人離れした酒豪であつたことも有名だが、数年前お目にかつたときは一升の酒に水を割り二升にうすめて飲んでおられた。食事はおかゆのようなものだけということであつた。(談話) 日本画家

われても仕方あるまい。麦僊は第五回国展に「大原女(下絵)」と

の他のいくつかの傑作と云われている作品にはどれだけの準備が払われていたかわからないと云つても余り大げさではなさそうである。麦僊の生涯はこのやうな緊張と努力の連続であつたやうに云わ

大阪に第五回内閣博覧会にあつて、和尙は少年麦僊をつれて智積院に来たのである。そして得度式をまへに、



(前頁より)

ている。大観らの朦朧体はこのような洋画の描写法をとり、型を通じては達成されない自然の本当の姿をとらえようとするものであつた。たとえば「屈原」には空間と光、風の動きといったものが表現され、自然把握の新しい工夫がこらされている。また「菜の葉」などは一種の水彩画のようなものであるが、全体の空間が統一されているとはいえないにしても葉や蝶はいかにもありのままの自然を感じさせる。

朦朧体の克服

このように従来の日本文画の型と西洋風の自然描写とをつなぎ合わせる地点に朦朧体が発生したのである。そしてそのような試みの中で大観は模写を通じて得た高い境地を折込もうとする。もつとも日本画の型とヨーロッパ風の描法をつなぎ合わせる試みは、一つの日本画として充分円熟、完成するには至らなかつた。すなわち朦朧体そのものには日本画の表現として克服される

べきものを残していたのである。従つて朦朧体の克服が大観の課題となり、また明治の日本画のテーマとなつてくる。

明治も終りに近い四十二年に大観は文展に「流燈」を出品するが、ここでは朦朧体と日本画の型がもつとはつきりした形でとけ合つてくる。見た目にも作品は清澄な美しさ



雨竹

る作品を示す。一方京都では竹内栖鳳が巧みで、あざやかな新しい日本画を展開する。大観はこの時期に齒をくいしばつて精進したそうである。

しかし大観の絵の特色は明治四十五年の「瀟湘八景」に至つてさらにはつきりしたものになつていく。描かれた人物をとつてみても、その一つ一つはそれほどうまくないが、

図の構え方が実に巧みであり、風景の解釈の仕方は大胆であり、そこに大観らしい特色がうかがえる。朦朧体の手法は残つてはいるが、全体は決してもうろうとしていない。大観はここに自分の画業の抜け道を発見したのである。主題と構図、絵の意味と図柄を有機的に関係づけることのみならず「游刃有余地」にも「焚

火」にもみられるが、迷路から出た大観はこれらの諸作を通じて新しい実を果らせていくのである。

「竹雨」や「生々流転」は大観独特の表現法が現われているという意味でも興味深い作品である。ここでは片ほかの手法が盛んに使われているが、私はこれは単に水墨画の技術というよりは、日本画における立体派風のめづらさであると考へてもよいと思う。

片ほかしによつてもものの構造を感じさせる点で、とにかく今までの日本画にみられなかつた表現がそこにある。

大観芸術の特質

「生々流転」をかいてからの大観には絵画のうえの新しい追及はみられなくなつたが、昭和のはじめにかかれた「瀟湘八景」は気持のよい作品である。「江天暮雪」など中国の梁楷を思わせる高い精神を現わしている。

晩年に至ると仕事は非常に澄んだものとなる。たとえば戦後にかかれた「被褐懷玉」をみてもその目のつけ方が高

横山大観遺作展

11月23日まで

京都市美術館

く、その高いものをうまく出ようが出来まいが一筋に出し切るうとしてよどみがない。大観は酒を飲むとよく「ほくは絵が下手だ」といつておられた。しかししたしかに細部をみれば欠点があるが、絵全体を眺めるとき細部の欠点は消えて作品そのもの高さにさそひこまれる。そこに大観の天分と特色があるのである。最後に参考までに私がそう考へる大観の代表作をあげておきたい。「無我」「屈原」「流燈」「瀟湘八景」「竹雨」「千ノ与四郎」「生々流転」「寒山拾得」「飛泉」

国立近代美術館事業課長。十一月一日会場の講演「大観の芸術」の講演要旨、文責編集者

見	聞
紀	談

- 8 -

岡部三郎



表 倦にとつて栖鳳のほかに、大切な役割をはたしたと考へられる人に田中喜作がある。のちに評議員となつて国展洋画部の新設に参画するが、ここでは国展結成以前の二人について紙面の許すかぎり触れて見よう。

表 倦が栖鳳の塾に入ったのは栖鳳の外遊後で、塾でも西洋画の研究が盛んであつた。表倦のこの頃の作品を見ると、「春」「罰」「徴税日」などそこに移入されている感情は流石に前時代のものではないが、四条派のパターンからはまだ離れてはいなかつた。明治四十二年に京都市立絵画専門学校が開校されると別

科第一期生として入学するのだが、後から考へて見ると表倦にとつて色々のことがあつた年であつた。国展の顧問となつた中井宗太郎が新しく同校の講師として赴任して来た年であり、田中喜作がパリから帰つて日ノ出新聞に美術批評を載せだした年であつたからである。表倦は二十三才、京都に

来て六年後のことである。表倦らが田中喜作と知り合つたのは翌四十二年四月第十五回新古美術品展覧会に出品した表倦「春山霞丈夫」、竹喬「暮るる冬」を田中喜作が日ノ出紙上で激賞した時からだそう

で、いつとなしにこのパリ帰りの新知識のまわりに大勢の若き画家達が集つていた。はじめに出来た会の名が黒猫会(シャ・ノワール)で、そのきつかけは田中喜作と田中善之助とが大坂へ芝居見物に出かけた時、ふとしたパリの土産話から善之助ら若い洋画家が喜作の家を集ることに話が出来たことにはじまるらしい。表倦ら日本画家が加つたのは二回目の会合からであつた。洋画家では津田青楓、黒田重太郎、田中善之助、新

井謹也り、日本画家では表倦、竹喬のほか秦輝男らその他大勢。生意気盛りの鼻もちならぬ口もきけなし田舎の青年達だつたが案外神妙に芸術を論じ合つたらしい。しかし、青楓と喜作との感情のもつれからこの会は数カ月で解散し、翌四十五年仮面会(ル・マスク)として再発した。やはり喜作が中心で、五月十三日から三日間仮面会の名で第一回展覧会を三条青年会館で開いた。目録には次ぎのようなフランス語まじりの宣言文が載せられている――

Eugène Carrière が Rodin 作品展覧会に序して
La transmission de la pensée par l'art, comme la transmission de la vie, est oeuvre de passion et d'amour.
と云つたことは私ら全員個々の作品の期するところであるが、やがて又私らは私らの食ひ作品以外に私らの展覧会そのものが情欲と愛恋の所作でありたいと思ふ。たとえば一つの作品における線の ondulation や色の arlequinade が作者

の情調の無邪気な曝露であるようにこの展覧会そのものが私らの遊戯であり、情調であり生命であり、また一つの芸術的創作でありたいと思ふ(以下略)

当時こんな文章が書けるのは田中喜作だけ。ケツタイなのかキザなのかまさに太陽族と云うところ。会員は黒田、田中(善之助)、新井、土田、小野の五人だけ。田中喜作の名は見えない。出品数は日本画五点、洋画十三点、会員外として梅原龍三郎が二点パリから出品した。この年表倦は「髪」(文展出品作、絵専卒業製作でもある)、「五月の作」

「朧月」の三点を出品している。二回展覧会は翌年の同じ頃と同じ三条青年会館で開かれ、会員の出品数は二十点。表倦は「冬」(文展出品作)、「習作」二点(球乗りの小供の顔・女)を出品。梅原は出品せず北野恒富が新会員として挿画三点を出品したほか、ロートレックの石版原画十一点複製十一点が出品され、番外として表倦の油絵が出品されたらしい。しかし、色々の評判を生んだこの会も翌大正二年には田中喜作が東京に移つてしまつたので僅かこの二回だけで終つてしまつた。

玉城末一「宇吉」



展覧会案内

土橋画廊	11月	小川長水水墨画展 笈々会展	14日—15日 24日—29日	京都書院画廊	11月	柳原睦光ほか四人展 井上淳一、清水中雄日本画二人展 瑞美苑展 大和クラブ展	11日—15日 17日—19日 21日—23日 25日—29日
美術館	11月	横山大観遺作展 自由美術展 二紀展 走泥社展 パンリアル展	23日まで 16日—26日 17日—22日 19日—23日 23日—29日	大阪市立美術館	11月	由利漢習作展 紫郊学園児童画展 くらま画会、こぶし画会合同展	1日—3日 5日—7日 9日—13日
京都府キヤラリー	12月	第二回日展 第七回錦虹会日本画展 (三階特設売場) 竜村上代裂コロンクション	17日—1月15日 1日—6日 1日—6日	大阪高島屋	11月	鍋井克之油絵と水彩展 河井寛次郎作陶展 斎藤吾郎油絵展 フジカワ画廊	17日—22日 24日—29日 24日—29日 24日—30日
丸物画廊	11月	下月会展 九美会展 朱雀高校美術クラブ展 荒尾常蔵新作陶展 蒼玄会日本画展 東郷青児小品展	7日—12日 14日—19日 21日—26日 28日—12月3日 5日—10日 12日—17日	神戸市立美術館	11月	藤田美術館 秋季古美術と茶器展 青木繁、佐伯祐三、小賀春江、長谷川利行四人展	26日まで 26日まで 12月6日まで
京都府キヤラリー	12月	和田三造個展 京都二紀クラブ展 京都彫刻アトリ工展 児玉正美、梅本昭彫刻展	5日—9日 11日—15日 17日—21日 23日—27日	友の会 自由美術展と二紀展	11月	友の会 自由美術展と二紀展	24日—29日 10日—15日 17日—22日 18日—22日

京都市美術館ニユース

昭和34年12月7日発行 25号

(前頁から)
後は近世日本美術史と浮世絵の研究で知られているが後年東京美術学校美術史教授となつた。
ところで、印象主義の移植の時期に忘れたことが出来ない役割をはたした雑誌「白樺」が創刊されたのは黒猫会が出来た年で、京都の若い画家達はみな多少にかかわらず感化をうけるので

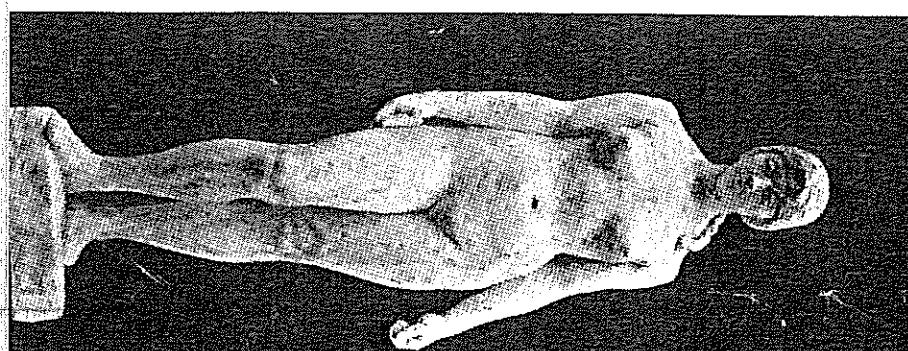
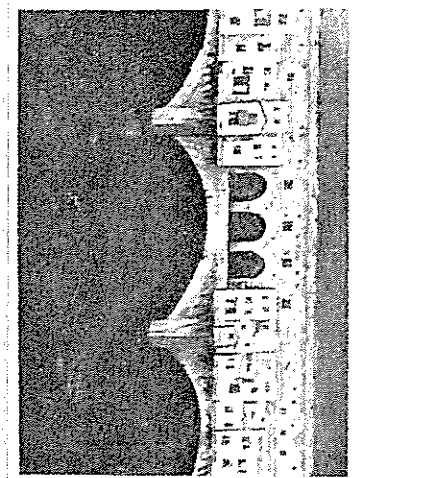
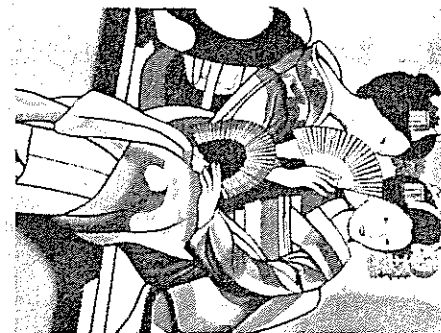
あるが、田中喜作も帰朝した当時は印象主義に強く傾倒していたのである。このような傾向は麦穂のその頃の作品にも強く現われて来る。文展出品「鳥の女」(大正元年)「海女」(大正二年)は当時ポール・ゴーガンの画風を日本画に持ちこんだものと云われ、あるものからは罵倒され、あるものからは絶賛されたものだ。麦穂が印象主義をどのようにに理解したかはとにかく芸術においては新しい時代には新しい時代のあらたな問題を設定することが大切なのであつて、麦穂が高く評価される理由の一つでもあつた。美術館には最後の国展で会友となつた玉城末一の作品「宇吉」がある。第五回国展に出品して受賞(国画創作協会奨学金)した作品である。国展時代の麦穂の周囲には、野長瀬晩花や粥川伸二ら後期印象主義の仮面会流の独善的な類型解釈から来る作風が多く見られた。館が「宇吉」を収蔵した理由はこの作品がこれらの時代趣味につながると見たからである。
(当館嘱託)

審査主任の眼
民営第二年目を迎えた日展は東京では大変なきわいで会期中に十五万の入場者をみたという。さてその内容はどうか。作品の審査に当つて各部門の審査主任が「審査所感」を発表するのが恒例だが、それによると日本画の主任福田平八郎氏は「風景と人物画」とに秀作が多かつたが、花鳥画には少なかつた。私は今後が良い花鳥画をひたすら制作する」と述べている。また洋画の主任有島生馬氏は「洋画の入選数は総入数の3分の1の517点で、厳選ではなかつた。人物画の間に相変らず工場、機械、岸壁、牛などをテーマにしたものが多かつた。それから船舶画であるが、

不思議なことに皆んな動いていない船ばかりだ。英国民のような航海に対する夢がないためだろう」ということだ。彫塑の齊藤素雄氏は「写実を基調としたものが多いことは例年と変わらぬ態勢であるが、デジタルムによる整理や進化を行つた作品も増加の傾向にある」と。また工芸についてには山崎寛太郎氏が「一口にいうと復元なんかはじめて工芸部へ出品したときと比較して完全に生れ変わったという感が深い。作品の形態も傾向もおしなべて「現代作」の演出という感じがする。今年あたりの概観といえは極端な異例が少

く「おちつき」が全体に加つたともいへばきたらう」とみており、昔の豊道春樹氏は中堅層の進出によつて各部門の将来性を望見している。審査主任はいずれも各部門の大家であり、我田引水におちぬ率直な所感とみることもできるから、これによつてまず第二回日展の一席をうかがうことができよう。

各部門におたつて今年から作品の大きさの制限が復活したので、日本画などにもスケッチの巨作は影をひそめたが、各部門とも中軸作家の活躍がめざましく、日展が新しい段階にさしかかつたことが示されている。

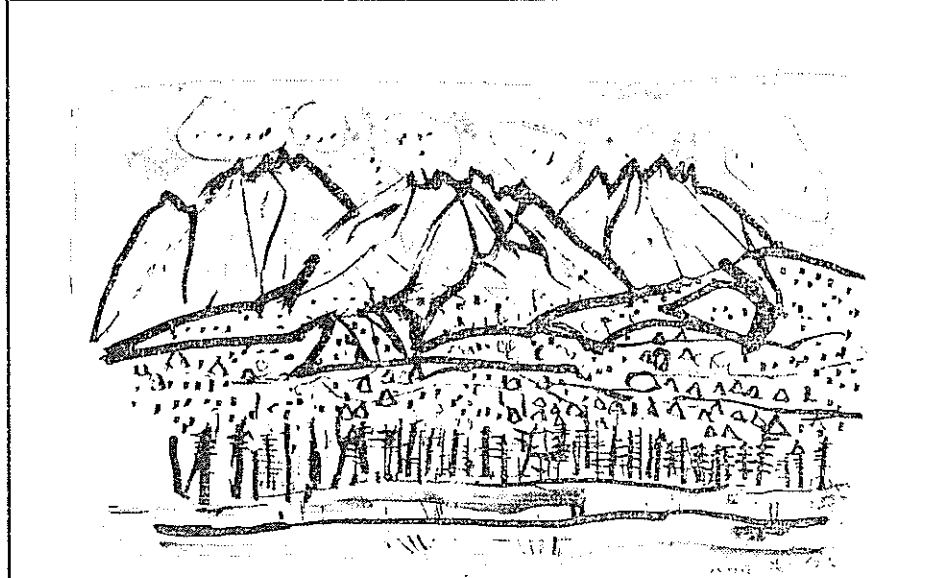


橋本明治(評)八月

清水多嘉示(評)〈採録〉

京都市 美術館ニュース No.26

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和34年12月28日発行



ここ数年、山の絵ばかり描きつづけている。山が好きでもあり、山が自分に一番みじかに感じているからでもある。

さて冬山のスケッチをとり、スケッチ帖をひもどいて見ると、夏、春、秋の山々のスケッチがあるのに案外冬山のスケッチがない。冬には写生に出ないわけでもないが、毎年正月の新年会をそこそこ、あまり腕前のたしかでないスキーを担いで、リニックには写生の七ッ道具がつつしりと重く、いさ×富士見高原を経て小海線の小淵沢から八ッ岳の山麓を歩いて海の口牧場に出た。新雪に光る赤岳、横岳が刃物のように暗れた暗空にきびしく、寒さがひし〜と迫る。そのときのスケッチがいま私の手もとにある。迎える冬山に今度こそはと大きな希望をいだいている。

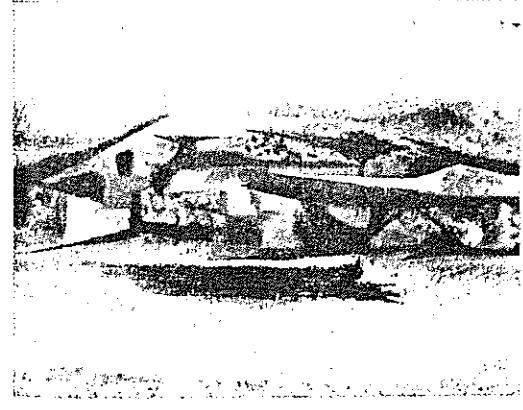
冬山のスケッチ

西山英雄

×さかでも勉強しよう、しおらしい気持であるが、さて滑りだすと、写生どころか、日もくる日も滑る。スケッチ・ブックはいぜんとして真白である。

ある正月スキーを諦めて中央線の

(日本画家)



堂本印象(理) <知覚>

官展五十年の回顧

三頼園 大衆と美術

現代の日本美術について評語は、深い、米熟、眼帯など、美術の長い歴史に照らして駁しつづけた人もいる。展覧会が明治四十年に官展で現われたということは、しかし、何と云っても美術のため探求すべき出来事であった。それから五十年、その間に官展、帝展、日展と移つて来たが、一國の文教政策はそれを維持していた。このことは日本美術の全盛を捉えようとするところでは無理だ。陸展、二科、国展その他指の美術団体は、日本の美術を担っているから抱負をもつていいからである。

世界の情勢から見て現代美術は展覧会を離れて考えられない。個人展の開催は国民を作品を大衆へ向ける。展覧の開催は国民を美術鑑賞へ導いた。美術展覧会の五十年は社会大衆の美術鑑賞の五十年である。と云うことは丁度この半世紀の間に見て来たわけである。いわば官展の歴史の源流を見つめて来たわけである。舞臺の花形、その作品はどのうであつたらうか。

初期の花形役者

さてその期間を計ると、文展の12、帝展の16、新文展の8、日展の13の年数を数んでいる。その間幕をあげた官展の舞臺での芝居と、花形役者の登場の移り行きは興味がない。私にしてみれば文展第4回(明治43年)を三高一年の時に見たが、當時文展の人氣は素晴らしいものであつた。この年、菊池翠月の「映灯」、水島辰谷の「かりくち」、川村野舟の「夕月」が出たが、満員の会場で鶴山大風の「楚水の巻」、下村龍山の「藤原の巻」、菱田春草の「黒い猫」に眼は釘付けにされた。翌年に大磯田村の「夢殿」、今村紫紅の「近江八景」が文展を賑はした。廻つて鶴山の「木蘭の秋」(文展1)や春草の「落葉」(文展2)は現代日本美術の金字塔を打ち立てた。大正3年京大卒業の年であるが、この年、大観一派の文展よりの離脱は文展を寂しくした。文展でこの年迄に帝展の三人竹内麟鳳の「雨景」(文展1)「阿茶」(3)、れた猿と兎」(2)、「アテ立」(3)、山元春幸の「雪松園」(2)、川合正堂の「片時雨」(1)が獲得した名作と位置づけられないものであつた。三人の先輩に続いて松谷、梁月、翠峰、西村五雲、部路華香、上村松園、平福百穂、橋本四半らの進出は目ざましいものであつた。この年令層の次に土田斐也、藤原紫峰、村上華岳、小野竹鶴の一群が隆えた。文展の舞臺でこれら作家の取り合は見物の手に汗を流らせた。見物が興奮したただけではなく、シヤナ

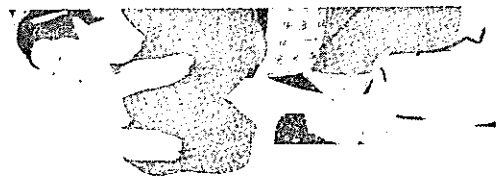
リズムは文展批評を大きく取つた。美術界が出来、美術批評は記者の外に学者、文士が筆をふるつた。「朝日」で漱石が大観の「山陰」を皮肉つたりして面白かつた。美術史教授の竜崎士もかいた。その頃京大の心理學担当の松本太郎教授は審判員であつて、同氏の文展批評は評判が高く大学の講堂に聴衆が溢れた。

その次の時代

大正7年1月のことだつた。国画創作協会の宣言書が出た。帝展の時に文展から脱退したのは藤原の時に同様な救済感をもつていた。このグループと私達は親近感をもつて「島の女」(文6)や「淑女」(文7)を描き、近代造型の精神が「大原女」「舞姫」を導いた。華岳、華岳の神韻、竹箭の清逸は文展に激刺たる新風を運つたものだ。帝展時代の花形登場は紫峰、大三郎、泉出、治方、波月があり、平八郎、印象、萩村、蓬生、桂華がある。その中で波月は平八郎と印象とであり、且つその対照が目立つた。「鍾」(帝3)の道真を以て出発する平八郎の「鍾」(帝13)へと、印象の波斯ミニョールの作り替へ「調音」(帝3)から「華殿」(帝6)への動きと「鍾」(帝4)は紫峰で野舟の「文展」(帝14)は堂々たるものである。帝展に復帰した文展は「平脈」(帝14)に多方向への開拓精神の最後は到着せる清澄、清澄を示した

最近の動向

昭和10年より戦後に亘る不安時代に鶴山の「若き象鳴」、松園の「夕暮」、帝展の「若き象鳴」、松園の「夕暮」の展覧を見た。戦戦の日展の舞臺で第1回の大観の「漁夫」、玉堂の「朝晴」を見たのは解し。この舞臺へ上村松園の「古柳」、奥村厚一の「静島」の出現は心を躍らせた。帝展時代に鏡花を見せたい人々、そのうちで紫峰は「落北芦生の秋」、「祝



上村松園 <夕暮> 昭和十六年、第四回文展出品作

「雨」の優雅をもつて、神泉は「鍾」、赤松は「昔葉」の流石をもつて登場した。又、東山魁夷の自然解釈、杉山寧の同構法、山口華岳の明朗吟詠、池田遥の幻想的な変動に会っている。洋画の美術は世界的な変動に会っている。洋画の動向としては別として、日本画の伝統の「意」「動」など、抽象系は世界的潮流への加え見える。舶来の型によらず自力で開拓しようとする努力も少なくはない。平八郎の「静島」、「雨」や、西川英雄の「接島」から「冥碧嶺」への開拓はこの方向に動いている。(同志社大教授・養学)

広田多津

戦後十数年の間、私は新制作展出品作では裸婦をやつて来ました。それは大体印象派風のものでした。それだけやってみてこのままではつまらないと考えて昨年展覧会では舞妓をかきました。要するに再出発しようとしたのです。私の絵を見た人からは、変な感じがしたと意識しすぎている、といわれまして。たしかにそうであれば浅薄になつてしまふ。しかしそのような欠点をなくし、よるこびをもつて、新鮮な気持ちをもつて仕事に進みたい。

舞妓というテーマから、後向きではないかという人があるが人物画を現代の日本画としてどこまで押し通して行けるか、これを試してみたいと思います。人物をかく人は年々少くなり、はじめはそれをかいていた人でも、風景

画に転向していきませんが、私は自分の感情、思考を人物によつて現わすという訓練をあらゆる機会をとりえて試みようと思ひます。きれいなことにならないように、しかもあたたか味のある人間を美しく描きたいと思ひます。

(日本画家・新制作協会)

つた年だと考えている。一段落したのであるから今後当然新しく仕事を始めなければならぬが、どのように歩むべきか、それは正月にゆつくり考えてみたい。自分の歩んできた道をふり返つてみれば自から今後の仕事のことも明らかになるだろう。とにかくじっくり考えたい。(陶芸家・日展)

いままではいわゆる写実主義彫刻をやつて来た。私の企図は高度の内面性、精神性を写実的な人体の付与するところにあつた。

芸術にたずさざるものとして当然ながら私たちが作家は人間に対する愛情を制作の最も深い動機としなければならぬ。そういう私の気持はいままでの写実的な仕事の中で一種の情感ある裸像として現われていたように思う。しかし最近、私のこころいう根本的な動機を彫刻として一段と徹底させるために有情の情感より「非情な手つき」によるこころが必要だと考へるようになった。この秋の新しい彫刻の試みは私の表現上の考え方移行を示している。しかし作品をみてヘンリ・ムアの影響を受けたのではないかと人があつた。しかし私はムアの作品をこの目で見、作品集をひもどく前にこのよう移行が自分の内部に起つていたことを強く意識している。

造形的な側面からいへば、これまでのように彫刻を量塊としてとらえるのではなく、ものの形と周囲の空間とのカミ合ひにおいて一つの新しい進展を得たいと思つている。だからこの秋の仕事は以上

(洋画家・独立美術)

上のような課題に対する私自身の問題提起であつた。新しい年にはその答えを求めて仕事することにしよう。(彫刻家・新制作協会)

野村 耕

いよいよ一九六〇年だ。今年こそ今更あらたまることはないと思ふ。作家にとつては常に「真実の発見」それしかないから。しかし現実には色とりどりの流行現象のはんらんである。意識的な新しいやり形式のみを取り入れるのに左右するのは現象の中に流れ流される。

作家は作家の必然によつて変化発展する現実に対する積極的な態度、それが作家を前進させるエネルギーになると思ふ。その為常に概念にとらわれることなく新しい材質を発見しどんどん取り入れて行かうと思ふ。

現在取組んでいるのは紙と墨である、それは現在の自分の気持ちに一番身近に感じる材質であり油彩其の他の材質に劣らぬ強い表現力があると信じているからである。しかし今迄の自分の仕事はまだまだ実験的な域を出ていない。もつと自分のイメージを語りかけるものにして行きたい。(日本画家・パトリアル美術協会)

人物画の現代性を

来野 月乙
芝田 耕

説明が無くても見る人がつんと来るもの深いもの、重厚さ、時代を超越して輝くものそんな画を

書いていかねばならぬ。大小は問はない発表する限りこれが私のすべてであると言ふものを遺してゆきたい。

時代性とか現代の何が表現されていると言つたことは小さくつまらないものに見える、現代の抽象性の絵画は底が浅い、もつともの真を深く見つめていかねば良いものが出ない、ものを深く見ることだ。

今年もあらゆる雑音には耳を閉ぢ私一人の道を進んで行こう。

(洋画家・独立美術)

捕部 弥 弋

秋に、ここ三年間につくりあげた作品を集めて個展をやリ、日展の審査をすませて、こちらへ帰つてくるついでに日展京都展の陳列があつたりして十月半ばかりいそがつくひまもなかつた。

しかし個展を開いたことは私の仕事にひと区切をつけたいことであり、作家生活の中で意味のある

「東西蔵」さ。それから「此身無掃所」なんて文言自体からして美麗ぢやないか、どうかね、君もこの句がほつぽつ解る年になつたらう。応挙の梅の絵でね、弦月が低く垂れた屏風があつたがね、あれも好つたがその後一向見ないようだ。君の館は相変らず繁昌かね、

てゐる。僕は「カラマゾフ」を十九遍読んでこの急所がよく解つたよ。井上君の「教壇」にもさ、砂と風と雪の綺麗な風景が出てくる、それが大低君一行だぜ。大仏次郎も構成は上手だがこの妙所には未だしという感じだね。井上君の卒業論文？ そんなもの憶えてるもんか、

「君も京都に引込んで田舎者になつたな、飛行機が珍しいかい」、そして何を思つてか、依然として微笑(幾分か冷笑)を遣え乍らボソソと云われた。「君、ヘーゲルは偉いよ、どうせ君は勉強せんだらうが、せめて彼のブリーフニ(書簡集)位は読み給え、ブリードリンヒ・ヘーゲルは偉いよ」。

(文責在加藤)



<アルノルフイニの結婚>

今冬初めて愛宕山の頂に雪を見た日の午後吹田の郊外に植田先生を訪ねた。赤土に杉垣の続いた千里山の西南斜面である。水雨にきらう大阪の方の空をジェット機が飛行雲を引いて上昇してゆくのが見える。先生曾ての居所たる衣笠山麓とは大分空気が違ふのである——先生の書斎は田舎屋作りの狭い、しかし、日当りのよい六畳許りの独り住である。壁間にフアン・アイタの「アルノルフイニの結婚」の大きな複製が掛つている。机辺には奇妙な古い双眼鏡が置いてある。先生手づからコピアを入れて出された。砂糖がうんと利いているところ正に都会風である。話題はともかくその机辺の双眼鏡から始まる。

「これは僕が歐洲に行つた時親類の者がくれたものだがね、伊太利の絵なんか見るのには案外役に立たなかつたよ。今やこれで専ら大阪風景を望望しているんだ。曾てフロンソの丘から花のサンタマリアを覗いたレンズで今は大阪郊外のごみごみしたアパート群を見てるんだ。思えばこ奴も有為転変の運命だよ」——先生の舌鋒

商売繁昌も結構だが、守衛の靴の音だけがこつこつして誰もいない薄暗い博物館、これは歐洲の由緒ある諸館の輝しい伝統風景なんだぜ。

「小説ならうんと読むさ、深田康算先生以来の伝統だ。井上靖君はあれは詩人だね、何んだつたかな、津路海峡を鳥が渡つてゆく綺麗な描写があつたよ。大体印象の鮮やかな描写というものは半行か一行のものだ。こつこつかく奴は文章でも絵でも下手業と相場が決つ

「此身無掃所」

「君も京都に引込んで田舎者になつたな、飛行機が珍しいかい」、そして何を思つてか、依然として微笑(幾分か冷笑)を遣え乍らボソソと云われた。「君、ヘーゲルは偉いよ、どうせ君は勉強せんだらうが、せめて彼のブリーフニ(書簡集)位は読み給え、ブリードリンヒ・ヘーゲルは偉いよ」。

(文責在加藤)

冬の日はずっと落ちて窓外の暗い空を信号灯を点滅し乍ら定期便が飛んでゆく。ぼかんと見上げてると先生掉尾の一言を浴せられた。「君も京都に引込んで田舎者になつたな、飛行機が珍しいかい」、そして何を思つてか、依然として微笑(幾分か冷笑)を遣え乍らボソソと云われた。「君、ヘーゲルは偉いよ、どうせ君は勉強せんだらうが、せめて彼のブリーフニ(書簡集)位は読み給え、ブリードリンヒ・ヘーゲルは偉いよ」。

(文責在加藤)

クリティク

(1)

京大名誉教授・美学
植田 寿 蔵 氏

昨年来連載の「作家にきく」に代つて新しく「クリティク」欄を設けた。諸家の閑談風の文化論である。

「これは僕が歐洲に行つた時親類の者がくれたものだがね、伊太利の絵なんか見るのには案外役に立たなかつたよ。今やこれで専ら大阪風景を望望しているんだ。曾てフロンソの丘から花のサンタマリアを覗いたレンズで今は大阪郊外のごみごみしたアパート群を見てるんだ。思えばこ奴も有為転変の運命だよ」——先生の舌鋒

商売繁昌も結構だが、守衛の靴の音だけがこつこつして誰もいない薄暗い博物館、これは歐洲の由緒ある諸館の輝しい伝統風景なんだぜ。

「小説ならうんと読むさ、深田康算先生以来の伝統だ。井上靖君はあれは詩人だね、何んだつたかな、津路海峡を鳥が渡つてゆく綺麗な描写があつたよ。大体印象の鮮やかな描写というものは半行か一行のものだ。こつこつかく奴は文章でも絵でも下手業と相場が決つ

「此身無掃所」

「君も京都に引込んで田舎者になつたな、飛行機が珍しいかい」、そして何を思つてか、依然として微笑(幾分か冷笑)を遣え乍らボソソと云われた。「君、ヘーゲルは偉いよ、どうせ君は勉強せんだらうが、せめて彼のブリーフニ(書簡集)位は読み給え、ブリードリンヒ・ヘーゲルは偉いよ」。

(文責在加藤)

冬の日はずっと落ちて窓外の暗い空を信号灯を点滅し乍ら定期便が飛んでゆく。ぼかんと見上げてると先生掉尾の一言を浴せられた。「君も京都に引込んで田舎者になつたな、飛行機が珍しいかい」、そして何を思つてか、依然として微笑(幾分か冷笑)を遣え乍らボソソと云われた。「君、ヘーゲルは偉いよ、どうせ君は勉強せんだらうが、せめて彼のブリーフニ(書簡集)位は読み給え、ブリードリンヒ・ヘーゲルは偉いよ」。

(文責在加藤)

日展見学

—座談会—

京都国立博物館技官

白 焔 よ し

京都大学文学部嘱託

乾 由 明

精進する大家

白 焔 日展全体をみて、行くべきところに行きついた感じですね。というのは、古いものはますます古くなり、新しいものは新しくなつた。そして中間層は動きをなくしている。三十代、四十代の特選をとつたような作家はその後落着いてしまつて、危な気もない代りにどうなるのか一向つかめない。その点大家たちは偉いと思いますねよく勉強し精進している。

乾 中堅作家のレベルがある程度まできたので全体としてはよくなつたように思いますね。反面一部の大家や経歴の長い人たちの中には古さが浮き上つているものもある。色彩の点ではどの部門も明るいので、みて楽しいということでしょう。しかしそういう作品の表情はなまぬるさと背中合せの点

もあるけれども。

白 焔 そのなまぬるさということですが、大胆に取組んでいくという作品は少いですね。

乾 落着いてしまつて非常に楽天的だ。何の苦しみもなさそうですね。

白 焔 日本画あたりでは大家の方が自分の仕事をきびしくつきつめています。若い人たちにはそれがいい。特選の絵はちやんとして、うまいが、とくにこれというものはありませんね。

乾 そうですね。特選になるほどの作品に問題作がないというのはどういふことでしょうか。ただ佐藤園夫の「津軽の浜」はおおらかな描写でよいと思う。工芸的になつてしまふよりよほど将来性がある。

白 焔 東山魁夷の「暮潮」はどう

でしょう。「日本的なもの」ということを常に意識して仕事をしている人だけだ。

乾 水の扱いなど面白いと思うのですが、もう少しところで「成功」とまでいかない。

白 焔 上の方の黒い林なんか墨絵の感じをねらつてはいるのだが、全体として企画と表現がうまく一致しないのですね。

乾 抽象絵画はどうでしょう。

白 焔 堂本印象もそうだが、杉山寧も抽象をはじめましたね。あの「仮象」というの。

乾 印象はマチエールにもこつていながらその必然性となると……杉山の方も気分におぼれすぎているところがあるが。——橋本明治の「月庭」はよくまとまつていいですね。いつも強引すぎてあまり好

きでなかつたのだが、こんどは、青というような危い色を使いながらうまく処理している。

白 焔 池田透郎もいいですね。乾 息子の池田道夫も腕は達者だがビニツフニ張り気がなる。むしろ野々内良樹「春」は割方よかつた。

白 焔 浜田観は甘い……乾 感覚的にちよつと古いように思いますね。それから西山英雄、強引でついでいけないですね。

白 焔 立体感がないし、構図が上中、下の三段にわかれてつながらない。

竹喬、華楊氏ら乾 山口華楊の「獄」はあれでかなりよいと思う。同じ動物画を手がける乾ようきもありますから。

白 焔 大家のよいところでしょう

ね。小野竹喬さんでも対象に自分をかけていますね。

乾 伊東深水はいかですか。白 焔 パーマネントの現代美人はいや味があるが、こんどは自分にふさわしいものかいてると思ひました。着物の柄などについても細かい神経と知識をもっている人だから。

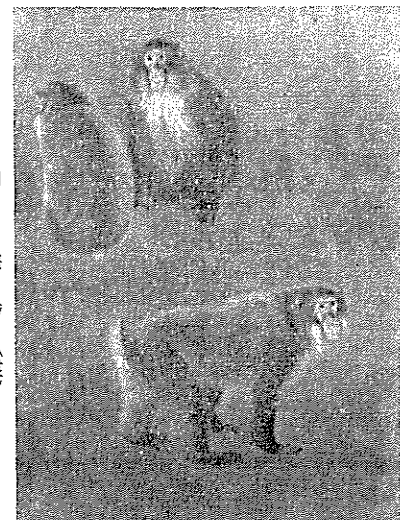
乾 梶原耕彦も例の美人画ですね。ただお娘さんでも奥さんでも女人を描いてもみんな同じ顔、感じになつてしまふ。

白 焔 技術は松園さん以上かも知れないが……乾 寺島紫明の方がいやみがありませぬね。勝田哲さんは絵が変つたけれども弱い。

白 焔 中村正義はストリップの舞妓でした。



伊東深水 〆思淵〆



山口華楊 〆猿〆

乾 あそこまで行かなくてもいい感じがする。

白 焔 ほかでは中瀬昂、中尾一郎川島浩、山田申吾、宇田大虚といつた人達に好感がもてた。

乾 大虚はちよつと面白かつたですね。それから山田現代という人の絵は好きな方なのだが、こんどはあまりに女性的過ぎる。

白 焔 才気はあるのだから、リズムが訴え過ぎる。稲田和正という人はおとなしい絵だがまじめな制作ですね。

乾 それから正井和行の「苑」というのは非常にしづい調子でやつていました。

白 焔 初入選組ももう一つでしたね。

乾 日展調というのがあるので、新人はそれに調子を合わせようとする。これでは新人らしい新人が出るはずがないですね。

抵抗のない洋画

白 焔 それでも洋画にくらべると日本画はどこか見させるものがありますね。洋画は二十年前とそう変つていないのですから古くさい乾 絵を見ていて全然抵抗がない優等生というのでしょうか。それに新人はいやに素人くさい。大家は納まつているし。

白 焔 森田元子ちよつとよかつたのぢやない？ 例の婦人像。乾 特選の根岸敬の「二人」岩の上に着いた女の人がユカタを着て……あれなど古いが写実画として

はまだしつかりしていた。ほかに文部大臣賞の田村一男。

白 焔 ちよつと変つたところのある池部均。

乾 石川寅治の灯台の絵は骨組がしつかりしてましたね。

白 焔 山下新太郎、有馬生馬ではさすがに古いし、中村研一は十年一日の如く奥さんがモデルだが、あまり変らない。小糸源太郎は好きなのだが、こしはあまりよくなかつた。

乾 高野三三男のロウ人形みたいな絵。一般にはうけるんでしようか。それに棟方志功の版画もあまり感心しなかつた。

白 焔 アメリカなんかでうけるそうだけれども、それは芸術作品というより、多分に手づくる工芸的なところが面白いというわけなんです。

乾 彫刻でなにかありましたか。白 焔 写実一点張りで何んといふことはない。しかしザンキンといふような年寄りでもあんな彫刻をつくつてはいるんですから、もう少し何とか動いてもよいのに。

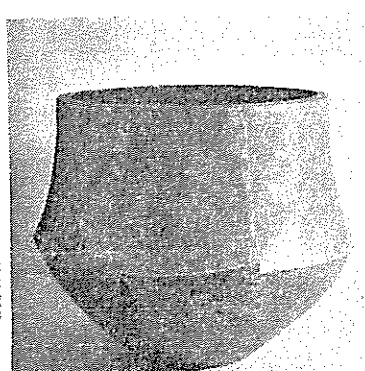
乾 裸像などいろんなポーズをとっているのだが、表面的で何んのことかよくわからないものが多いですね。

異色、羽紫の木彫

白 焔 木彫の羽紫小枝子さんは全体として面白味がありますね。部分的には表現過剰で、技術が足りないといふことになるが。



石川寅治 〆燈台のみえる〆



楠部弥式 〆金銀彩装〆

乾 特選の「若き日」は特別とあげられるほどではないが、仕上げがまいった。

白 焔 工芸は困つたものだと思う。やたらに大きくて。ツボなど使え

るといふのが魅力のほうなのに、これでもかこれでもかの大きさをだ。

乾 実用にならないというのならもつと実験性を大胆に出すのも一方だが、それもなし。

白 焔 陶芸には中国の古い土器なんかにあやかつて素材を出そうとしたものがあるが、それを借りなければ「素朴」がでないと思ひつていますね。土のマチエールを強調しすぎるくらいもある。

白 焔 イサム・ノグチなんかの影響かも知れませぬ。

乾 しかし陶芸には深くて広い伝統もあるんだし……白 焔 野口晴朗の「騎駱駝」がなぜ特選になつたかわけが分りませぬね。説明でもつけてくれなければ、ずいぶん妙な作品ですよ。

乾 若い人たちは庭に置くようなランプを試みていたが、造形的に弱いですね。

白 焔 楠部弥式のツボは、ちよつと賞味風味だが面の処理はうまいと思つた。染織では小合友之助さんあたりがよかつた。

乾 特選の中村光哉の「遊園地」は散漫なところもあるが、ロウケツとしてあかぬけしている。

白 焔 高木敏子の綴織はセンチならず、素朴な味わいがありました。それから渋谷和子の染屏風のシンブルで、カスリを思わせる。あれもよいと思う。

乾 高木さんはウブなところがよい。変んに達者にまとめていないところ。

白 焔 漆器は飾棚など金持趣味、田舎の大尺趣味ですね。

乾 近代建築の中に置くというふうなことを考えたのかも知れないが、それならそれでもつと機能的に考える必要がありますよ。形が大きいというだけでは能がない。

白 焔 実用をいいながら実用的でないわけですね。昔の大名屋敷なら合うかも知れないが……

書と現代

乾 書は日展の書というより、現代の書自体の問題を大分はらんでいますね。

白 焔 平安朝風の草仮名など盛んにかかれてはいるが、余くのきれいで、あれではさすがに訴えるものがない。また漢字にしても幸白だと杜南だとか偉そうな詩が多いが、こけおどしめいたものを感じてしまふ。多少なりとも墨蹟

に親しんだ目にはそうみえてしまふ。藤岡保子の「奥の細道序」は自分の持味を大事にしていて比較的よかつた。

室本尚郎氏帰る

かねて滞仏中の室本尚郎氏は夫
人同伴で十二月二十日帰国、二十
五日五年ぶりで京都に帰つて来
た。同氏は昭和二十七年京都美術
専門学校の研究科を卒業、日展に
出品してしばしば賞状をとり頭角
を現わした。伯父室本印象氏の欧
州旅行に同行したが、三十年再渡
欧し、パリにおいてはアンフォル
メル運動の潮流にふれ、それまで
具象的だった画風を大きく転換さ
せて今日に至っている。その間バ
リの近代美術館主催の新人展で外
人賞第一位、またプレミオ・リン
ーネ（国際前衛美術展）でグラン
プリ第二位をとつたりして評価を
高めた。日本滞在は五月までの予
定であるが、東京と京都で個展を
開くという。これまでの仕事ぶり
からみて「日本画」の概念でなく
れない画風が示されることだろう

北沢映月氏京都を去る

日本画家北沢映月氏（日本美術
院同人）は来春早々東京都大田区
上池上町一九四の新居に移す。
映月は明治四〇年京都生まれ、生粋
の京都っ子として育つたが、画業
のうえでも一転期を画すべき時期
であるとして、新しい環境の中で
改めて第一歩を踏出すのだとい

う。上村松園、次いで土田表徳に
師事し、端麗な美人画家として世
に出、人物画や花鳥画に惚つて院
展の中堅として活躍した。京都と
しても権原謙三、広田多津、秋
野不矩氏らと並ぶ西画画家の一人
を欠くことになるが、ここ数年來
三谷十糸子、向井久万、金島桂華
氏ら在洛画家の東京転居が目立つ
た傾向である。

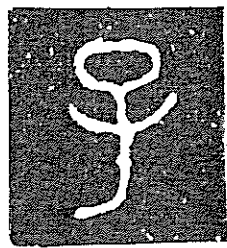
日展出品者のパーティ

第二回日展は十二月十七日から
京都市美術館で開幕したが、同日
夕四条大橋東詰の東華菜館で出品
者懇親会が開かれた。昨年から民
営になった日展に作家も協力の実
を示そうというので、ことしから
社団法人日展の提供で会場にステ
レオ演奏が流されたりしているが、
この懇親会も地元の出産者が一堂
に会して氣勢をあげようというも
の。福田平八郎、小野竹喬、徳岡
神泉、山鹿清華、楠部弥次氏らお
歴々をふくめて二百余人、日展理
事長の辻永、事務局長山崎寛太郎
氏も出席して盛会であった。席上
山崎寛太郎氏は「東京での日展は
入場者十五万人を突破した。昨年
にくらべ一万余人増である。わ
ずか一万余りかというかも知れな
いが、これは日展に對峙するとい
われる院展の全期間中の入場者と

匹敵する。全ジャーナリズムがい
かに日展を攻撃しようとも、かく
も多数の観衆を上野の森に吸収
したという事実を無視することは
できないだろう」と日展の「国民
的規模」を誇示した。

京都書院画廊閉鎖

個展やグループ展によつて新人
たちの発表の場であつた四條河原
町上ルの京都書院画廊は改装のた
め新春から当分閉鎖することにな
つた。



TOPIC

ケラ美術協会

京都在住の新作協日本画部
門の新進出品者を中心に「ケラ美
術協会」が結成された。会員は中
塚弘、船越修、名合幸之、浜田泰介
桐健一、岩田重義、中尾一郎、物
部隆一、楠田信吾、西井正氣、松
井祥太郎、野村久之、久保田老重
郎の十三人。このうち中尾一郎だ
けが日展系で、自申社（宇田萩邸
塾）の職員である。また学芸大出

身である物部隆一を除き、あとは
みな美大出である。既成団体から
の退会と旗上げについて
「現代社会は個人を非個性化し
機械化してしまふが、本来さうい
う動向に抵抗して、個人の主体性
を擁護しつゝ、個人の芸術
の世界においても、画壇の実態は
個人の自由をうばうことが多い。
新制作においてはわれわれはむし
る優遇されたほどだが、幹部作家
との年代のずれをいまいにして
おいては美術と作家の発展はない
とにわかれの世代の主張
をはつきりさせる」と松井祥
太郎は語っている。新制作協
会日本画部も創造美術旗上げ
以來すでに十数年経ち、その
間美術思潮の変動にもはげし
いものがあつたから、世代の
分裂を意識する新人たちが現
われても不自然ではないだろ
う。協会は三十五年春に展覧会を
開く予定だという。

日本画ベステン

文芸春秋が新年号で「日本画家
ベステン」を特集している。一
年間をベステンとかベストスリ
ーとかで締めくくるのはジャーナ
リズムの型物の一つだが、野間清
六、河北倫明、喜門安雄、久富貞
の美術評論家四人に美術記者船戸

洪吉、小川正隆、画商の桜井猶司
を加えた七人の選考委員が「第一
線を活躍し亮れもし、人氣もある
画家」を選び上げている。まず徳
岡神泉、東山魁夷、奥村土牛、杉
山寧、福田平八郎、小倉遊亀、山
本丘人がパス、あとの三人はいろ
いろと因縁をつけられた末、上村
松園、高山辰雄、福田豊四郎が選
ばれている。次いで投票によつて
これら十人の画家の順位をつけて
いるが、それによると一位は福田
平八郎で56点、二位杉山寧55点、
三位徳岡神泉と奥村土牛が49点、
五位東山魁夷は41点、六位山本丘
人34点、七位は小倉遊亀と上村松
園で30点、九位高山辰雄は28点。
しんがり福田豊四郎で13点。選
考委員が変れば、これら人気画家
の顔ぶれにも多少変動があるかも
知れないが、ベステンを選出す
るまでの選考委員間のやりとりを
載せているのが面白いといえ面
白い。

池大雅美術館開く

池大雅美術館が洛西西寺畔に竣
工、開館した。鉄工業を営む篤志
家佐々木米行氏の設営になるもの
で、十二月三日から公開された。
佐々木氏は生來書画を愛好して、
三十才ころから大雅の作品を集め
て来たが、現在書画合せて、百二
十点に達しているという。

Table with 2 columns: 見 (View) and 聞 (Hear). The top row contains '見' and '聞', and the bottom row contains '紀' and '談'.

- 9 -

岡部三郎

寺崎広業の出品画「支那風景」
をながめて斜めに墨線を引き
た。つづいて同室にあつた竹内
栖鳳「雨」・菊地芳文「小雀」・
谷口香嶠「羅浮」・佐久間鉄園
「遊郭迎備園」・川端玉章「雨後
山水」いづれも審査員の作品を
次ぎ次ぎに墨汁をぬつて歩き、
警官が馳せつけるやら、当局は
委員会を開き善後策を協議する
やら大騒ぎになつた事件
があつた。暴漢は京都在住の
の自称画家某であつた（美術
新報）。事件の動機につい
てはこの記事は何ら触れて
いないが、同じ年の春に京
都で起つた別の株事から凡
その見当はつくのである。
全くの別人で何ら関連もな
いが、新古美術展覧会で
出品中の自作を破棄した事
件があつた。この場合は取
調によつて「近來京都画
壇に動きつつある革進の気
運を軽視の風と見なし、徒
に新を追い奇を衒うものと誹謗し
審査の不公平を憤懣した」結果で
あることがわかつた（日本美術）。



竹内 栖鳳 「雨」

つと見ることが出来るからであ
る。何しろ半世紀も前の作品で、
吾々にはこの事件のようなショッ
キングな受け取り方は出来ないけ
れども「雨」が京都画壇では当時
新しい作風の絵に属していたこと
は概念的になら容易に理解出来
る。さすがに大観「山路」（同じ

第五回文展出品」と比べると京
都の作風の時間的なおくれは争え
ないが、同展に出品された表徳
「髪」・華岳「二月の頃」と比べて
も、これら京都の最年少者達の作
品と同時代のものと受け取れるし、
表徳「髪」が文展に出品される前
に仮面展覧会で陳列され、青年
画家の間で大変な評判になつたこ
とからでも「雨」が当時どのよう
な位置にあつたかは想像がつくの
である。

雨

云つて五十才に近い栖鳳
と二十才を僅か出た弟子
の表徳との作画態度が同じだと云
うのではない。栖鳳の場合は作画
上の主要な契機を表現技法とくに
筆法の熟練度の上に求めている傾
向が目立つて強い。それは栖鳳の
全作品を通じて云えることであつ
て、栖鳳がいつも四条派の最後の
画家だと云われるのは、四条派な
り、円山派なりの伝統の上に確立
されたノルムから一度だつて踏み
はずさなかつたからばかりでなく、
どの絵にもどこか必ず作画意図か
らノルムをはつきり選んで、
つまり変則と云うのか、丁度歴史
画の場合の version とか、音楽
の場合の cadenza と云われるよ
うな個所を選んで、栖鳳独自の奔
放な筆法を自在に使駆して見せて
絵の全体に新鮮なアクセントを与
えることにいつも不思議に成功し
て、南画への偏向の強い当時の四
条派以上に一層それらしい純粋な
効果を与えるからである。このこ
とは古い四条派を現代の吾々の感
覚に再現して見せる鍵であり、栖
鳳のあらたな創造であつた。

京都市 美術館ニュース No.27

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和35年2月15日発行

—1960年—

京都アンデパンダン展作品募集

本市では1957年以来毎年京都アンデパンダン展を開催し、多数の作家に活躍の舞台を提供してきました。本展は居住地の如何を問わず、広く作家を結集し造形上のそれぞれの主張と実験をカナメに美術の新しい局面をひらこうとするものです。本年は関西一円の出品者の便を計って大阪での搬入も行います。貴殿の旺んな御出品を期待します。

主催 京都市
会場 京都市美術館
会期 昭和35年3月24日～3月30日
賛助者 (五十音順敬称略)
井島 勉 今泉篤男 中原佑介 矢内原伊作
会期中の3月27日(日)午後1時から京都市美術館事務所で賛助者を囲む合評会、現代美術についての懇談会を開く。

募集作品 絵画、彫塑(作品の寸法形態については別に制限しませんが、会場の広さ、設備等に制限がありますから展覧会としての良識をもつて御出品下さい)

出品料 1人2点まで300円、3点400円、4点500円。但し出品は4点まで(出品料は作品搬入とともに納入のこと)

搬入 京都搬入 昭和35年3月22日(火) 午前10時～午後4時 京都市美術館
大阪搬入 昭和35年3月20日(日) 午前10時～午後4時 大阪市立美術館
大阪搬入の場合は大阪市立美術館から京都市美術館までの運送費を主催者で負担する。

搬出 京都搬出 昭和35年3月31日午前10時～午後4時 京都市美術館
大阪搬出 昭和35年4月3日午前10時～午後4時 大阪市北区梅田町、日通大阪総括支店 (搬出の場合は必ず作品預証を提出下さい)
大阪搬出の場合、会場から搬出場所までの返送費は主催者で負担する。

作品保管 会期中主催者は善意を以つて作品を保管しますが不慮の災害による損失は保証致しません。

展覧会案内

独立京都作家展	16日～20日	独立京都作家展	16日～20日
彩土展(陶芸)	22日～26日	独立京都作家展	16日～20日
▽大丸美術部画廊		三輪高英個展(日本画)	5日～10日
1月		刀剣展	12日～17日
第2回日展	15日まで、但し年末と元日は休館	五龍展(洋画)	19日～24日
独立美術展	18日～31日	チャーチル会書初展	26日～31日
警察美術展	25日～31日	1月	
日吉ヶ丘高校美術コース展	27日～31日	▽丸物美術部画廊	
京都公立高校書道連盟展	29日～31日	新春画展	2日～14日
▽京都府ギャラリー		サンリップ・クマール・タゴール	2日～14日
1月		油絵と水彩画展	15日～21日
第2回UPA作品展(染色)	7日～8日	京都在住作家油絵展	23日～28日
安田謙個展(洋画)	10日～14日	触土小品展(陶芸)	30日～2月4日

第2回日展 京都市美術館 1月15日まで(但し28日一元日は休館)

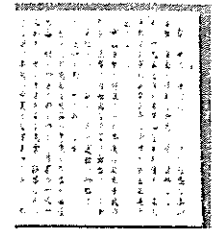
(前頁から)
東山風の水墨技法にこの画家の苦心と仕事が生み出されているように思われる。要するに「雨」から発展して生れた作品で、ここではノルムと変則或は偏向、つまり異種の意図をもつた筆法が後年の作品に見られるようなコントラストの精緻な組合せまでに発展しておらず、案外に強い四条風の全階調の中で、破墨風の筆法だけがいかに概念的な産物のように遊離して、若し栖鳳が抑制と云うことを知らなければ、栖鳳自らの教養を銜うかのような銜学風ないや味だけが残ったかも知れない。

鳳の師事した幸野楳嶺は明治二八年二月一日になくなっている。その頃はまだ日清戦争は終結していなかったが戦争の山も見え固全体が戦捷気分を沸かしていた。四月に入つて明治天皇が京都に駐蹕すると、京都の街々は日の丸の旗と提燈で埋められてしまった。丁度そのさなかに軍国景氣をあふめるかのように第四回内閣勸業博覧会が京都で開かれた。前年にはインクラインが完成し、同じ年に平安神宮の造営も終つて面目を一新した岡崎村一帯が会場として選ばれた。京都市はその翌年この旧博覧会場の第二部品場を美術館としたから多くの展覧会はその催しものは次第に岡崎を遠ぶるようになった。

二 どのように展覧会の中心が従来の御所の御苑から岡崎に移つた頃を境として画壇も次ぎの新しい世代と入れかわつた。棋嶺の死の前年森寛齋がなくなつていって、数年後には岸竹堂もなくなつてしまつたので一時は画壇も主導的な長老を失ふことになつた。その結果棋嶺門下の菊池芳文・竹内栖鳳・谷口香崎・都路華香や寛齋門下の山元春華らの擡頭を早め、京都画壇ははつきり新旧二派に別れることになり、四〇年文展が開設されると栖鳳・芳文・春華の新派の精鋭が文展審査員を独占してしまつた。今日私がかつた作品を見て感じる以上に當時はさまざまな批判もあれば立場があつたわけだ。

「雨」はただちに取下げられ、文部省は京都の善芳堂に依頼して洗い落させた。そう云えば画面の中央向つてやや右寄の個所に墨痕を洗い落した跡がかすかに残つてゐる。(当館囑託)

アンデパンダン



忘備録

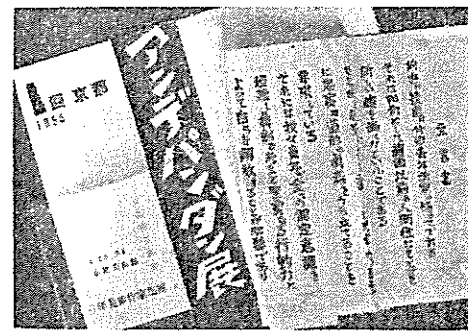
藤田 猛

を聞くに至る実質的な要因となるのである。青年美術家集団の結成昭和29年8月京都在住の新人画家によつて京都青年美術家集団(青美)が結成され、会員として青木義照、竹中正次、市村司、大熊峻、奥井章夫、森 清、石原薫、名越ひとみ、元広美智子、大門清次、稲木 秀臣、田中守貞、中塚和夫、藤波晃、真山豊、中村義一ら約四十人が集つた。かれらの大多数は行動美術展出品者や行動美術京都研究所の研究生であり、石原薫は新制作展の出品者であつた。このうち集団結成のリーダーシップをとつたのは市村司、稲木秀臣、竹中正次、田中守貞らであり、一、画壇の中央集権的で、階級的な機構をいさぎよしとせよと、一、自からの志向による芸術を發表せよとせよに若い世代による自発的な發表の場が不可欠であること。以上の二点が強く意識されていた。会員の中村義一は同志社大学で美学を専攻し、美術評論を書き、若い美術家の動向に特別な関心をもつて、いたことから、集団のメンバーとなり理論的中心となつた。

志望者を集めていた。しかしそこにも画壇に関する觀念の分歧があつたのである。もつとも集団の成員の側に主観的な断定が余くなかつたとはいへないであろう。しかしかれらは時代の矛盾を、たとえそれが觀念の主観をまじえたものであつたにせよ、より敏感に感じとつた世代であつた。当時雑誌「美術批評」に拠る若い評論家たちは既成画壇を攻撃し、新しいゼネレーションによつて美術界に別の分野が開かれることを期待し、唱導し、新人層に少なからぬ影響を投げかけていた。一方すでに日本アンデパンダン展および読売アンデパンダン展は回を重ねていた。このような状態の中でかれらも自らの主張を画壇的手続きなしに、じかにぶつつける場所を探し求めたのであつた。京都青年美術家集団の宣言書は次のよう

宣言書

前進か後退か! 今日青年画家の悩みは一つである。それは如何にして絵画以前の人間性に基き、新しい絵を描くかということである。(中略)それには我々青年が総ての固定意識を超越し真剣な考えと堅実な行動力によつて自から解放することが必要であり、ここに初めて多角な人によつて自由に研究し自由に展覽する場所と會を得ることによつて絵画の純粋性は維持され発展改革され得るのである。斯くして京都に優位なるアンデパンダン連成の礎石になることに誇と自覚を有つ人に依り本會を設立した。



青美主催の展覧目録と宣言書

き前進することを誓う。一九五四年八月二十五日 京都青年美術家集団

ここで注目されるのは集団がすでに集団の活動の舞台としてアンデパンダン形式による展覧会の設置に明白な目標を置いていること、すなわち既成画壇とは別の展覧会を拠点に新しい美術界を形成しようとしたことであつた。もつともこのようなイデオロギは、その純粋さの故に、現実の中で、幾多の問題点に逢着し、ゆさぶられるのであつたが――

かくして京都青年美術家集団主催の第一回アンデパンダン展は昭和30年3月23日から31日まで京都市美術館階下北側五室で開かれた。出品者は稲木久造、稲木秀臣、元広美智子、大門清次、竹中正次、大熊峻、石原薫、市村司、三浦三郎、青木義照、東紫蔵、田中守貞、球数末三郎、中塚

アンデパンダン として京都市の主催するアンデパンダン展は四回展を迎える。いうまでもなくアンデパンダンは無審査制の展覧会であり、自由な制作と自由な発表、ならびに権威に拘束されない公衆の自由な鑑賞を建前とし、さらにこのような自由な制作者の態度と鑑賞者の教養を助長するための展覧会である。そしてこのような展覧会の存在理由は、開かれた土壌のうえでのみ澄潤とした展開が期待できるといふ芸術本来の性質から容易に理解できるのである。

またアンデパンダンはフランスにおける同展の歴史にも明らかにならうに反官展の性格をもち、何ものにも依存しない、自立的な展覧会であることを本質としている。前記のように京都アンデパンダン展は四回目を迎えるが、市主催になるまでに同展は純粋に自立的な展覧会としての前史をもつていた。そしてこの前史の存在は昭和32年に至つて市が主催してアンデパンダン展

和夫、森 清、小名木陽一、矢野喜久男、藤波晃、井上豊治、奥井章夫、高橋和平、志摩篤、真山豊、嶋田米造、豊高満男、福沢忠夫、山本(名前不詳)、森康次(二十人)、出品は総額百五十点であつた。青美の成員以外からの出品はごく少数にとどまつた。

中村義一は目録に「無審査制がその特徴ですが、これは美術家の独自の個性や批判的な精神、積極的な発言の自由の場と云ふことなのです。したがつて展覧会自体に一つのまとまつた主張がないとしても、それはアンデパンダンがあくまで自由な話し合いの広場だからです。とわいはいま権威と断絶した場所に新しい前衛的な意欲がある以上、すでにアンデパンダンの成立自体が激しい主張を明確に物語っているわけ

す」とマニフェストを書いた。

第一回アンデパンダン展が開かれた同じ年青美は分裂した。それは秋の既成団体展のための制作期をひかえて、アンデパンダンのみに結集するか、団体展にも出品するかで意見が分れたことによる。

協議会 多致決によつて既成団体展に不出品が決定されたが、反対派は脱退して秋の団体展に出品する。同時に新しく「グループ目撃者」をつつた。このような分裂は青美結成当時、その成員にいろいろな色合いがあり、そこから当然予想されることであつた。目撃者は30年10月7日から11日まで京都府ギヤラリーで第一回展をもつたが、成員は青木義照、石原薫、大熊峻、小名木陽一、藤波晃、モリキヨシ、矢野喜久男の七人であつた。一方青美も翌31年1月15日から21日まで京都市美術館で「青美展」を開くのである。

さてアンデパンダンのプロモーターであつた青美は分裂したが、目撃者の第一回展が開かれた時期に、今後のアンデパンダン展については目撃者も協力するという話し合いが青美との間に成立した。

このようにして第二回目の、すなわち1956年京都アンデパンダン展は青美の単独主催を離れ、青美、目撃者および、呼びかけをうけた大津市の新人洋画グループ孤立地帯、行動美術京都研究所の新人グループ「ギルクラ」の四者を構成員とする京都アンデパンダン協議会が主催下におかれた。

この間の事情について協議会のメンバーの一人であつた市村司は「この年に市がアンデパンダン展の計画をすすめているというニュースをわれわれは知つたのであるが、当時出品者によつてアンデパンダン懇談会というのが作られていて展覧会の反省や来年度のプランや問題を毎月話し合つていたのであるが、ここでも市のアンデパンダンが大きく問題になり検討された。結局市のアンデパンダンに協力することに意見がまとまつた。それは第一に経済的な心配がなくなつたこと。そしてPRがわれわれ以上になされるであろうということ等である。もちろんアンデパンダンの本質、性格等についての疑問や問題はあつたと思ふのだが……」と述べている。(京都市美術館ニース16号)

アンデパンダン展の合評会



第二回展は昭和31年4月7日から15日まで京都市美術館階上北七室を使つて開催された。協議会の積極的な動きかけがあつ

そのころ京都市および京都府市美術館には若い世代の美術運動を強力に助長すべきであるという気運が具体化しつつあつた。市はフランス美術展のような特別企画のほか、毎年日展、京展、アマチニアを対象とした市民美術展を主催して来たが、戦後の新しい断層を対象とした新企画を遂行すべき時期にあることを自覚しつつあつたのである。そしてこの計画はまず昭和31年11月23日から29日まで、陶芸グループ走泥社および日本画グループ、パンリアル美術

協同会を京都市美術館に招待しての「新人グループ展」として実現するが、この年京都アンデパンダン展を市で行うことについてアンデパンダン協議会との話し合いがもたれたのもこのようないくつの意志にもとづくものであつた。

この間の事情について協議会のメンバーの一人であつた市村司は「この年に市がアンデパンダン展の計画をすすめているというニュースをわれわれは知つたのであるが、当時出品者によつてアンデパンダン懇談会というのが作られていて展覧会の反省や来年度のプランや問題を毎月話し合つていたのであるが、ここでも市のアンデパンダンが大きく問題になり検討された。結局市のアンデパンダンに協力することに意見がまとまつた。それは第一に経済的な心配がなくなつたこと。そしてPRがわれわれ以上になされるであろうということ等である。もちろんアンデパンダンの本質、性格等についての疑問や問題はあつたと思ふのだが……」と述べている。(京都市美術館ニース16号)

もちろんアンデパンダン協議会によるアンデパンダン展から京都市主催によるアンデパンダン展への移行は決して機械的、無機的に行われたものではない。アンデパンダン展を官公庁が主催することは形式的にはたしかに奇異な出来事であり、アンデパンダンの歴史から飛躍するものであつた協議会における大きな問題となつたのも当然のことだろ。市の計画するアンデパンダンと別に従来通りのアンデパンダンを京都において並立させようという意見もあつたという。

館 蔵 品 収 集 の 苦 勞

いまの美術館ができたのは昭和八年で、竹内栖鳳・菊池芳文・山元春幸ら文展創設以来の主導的な管轄の時代は終つて西田翠嶺・菊池契月らの時代にはいる転換期にあつた。と云うのは芳文はその十五年前の大正七年に他界して、感奮から願望を併発して一時重慶を伝えられた栖鳳も手後の療養を理由に伊豆の湯河原に転地したのが美術館が竣工する一年前の昭和七年だつたし、最年少の春幸も丁度同じ八年七月に逝去したからである。従つて館の日本画取集は京都作家の昭和八年後の作品が主体となつてゐるのはあたり前のことだが、館開設前の作品も亦可なり多数にのぼつてゐる。今日館の取集

の仕方を変更して見なおして見ると、京都の特異な地方性、歴史的伝統を重視してゐることはうなづけても、近代美術館として出発した館が七条の博物館と便宜上区別するため明治四〇年文展創設以後の作品を陳列することになつてゐたから、現代美術の上限を明治の初めにおく一般の通念からすれば可なりくつれた格好となつて無体系な取集法と云われても仕方がない。とは云つても現在集められた作品の概観だけでも、そこにおのづからある纏りがあつて、一種の特徴ある体系らしい輪廓が描き出されてゐるのに気付くのである。それは作風上のつながりから来るものでもなければ、統一をもつた嚴密な作品評価から来るものでも

のような取上げ方をしてもどこかで当面しなければならぬ問題であつて、若し京都画壇と云う構築物の断面図をつくることしたら、栖鳳を中心とした作家と作家との間の一種の力学的な力の関係の展望を描くことになつてしまふであらう。

日でも、栖鳳を現代京都画壇の最高の巨匠とすることには誰も異論のないところだ



山 元 春 幸 八 上 楽 園

評備から来るものでもなくて、作家に対する評価、もつと遠慮なく云わせてもらえば、それぞれの作家の画壇的ウエイトが優先的に考えられた京都の画壇の縮図がそこにあると云うことである。一部にはそれを相撲番付風な取集たとする批判も耳にしないわけでもないが、京都画壇と云つた性格の課題を取り上げる限り、ど

ろが、栖鳳と画壇との関係にはやはり歴史の流れがあつて、成長期、最盛期、晩期とそれぞれの時代に占める栖鳳の位置は決して一様なものではなかつた。栖鳳・芳文・春幸らが新進画家として活躍して来るのは明治二〇年代の終り頃から四〇年文展が出来までの時期で、毎年春に阿曾で開かれた京

頭からおとろえ、四糸田山の末流ながらも画系の正統を誇る栖鳳らとはまた別の断層をつくつていただけのことなのである。

か、この呼称は京都復興に大きな役割を美術学校が果たして来たことを指して、これら三人が画壇の若々しいニセル

走 泥 社 の ア メ リ カ 巡 回 展

京都の新人陶芸団体走泥社のアメリカ巡回展が二月中旬からはじまる。アメリカンクラフトマン協会の招きで渡米した同人の原照夫と加州クリップス・カレッジのソルジャー教授との間で話がまとまつたもので、同カレッジでの展覧を皮切りに一年間の予定で主要都市を回る。すでに同人十五人の昨年中に作った作品約五十点を送り出したが、アメリカ各地に陶を素材にした造形運動が起つており、オブジニもある走泥社風の陶芸を参考にしたいというのが招待の目的らしい。

昭和三十四年度の主な貸出作品は次の通り。

- 辻 普堂「馬と人」
- 「辻普堂・柳原義達二人展」
- 神奈川県立近代美術館 5月
- 石崎光瑠「春律」
- 菊池契月「南波照間」
- 北脇 昇「眠られぬ夜のために」
- 中村大三郎「ピアノ」
- 橋本閑雪「長恨歌」
- 西山翠嶺「梅花」
- 木島松谷「つのとく鹿」
- 都路華香「龍」
- 「三代名作展」
- 朝日新聞社
- 朝日新聞社 9月
- 菊池一雄「青年」
- 毎日新聞社
- 上村松園「晴日」
- 毎日新聞社 2月



TOPIC

「日本画の世代展」の作家

り、周囲を木サテで囲んで慎重にディスプレイされたが、同像が京都で公開されるのは最初のことであるので、美術史家や画家の来場も多かつたようだ。

ZEROの会生れる

若い画家の團又宏、藤波晃、関根勢之助、森本岩雄、彫刻家の上田弘明、三宅五穂、井上平八郎、宮永理吉と同志社大助教授土肥美夫(文学)、評論家の津山昌が集つてZEROの会ができた。「種々のジャンルの交流によつて現代の共通の問題を論じ芸術の新しいリアリテを追求する集り」である。絵画と彫刻の八人はそれぞれ二科、独立、行成、自由美術の出品者であるが、お互いに作品を通じて語りあつた、という点に会の特徴がある。2月12日から16日まで京都府ギャラリーで第一回展を開いた。

土 橋 画 廊 移 転

土橋永昌堂は四糸烏丸東入ルの三井銀行裏側に移転することになり、現在新店の工事が進んでいる。永昌堂はこれまで円山広盛宅跡といわれる高倉東に店があり、近年は画廊も経営していた。新店でも二階に画廊をつくるか、従来よりいくぶん広くなるという。開店は四月末か五月はじめの予定。

館 蔵 品 の 貸 出 増 える

近代日本の美術の流れをあとつける「名作展」などの企画は現在もおとろえを見せないが、そのため当館の所蔵品の貸出数も漸増の傾向にある。当館の所蔵品は明治以後、現代までの京都関係の作家を中心とした日本画、洋画、彫刻、工芸品であるが、ここ数年菊池契月の「南波照間」富田溪仙の「伝馬橋図」の借出が一番多い。「南波照間」は美人画展「用」として、伝馬橋図はこのところ盛んな溪仙の回顧展に活用されている。

美 術 館 で の 吉 祥 天

二月四日から十日まで美術館で吉祥天開眼協賛奉納展が開かれた。奈良葉師寺の有名な吉祥天像の修理が完成した記念の書展で、岸首相ら開眼、各家派の管長、書家ら知名人のほか、近畿二府五県にわたる小、中、高、大学生の一般奉納書無慮五千点が展覧され、吉祥天の聖像あらたかなところが如実に示された。像は厨子に納ま

り、周囲を木サテで囲んで慎重にディスプレイされたが、同像が京都で公開されるのは最初のことであるので、美術史家や画家の来場も多かつたようだ。

ギーの中核を形造つていたことを意味していた。そしてもうこの時分には栖鳳はその先頭に立つてゐた。

文展が創設されると、これら三人は審査員に選ばれて彼らの地位がいよいよ決定的になるが、文展時代に入ると別なられた関係の均衡が表面化して来る。それは春幸だけが森寛斎の門下で、栖鳳・芳文のライヴァル・キャンブに属し、互に競争し合う立場に起因していた。この時代には栖鳳が画壇のリーダーシップを握つていたことは云うまでもないが、芳文が間もなく他界したから、学校派の位置は栖鳳と春幸とで両断せられ、因果的な門閥関係から二人はライヴァル・スクールとして対立した。そして更に次ぎの世代になると、栖鳳の後継者となつた翠嶺と芳文の家系をついだ契月とが競争者としての二つの力の均衡のもとに京都画壇を代表する。

(前頁から)

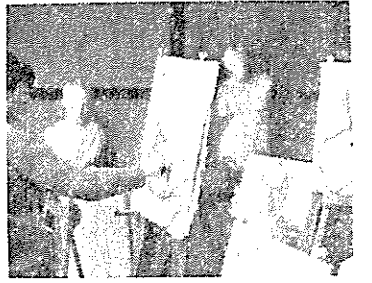
品では白馬嶽にはじまる日本アルプス踏破の頃の取材と思われるお花鳥を描いた春幸の「山上楽園」(大正一二年布展出品)一点があるだけで、芳文の作品も、肝心の栖鳳の作品もなかつたと云うことはまことに皮肉な話だが、一昨年だつたか漸く栖鳳の「雨」を取集することを得た。

要

するに館の取集品の体系的な特徴の一つ、模範と栖鳳とを結ぶ強い線は京都の近代画の中心軸でもあつて、美術学校の開設、京都美術協会の設立など次ぎの世代への洞察の上に立つた模範の美術行政面や教育面の活動の成果として栖鳳・芳文・春幸・華香ら多くのすぐれた門下生を輩出した結果から来たものなのである。

して見ると、鉄斎をはじめ南画系の作品も、松年ら鈴木派の作品も、春幸門下の多い自由画壇の作品も、今日ではとらわれない目で見なおす必要が同時に起つて来るわけもそこに出てくる。

館の作品取集と云う仕事も考え方もよるがまことに骨の折れ仕事なのである。(当館嘱託)



自分で染めて絵をかくていると
言った人が多い。入金金五〇〇
円、月謝三〇〇円。

(一) 夜間部
タロツキ部と石膏デッサン部
に分れ、火曜日の午後6時から
9時まで行。協友大垣順造、
橋本武岡氏が指導。入金金五〇
〇円、月謝五〇〇円、モデル代
等は別。

京都美術彫刻研究所 東山区
今熊野南門吉町、万松園内。
昼間部と夜間部があり、いずれ
も火木土曜に開講する。昼間部は
午前9時半—12時、夜間部は午後
6時—午後9時。石膏および人体
モデルによる研究を行う。指導は
新制作協会員岡本庄三氏。入金
金五〇〇円、月謝二〇〇円。

現代美術研究所 上京区河原
町九太町下ル、ヘルミ総合文化研
究所内。
初心者の基本研究と作家として
活動しようとする人たちの研究の
場であることを目的としている。

新制作油絵研究所 中京区二
条蛸屋町下ル、清和学園内。
名前の示す通り新制作協会の油
絵部の作家が指導に当たっている。
組織は日曜部と夜間部に分れる。
(一) 日曜部
新制作協会員岡本庄三氏が指導し
て毎日曜日9時から12時まで開
かれる。石膏デッサンと人体デ
ッサンに分れる。現在二十人程
度の参加者があるが、出品を意
図するよりもどちらかと言うと

入所料四〇〇円、月謝人体科四〇
〇円、石膏科三〇〇円。

関西美術院 左京区岡崎南御
所町四〇、市電岡崎通下車。
京都市内の他の研究所とは違つ
てこゝだけはちよつと歴史が古
い。創設は明治39年に溯り、設立
発起人の中には浅井忠も名を連ね
今日の京都洋画壇の育成に大きな
役割を果たして来た。建物は当時の
京都高等工芸教授武田博士の設計

美術研究所 一覽

になるもので、内部に僅か手を加
えただけで創立当時のまゝ今日に
至つてゐる。
内容は
乙科 石膏模型写生
甲科 A・B 人体写生
タロツキ科 に分れる。
入所すると先ず乙科に入り、規
定の鏡技を経て甲科Aへ、更にB
へと進む。甲科Aでは素描を、B
では油絵を専ら研究する。タロツ

キー科は自由研究である。
研究時間は
乙科 午前9時から12時までと
午後1時から4時までの二組
に分れる。
甲科 A・B 午前9時から正午
まで。甲・乙科とも曜日を開
かない。
タロツキ科 毎週日曜日の午
前9時から正午まで。
料金は、記名料五〇〇円、月謝
五〇〇円、院費二〇〇円、モデル
費は適時徴収。
料金さえ払えば性別年齢を問わ
ず随時入学出来る規定であるが、
入学申込者が非常に多く設備にも
限りがあるので、直ぐにはなかな
か入学出来ないのが実情だそうで
ある。

指導には主に第二紀会会員津田
周平氏が當つてゐるが、特に毎水
曜日には二紀会会員黒田重太郎氏、
春陽会会員川端弥之助氏が當るこ
とになつてゐる。
紫野洋画研究所 上京区小山
北大野町六八、市電北大路新町電
停北側。
▼ヤマダアトリエ洋画研究所 石
膏デッサン部—毎月曜午後6時—
9時、指導山田新一氏、油絵・デ
ッサン婦人部—毎土曜午後1時—
4時、指導山田新一、山田キミ氏
(以上入会金七〇〇円、月謝二五
〇円、一回七〇円)
▼光風会京都支部研究所 毎日曜
午前9時—午後4時、指導山田新

一氏ら。入金金、会費の規定あり。
▼タロツキ部 毎水曜午後6
時—9時、第一回目七〇円、以後
六回五〇〇円の割でチケット制。
瑠美苑 中京区河原町三条下
ル二筋東入
▼昼間部 ろうけつ染(月曜午後
1時—5時)、手芸(火曜午後2時
—5時)、木彫(木曜午後5時—9
時)および金曜午後1時—5時)、
陶器(金曜午後6時—9時)、デッ
サン(油絵(土曜午後2時—5時)
▼夜間部 造形デザイン(毎金曜午
後6時半—8時半、6ヵ月修了。
タロツキ部 毎週火・土午後6時半
—9時。

市民美術共同アトリエ 主催
京都市および京都市教育委員会。
事務所は京都市文化課。
美術を愛好する市民を対象とし
た実技入門教室で、一年間を三期
に分けて開講し、現在第三期の開
講中。
日曜アトリエ 毎日曜午前10時
午後4時。日本画(指導主任・美
大日本画研究室)、洋画(竹中三
郎、重達夫)、洋画と銅板画(古
野由男)
夜間アトリエ 日本画(広田多
津)、洋画(桑田道夫)、彫刻(岡
本庄三)の三科。日本画木曜日、
洋画火曜日、彫刻火、木曜日、い
ずれも午後6時—9時。
会費一期間(三ヵ月、延十二回)
六〇〇円、次回の入会受付は三月
の予定。

○年頃になります)が遠隔も少く
て疑問の多い時代なのです。それ
からずつと後六四〇年頃ササン朝
が滅んで、イスラムが入つてくる
まで、この間がまた判らん点が多
いのです。正倉院の御物、あれに
はササンの影が濃いと云われてい
ます。大体考古学者は予備知識を
持たずにいきます。現場に行つ



ガンダーラ仏 著 監

て、現物を描出して、それから研
究する訳ですね。その意味では今
度の調査も断片的には得るところ
がありました。唯これらの断片を
関係付けるのがこれからの仕事で
す。ええ、判らん所が出てきたら
又出かけていきますよ。
イタリーの調査隊がバキスタン
で四年来尻を落付けてましてね、
我々考古学者にとつてはコイン
(貨幣)が唯一のインデックスな
んですが、その肝要のインデック
スを先に押えられて了つてこれに

時間の流れ

は弱りました。
「考古学における時間感覚です
か? 感情問題を扱つるのは心理学で
しようが、考古学でもある程度時
限は細かくなつていきます。雲崗石
仏が大体三〇〇年位で変化の波が判
ります。弥生式土器でも五〇〇年
を十時代位に分けられるでしょ
う。しかし考え様によつては時
間と云うものは
悠々と流れるも
のですね。ベン
アワルのランブ
ね、あれはグブ
タ朝から今日ま
で二四〇〇年全
く同じ物です。
バストロと呼ぶ
チエスの駒があ
る、これを十世
紀位の層から掘出します。ところが
これが現在町の市場で売つて
る駒と全く瓜二つなんです。恐らく
インドス文化以来四千年同じ物
を使つてゐるんですよ。アンチモ
ニイ・ロッド——眼に赤色の隈を
つける細い棒です、これが矢張り
四千年来同じ物です——ええそ
うです、お化粧品と玩具とは時間
の永遠を賣いて不易かも知れませ
ん」。

「向うで日本は一民族一國語だ
と云うと不思議な顔をします。そ
れ程多岐の民族が寄合世帯をして
るのでしよう。そうですね、美人
の多いのはアルメニヤ人でしょう
か。これは古来の遺伝でしょう。
それからイランではダリウス型の
男をよく見かけました。私勿論ダ
リウス王に認見したことはない
が、いかにもダリウスだと云う感
じの顔付です。矢張り時間はマラ
トンの戦以來二四〇〇年悠々と流
れているのでしょうか」。

(文責在加藤)

うか。茶です、tea、イランで
は主に紅茶をのみます。石油が豊
富だから茶はふんだんにのめま
す。小さな磁器杯に入れて、先に
砂糖の塊を口に入れてから飲むの
です。美味いですね。アフガニス
タンでは緑茶です。矢張り砂糖を
うんと入れて、但しソップは日
本同様陶器を用います。それが
made in Japan でね、けれど此
方を見たこともないような模様で
す、向う様の趣味に合せてあるん
でしょう。マンチはソ連製。パキ
スタンに入つても矢張り緑茶をの
みます。ミルクを沢山入れてのみ
ます、ミルクと云うと水牛の乳で
すよ」。

この研究所は三十年の昔若き日
の東郷精三氏が設計したもので、
中世の僧院を写した仲々ロマンチ
ックな建築である。思えば近代の
学問は僧院から発祥したのだから、
或はこれも当然のことかも知
れない。
水野氏は奥まつた研究室で、關
石短の写真の下に机を据え熱心に
仕事の整理をしてられた。「お忙
しいですか」と挨拶すると、「い
やあ、考古学にはね、半分は職人
の手仕事がありますから却て助か
りますよ」と笑い乍ら席を立つて
来られた。つい先日バキスタンの
旅から帰られたばかりなのに殆ん
ど疲労の跡は見えず、いつものよ
うに淡々として話を切出された。
「ええ、去年の七月から半年は
かりイランからアフガニスタン・
バキスタンに行つてきました。調

クリティク (2)

京大人文科学研究科教授
考古学
水野清一氏

空はきれいに晴れているのに、風のみ
徒らに寒いある日の午後、北白川の人文
科学研究所に水野さんをお訪ねした。

古のヘルンヤはですね、バルチャ
王国時代に大変
ギリシヤ化され
ていたのです。
ガンダラ仏と云
つてあの綺麗な
仏像で誰もよく
知つてる通りで
す。そして研究
もよく出来てい
ます。唯ね、こ
のバルチャ時代
の末(BC.二〇

梅原の京都時代

黒田重太郎



黒田重太郎氏

明治三十
七年八月、
日露役に
召中の都
英喜氏に
て、京都
洋画界の
状を報じた浅井忠先生の手紙の中
に、次ぎのような一節がある。

「研究所はこの夏中裸体モデル
に一生懸命にして一日の休みもな
く続け居り、梅原殊に手を上げ
候」
ここに研究所とあるのは、現在
の関西美術院の前身、聖徳院洋画
研究所のこと、創立はこの前年
六月である。浅井先生の京都来住
を機として、それまであつた在洛
洋画家の私塾を解消合同して、先
生の指導に委ねたのである。加藤
源之助等と共に、伊藤快彦氏の門
にあつた梅原は、この研究所に移
るや、年ならずして頭角をあらは
し、この年入所した安井曾太郎に
大きな刺激を与えた。

その前一年余、鹿子木先生の室町
画塾に学んでいたが、俊英梅原の
名は、その頃から聞えていた。
が、実際にその人を知つたのは、
この三十八年の夏、日本海大海戦
のパノラマを引受けた鹿子木氏の
お手伝いとして、研究所の有志と
共に、大阪へ行つた時である。梅
原は恐らく好奇心から、これに加
わつたらしい。それで私たちと一
しよにいたのは一日か二日位であ
つたが、宿屋の待遇に眉を立てた
のだとあとで云つていた。

「折角美術館から来て頂きまし
たが、私美術はよく解らないので
す。美術の話はできないのです。
フランスの文明は長く古いです
からその開花も美術ばかりでは
ありません。中世期は建築、ル
ネッサンスの頃が絵画、十七世
紀は演劇、十八世紀は哲学、十
九世紀は詩、とその形は色々あ
ります。しかし、これらの形を
貫いて底を流れているフランス
のパンセ（思想）と云うものが
あります。私はこのパンセに大
変興味を持つて居るのです。例
えば、画家では私セザンヌを尊
敬していますが、彼のタブローウ
そのものより、彼の魂と頭の中
に生きていた
考え方を云う
ものに敬意を抱
いています。あ
なたもフランス
の文明に興味を
お寄せなら、そ
の底を流れるパ
ンセを読んで下
さい。デカルト
・ラロッシュ・フ
・ワルソンのジッ

袴をつけたことがあり、その袴も
荒い綿の仙台平であつたので、目
立つていけないと、好きなコバル
トやバーミリーオンをなすりつけ
て、わざわざ汚していた。
研究所ではその頃、午前、午後、
夜間と、三部に亘つてモデル写生
をやつていた。勉強家の安井は、
この三部とも殆んど休まずに運つ
ていたが、梅原は気の向いた週間
に、朝なり、午後なり、夜なりに
顔を出すと云つた風であつた。そ
うして時々、家や野外で描いた絵
をもつて来て見せたが、それは一
々私たちの驚きであつた。またデ
ッサンも、調子よく行つて居る時
はよいが、手古摺ると疳を立ててカ
ルトンをけとばしたりする。前で
描いていた私など、それで飛び上
つたものである。

これはほかのところでも書いた
ので、さつとつけ加へておくが、
何と思つたのか、彼は一時、西院
辺で養鶏をやつて居たことがあ
つた。洋行の希望が家で容れられな
かつたので、やけを起して、散
々無茶をやつた携句で、画かきを
止めるつもりであつたとも聞いて
いる。その希望が実現されて、渡
仏の途につき、勇躍神戸埠頭を立
つたのは明治四十一年五月であ
る。梅原の京都時代はここに終
る。（洋画家）

梅原龍三郎展

主催 読売新聞社・京都市
会期 4月3日—24日(22日間)
会場 京都市美術館
入場料
大人 一〇〇円、学生 八〇円
小人 六〇円
(団体・二五人以上)
大人 八〇円、学生 六〇円
小人 四〇円
ほかに京阪、阪急、奈良電の連
絡割引券も発売される。
出品の一部 自画像(明41)
裸体裸婦(同) 南風風景(明
30) カンヌ暮色(昭34) 浅間山
42) ナポリ(明45) 腕太き女 (同) 薔薇園(同)
1960年京都アンテナパンタ展
3月24日—30日 京都市美術館
絵画と彫刻 入場無料
3月27日午後1時から美術館事務所で賛助者を囲む合評会を
行う。来聴歓迎

有名な建築家オギュスト・ペレ
の高弟レモン・メストラレが建築
一切を引うけた。簡潔でしかも
瀟洒としたあの美しさは京都名建
築中の白眉だろう。現館長アン
コントル氏は長くレバノンのミッ
ションにおられた後、去年の夏京
都に転任して来られた。一度イン
タヴンしたと思つていたが氏も公
務が忙しお忙しい。漸くお客様
(アンドレ・マルロウ氏)も離日
された頃を見計つて面談を申込
み、意外にも長時間お話をきくこ
とができた。お話をきく——と云
つても、実はこちらは完全なツッ
ポである。学館教授長谷川泰氏の
御好意で口訳や註釈を聞き乍らや
つと話が判つたと云うのが実情で
ある。それにしても、フランス語
と云うものは果し聞いてるだけで
も何んと綺麗なものだろう。古い

葡萄酒みたいな匂がある。但し、
以下の文中にその肝腎の匂が抜け
ているのは洵に己むを得ぬ成りゆ
きと御諒承願いたい。
「折角美術館から来て頂きまし
たが、私美術はよく解らないので
す。美術の話はできないのです。
フランスの文明は長く古いです
からその開花も美術ばかりでは
ありません。中世期は建築、ル
ネッサンスの頃が絵画、十七世
紀は演劇、十八世紀は哲学、十
九世紀は詩、とその形は色々あ
ります。しかし、これらの形を
貫いて底を流れているフランス
のパンセ（思想）と云うものが
あります。私はこのパンセに大
変興味を持つて居るのです。例
えば、画家では私セザンヌを尊
敬していますが、彼のタブローウ
そのものより、彼の魂と頭の中
に生きていた
考え方を云う
ものに敬意を抱
いています。あ
なたもフランス
の文明に興味を
お寄せなら、そ
の底を流れるパ
ンセを読んで下
さい。デカルト
・ラロッシュ・フ
・ワルソンのジッ



南風風景

ド・サルトル・マルロウ——夫々
時代や個人として深い価値を持つ
ています。美術も好きですが、フ
ランスのオム・ド・レットル(文
人)も面白いですよ。」
この文人の中の一流の人ポール
・ヴァレリイ、あの人は地中海岸

地中海
が南欧文化の特質でもあるのでし
よう。イオニヤの哲学を想つて御
覧なさい、光線と潮風とで出来て
るでしょう。ヴァレリイの思想も
同じです。
彼に「若きバルク」と云う名高
い長詩があります。セニト近郊の
叢林と泉とからしみでてくるよう
な詩想です。ヴァレリイは数学の
名手でした。数学な
どと云う抽象そのもの
も決して風景と無
縁ではありません
——透明で堅くて決
定的な地中海風景
と。彼はレオナル
ド・ダ・ヴィンチを
尊敬してましたね。
レオナルドは大数学
者ですからヴァレリ
イはこのイタリア人
の中に精神的同郷を見出して
いた
訳です。
ヴァレリイの用いる言葉は繊細
巧緻で難しいです。われわれフラ
ンス人にとつてさへ難しいです。
日本語に移すことは不可能でし
よう。だから、詩よりもむしろ随筆
論文をお読みになるがいい。ええ、
画家のこと、マネやドガのことを
書いてますね。私はしかし「テス
ト氏」やデカルトに關した著作が
一等好きです。彼の透明で深遠な

知性の行使力がよく解ります。
テスト氏は何んだか人間と云う
より水晶みたいな感じですが。あ
成つては人間は幸福とは云えませ
ん。けれど、ヴァレリイと云う人
は剛毅な人で、人間の幸福をテ
マにした作家ではなかつたので
す。彼は知性を純粹化して、果し
てそれがどの位透徹力をもつもの
か実験していた人です。ええ、一
生かかつて。バルザックは老大な
コメデイ・ユメン(人間劇)を書
きました。彼は彼独自のコメデ
イ・アンテラクチュネル(知性の
劇)を書きたいと云つて居ます。
知性と知性がエタンセルを散ら
して相接触する劇です。
お国の青年も十年程昔ヴァレリ
イをよく読んだ時代があつたそう
です。全て大作家は社会的受入
れ方に大きな消長があります。ま
た近い将来彼は再び青年達から採
上げられるでしょう——新しい強
い意味をおびて。
ジイドはヴァレリイと生涯を通
じて変らぬ友達でした。若しジッ
ドをお読みになるなら、私は彼の
「日記」をすすめます。彼の大き
な知的スケールの全体が見通せま
す。色々の問題に透透し乍ら生き
てゆく近代人の足跡がよく解りま
す。どの問題も皆生々としてわれ
われの皮膚にふれるように描かれ
ています。」(文責在加藤)

クリティク

(3)

関西日仏学館長

モリス・アンコントル氏

京都市民にもお馴染の日仏学館は昭和
11年春九条山から今の場所(東一条)に
新築移転してきたものである。

ものに敬意を抱
いています。あ
なたもフランス
の文明に興味を
お寄せなら、そ
の底を流れるパ
ンセを読んで下
さい。デカルト
・ラロッシュ・フ
・ワルソンのジッ

のセニトの生れです。私の故郷も
セニトです。その上学校も同じコ
レージュを出ました。ヴァレリイ
の詩「海辺の墓標」はこのセニト
の丘を描いて居るのです。空・潮風
・光線・岩壁、地中海辺の風景は
透明で堅いです。大体風景と云う
外のものが、内部の抽象的な思想
に影響することがあるでしょう
か。少くともフランスやイタリアイ
の思想は風景と一致します。これ

後素協会

明治三〇年代の 京都の美術展覧会

梶の伝記記者は、梶鳳が 京都西堀に頭角を見せは じめる時期を明治二四年秋の日本 青年絵画共進会(京都青年画家懇 親会主催)の頃とするのが普通 である。梶鳳はその一月に若い画 家の集りである同懇親会の議長に 推され、同会主催で展覧会を開 くことを議し、五月にはその審査 員に選ばれた。

都美術協会は毎春大規模 の新古美術品展覧会を開 くことを決議したし、京都博覧会 もこの年は特に日本青年絵画共進 会の名で開かれ、梶鳳・芳文・香 崎・春華・呉晩ら若い審査員の 進出を見た。如雲社も後素協会と 改名、三〇年には第一回全国絵画 共進会を開くなど三〇年代の京都



京都の美術展覧会と云つても 明治のはじめには今日吾々が一 般に考へるものではなかつた。 明治五年から毎年御所の御苑 内で開かれる京都博覧会が主 なもので、一〇年代に入ると、 中央で政府が主催する両度の 絵画共進会(東京)など、選ば れて審査員をつとめた梶鳳・ 米徳・寛斎・在泉ら一部の画 家が当時の新しい西歐風の展 覧会形式を京都へも紹介移入し た。一九年、梶鳳らの京都青年 絵画研究会が京都青年絵画会を 開いたのも、いわばこのよう な試みで、京都でははじめての 「絵画」展覧会であつたと伝え られている。二三年一月には 京都美術協会が梶鳳・米徳らの 発起で発足。第二回内閣勸業博 覧会にも梶鳳は審査のため東上 した。さきに述べた梶鳳らの 日本青年絵画共進会が開かれた のもまたこの翌年のことであつ た。

寛斎・梶鳳らの前世代から起さ れ、この二人の死とともに後素協 会と改称改組されたもので、早く から京都の全画壇を横につなく当 時の諸流派をあつめたれつきとし た美術団体であつた。はじめは前 出の画家の外に、延臣画家として 知られ如雲社の命名者である豊岡 随實や中島来章・塩川文麟らが維 新の戦乱をよそに毎月相会した風 雅親睦の催しであつたのが次第に 会員を増し、もう二〇年四月創立 二十年祝賀会の記述を見ると京都 の全画壇が挙げてこれに参加して いる。当日は円山の正阿弥・牡丹 畑・長楽寺の諸様をぶつ通して賀 筵。新古畫画それに社員の遺墨を 展観。正面には円山応挙筆天開 図、土佐光眞筆千羽鶴を左右に配 し神酒饗餅を供えた。その下方に 故人の姓名を連記して神霊を合祭 した。この天開図は正月の初会に はいつも正面に飾られるもので、 円山派を全員達は重く見ていたと 云われる。新画では百年・崑山・ 鉄斎・竹堂・春華・玉泉・在泉・ 曾文・梶鳳・米徳・寛斎ら百八十 余点。古畫画も二百数十点を集め て盛会であつた。(京都美術)

か、二〇年代も半ばを 過ぎると、時代を反映し て新旧の対立が画壇の中でも見ら れ、全画壇の和合に専ら努めたい

れどもともすれば遊びに流れる寛 斎の会経営にも一部からの批判が 起り、逆に梶鳳らは金の一部から 異端視されたこともあつた。この 対立感情は二人が死んでしまうと 急に表面化し、第四回内閣勸業博 覧会が終つて間もない十二月には 總會を開いて如雲社を後素協会と 改称することを議決。会頭に旧知 事北垣國道、副会頭に雨森菊太郎 を推して、翌二九年一月京都市議 事堂で発会式を挙げた。

温健なく分古い眼からすればこ のような評が生れるのかも知れな い。大塚保治東京大学教授が「京 都画家対東京画家」と題して講演 し、この展覧会に論及して「京都 画家は技巧において優り東京画家 は思想において勝ると評したこと の方が今日の眼からすれば納得出 来そうである。 その後は注目すべき展覧会も開 かれず四四年頃までつづいて活動 を停止した。四〇年に文展が創設 されたからである。(当館鳴託) 写真 都路華香 龍 (本館蔵) 昭和四年 パリ日本画展出品

ことは、出品作家で組織された 実行委員会の動きであつて、陳 列、会場設営等の点で氣付かれ た方もあろうが、美術展として ちよつと変つた試みが見られ た。 京都アンデパンダン展 3月24日 30日 アンデパンダン展も今度で回を 重ねること四回、関西一円に出 品を呼びかけているので応募の 大幅増加が予想される。大阪で 搬入を受付けるのは今回が始め て。恒例の評論家を困らぬの懸 念は27日の予定。 当館主催以外のもの

方国井忠陽・竹川友広ら はこれを寛斎の遺志に背 くものとして如雲社統緒を主張。 天江・竹堂・崑山・鉄斎・秋石ら の賛成を得て、国井ら九名が発起 者となつて同二九年二月有楽館で 継統式を挙げた。

この後は注目すべき展覧会も開 かれず四四年頃までつづいて活動 を停止した。四〇年に文展が創設 されたからである。(当館鳴託) 写真 都路華香 龍 (本館蔵) 昭和四年 パリ日本画展出品

美術館の一年

今年一年当館で 開かれた展覧会 を全部収録しま した

当館主催のもの

第十一回京展 5月3日 - 17日

多数美術家を育てて来た京都 の土地柄と、美術館草創以來 の伝統とは第十一回展をも好 況のうちで成就させた。審査 員方からの出品も好調で、結 局須田國太郎の「波切」等

第二回日展 35年12月17日 - 27日

各地巡回作三三三三三、地元作二 四二点を陳列。観覧者は日を追 つて増加、これまでに劣らぬ盛 況をむかえた。今回注目された

○モダンアート展 22日 - 31日

○青陶会展 23日 - 28日 京工織大建築科学生展 23日 - 27日 ○新匠会展 26日 - 31日 行動美術京都作家展 2日 - 8日 陶芸家クラブ展 3日 - 7日 京都学芸大学美術科総合展 3日 - 8日 (次頁へ)

展覧会案内

美術館

- 3月 美大作品展 17日-21日
- 京都アンデパンダン展 24日-30日
- 二十四丁会展 24日-30日
- 児童美術クラブ展 26日-27日
- 4月 梅原電三郎展 3日-24日
- 今日本青少年書作品展 9日-10日
- 戦場美術京都展 12日-17日
- 京都陶芸家クラブ新作陶展 16日-20日
- 新制作日本画展 16日-21日
- 3月 京都府ギャラリー
- 3月 佐野猛夫染織作品展 18日-22日
- 衣笠会第二回日本画展 25日-28日
- 4月 行動五人展 31日-4月4日
- 須田圃太郎スケッチ展 8日-12日
- 電土会展 14日-18日
- 3月 大丸美術部画廊
- 3月 林正次彩画展 22日-27日
- 4月 牧人社展 29日-4月3日

- 海外美術コレクション展 5日-10日
- 茶道具展 12日-17日
- 春死会日本画展 19日-24日
- 3月 丸物美術部画廊
- 3月 新古書画即売展 26日-31日
- 4月 岩津ガラス即売展 2日-7日
- 谷本教室ローケツ作品展 9日-14日
- 芹沢銈介染物研究所新作展 16日-21日
- 3月 べんてる画廊
- 3月 精神薄弱児童作品展第一部 22日-27日
- 4月 第二部 29日-4月3日
- 4月 杉田多津子個展 5日-10日
- 西大路文化学園児童作品展 12日-17日
- トキワ・アトリエ展 19日-24日
- カレィ会小品展 26日-5月1日
- 3月 マロニエ画廊
- 3月 生花「あうんの会」第一回展 24日-27日
- 4月 独立「散四風」 1日-4日
- 中川栄一、小溝一夫二人展 8日-10日
- 美大「水の会」展 14日-17日
- 3月 阪急百貨店
- 3月 武者小路実篤小品展 22日-27日
- 荒井秀宣油絵展 22日-27日
- 児玉佐規子油絵展 29日-4月3日
- 3月 藤田美術展 29日-4月
- 中国古美術名品展 29日-4月
- 3月 市立神戸美術館
- 美術名刀展・高僧名筆展 27日まで

メモ

友の会
 ▼会員証の切換 会費払込は、同封の振替用紙を御利用下さい。折返し会員証を郵送します。
 ▼児童美術教室生徒の募集 会員の子弟で小学生に限る。申込〆切3月30日(水) 会費は年間約五千元。
 ▼見学会の予定 東京の西洋美術館(松方コレクション)を見学したいとお申出が多いのですが、乗り物、費用の点などでよい智慧が浮かびません。何人程参加して戴けるかも察しがつきませんので、はがきで御意見を係までお寄せ下さい。
 第十二回京展 5月3日から15日まで京都市美術館で開かれることに決定した。部門は日本画、洋画、彫刻、工芸、および書。応募等の詳細については館へ照会下さい。

月	日	展覧会名	会場	期間
3	22	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
3	29	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
3	29	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
3	29	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
3	27	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
4	1	独立「散四風」	大丸美術部画廊	1日-4日
4	8	中川栄一、小溝一夫二人展	大丸美術部画廊	8日-10日
4	14	美大「水の会」展	大丸美術部画廊	14日-17日
4	22	林正次彩画展	大丸美術部画廊	22日-27日
4	29	牧人社展	大丸美術部画廊	29日-4月3日
4	2	武者小路実篤小品展	大丸美術部画廊	22日-27日
4	4	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
4	14	電土会展	電土会	14日-18日
4	16	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
4	16	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
4	17	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
4	18	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
4	24	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
4	25	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
4	31	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	1	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	12	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	19	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	26	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	24	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	27	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	8	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	14	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	17	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	22	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	27	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	29	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	29	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	29	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	29	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	31	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	1	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3	生花「あうんの会」第一回展	生花「あうんの会」	24日-27日
5	3	独立「散四風」	独立「散四風」	1日-4日
5	3	中川栄一、小溝一夫二人展	中川栄一、小溝一夫二人展	8日-10日
5	3	美大「水の会」展	美大「水の会」展	14日-17日
5	3	阪急百貨店	阪急百貨店	22日-27日
5	3	武者小路実篤小品展	武者小路実篤小品展	22日-27日
5	3	荒井秀宣油絵展	神戸市立美術館	22日-27日
5	3	児玉佐規子油絵展	神戸市立美術館	29日-4月3日
5	3	藤田美術展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	中国古美術名品展	神戸市立美術館	29日-4月
5	3	美術名刀展・高僧名筆展	神戸市立美術館	27日まで
5	3	須田圃太郎スケッチ展	電土会	8日-12日
5	3	電土会展	電土会	14日-18日
5	3	新制作日本画展	京都府ギャラリー	16日-21日
5	3	京都陶芸家クラブ新作陶展	京都府ギャラリー	16日-20日
5	3	戦場美術京都展	京都府ギャラリー	12日-17日
5	3	今日本青少年書作品展	京都府ギャラリー	9日-10日
5	3	梅原電三郎展	京都府ギャラリー	3日-24日
5	3	衣笠会第二回日本画展	衣笠会	25日-28日
5	3	行動五人展	行動五人	31日-4月4日
5	3	カレィ会小品展	カレィ会	26日-5月1日
5	3	西大路文化学園児童作品展	西大路文化学園	12日-17日
5	3	トキワ・アトリエ展	トキワ・アトリエ	19日-24日
5	3	マロニエ画廊	マロニエ画廊	26日-5月1日
5	3			

1960年
京都アンデパンダン展出品者

(搬入順)

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|--------------------------|
| 大庭シズ子 | 奈良市登大路町2の13 | 松田高治 | 京都市伏見区深草瓦町87の1 |
| 猿橋秋雄 | 豊中市上野1の63 | 早川浩司 | 京都市伏見区深草墨染旭町 寺内寮 |
| 渡辺宏 | 伊丹市南野塚口北住宅615 | 田中一男 | 京都市右京区嵯峨鳩ヶ巣町(保津峡) |
| 菊池三郎 | 大阪市東淀川区淡路新町193 | 河田凱夫 | 京都市下京区朱雀畑町17-1 |
| 新谷瑠紀 | 神戸市生田区中山手1-50-1 | 山下成也 | 京都市東山区五条橋東六丁目541 |
| 吉田隆 | 大阪市阿倍野区三明町2の8 | 辻井一位 | 大津市石山島居川町24 |
| 木村太郎 | 大阪市都島区御幸町3の51 | 三輪崇子 | 大津市梅林町796の2 |
| 福田陸朗 | 芦屋市前田町7 | 野々口泰代 | 京都市中京区西ノ京笠殿町3 |
| 横山憲一 | 大阪市北区浮田町126 | 増井覚 | 大津市栗津西町1118 |
| 三宅淳三 | 大阪市住吉区平野京町5丁目30 | 初田寿 | 神戸市東灘区魚崎町横屋 灘高内 |
| 淀葦一 | 大阪市大淀区中津南通3-67 向田方 | 浜田英子 | 京都市左京区下鴨北園町西一丁目40-3番地 |
| 池田久典 | 大阪市北区梅ヶ枝町199の2
今竹造型美術研究室内 | 篠田照 | 京都市左京区北白川下池田町96 |
| 田川夏子 | 大阪市住吉区御崎町1丁目61番地 | 金大淵 | 京都市伏見区菱屋町649 |
| 渡辺俊児 | 大阪市大淀区豊崎西2の45 | 山形真之進 | 京都市北区大將軍鷹司町35 |
| 池田彰 | 枚方市大字禁野中宮 第一住宅7の503 | 安田輝夫 | 京都市右京区谷口唐田ノ内町14 |
| 久保晃 | 奈良市川上町八反田576-9 | 中島弘 | 京都市上京区大宮通一条上ル東 |
| 玉本一穂 | 大阪市東淀川区新高南通1の14
KKセントク内 | 高井英嗣 | 京都市左京区下鴨下川原町35 |
| 池内秩央 | 大阪市東住吉区加美新家町133 | 中江良久 | 京都市右京区松尾松山山添町16
今津 見方 |
| 黒沢公雄 | 大阪市阿倍野区阿倍野筋5-65 | 林俊治 | 京都市伏見区桃山町泰長老123 |
| 田中節子 | 大阪市天王寺区北山町27 | 宮田久次郎 | 舞鶴市京口50 |
| 足立真三 | 芦屋市朝日ヶ丘町315 | 儀間道義 | 神戸市長田区大橋町一丁目133 |
| 中井淳二 | 大阪市西成区玉出本通2-48 | 松本正司 | 京都市中京区室町通夷川上ル |
| 溝淵尚 | 大阪市阿倍野区昭和中315 | 三上利秋 | 京都市伏見区魚屋町 林戸方 |
| 宇野正実 | 大阪市阿倍野区阿倍野筋8-65 | 阿部壮 | 京都市中京区壬生中川町20 |
| 田中公之 | 大阪市北区浪花町138 | 中村武 | 京都市中京区新烏丸通九太町下ル |
| 辻本周右 | 吹田市染之井550 | 武田晃 | 京都市左京区下鴨膳部町1514 |
| 福寿一三 | 尼崎市元浜町1丁目公団住宅2号棟3号 | 人見紀子 | 京都市伏見区深草藤ノ森1
京都学芸大学 |
| 小笠原誠次 | 神戸市長田区五番町8の18 矢木方 | 郡司修三 | 〃 〃 男子寮 |
| 田中建司 | 大阪府南河内郡美陵町1041 | 谷イサオ | 京都市伏見区白銀町森下方 |
| 久保田益弘 | 豊中市桜塚元町3の115 | 香川修 | 京都市伏見区桃山毛利長門西町1 |
| 村松達也 | 奈良県大和郡山田中5 | 納健 | 神戸市生田区北野町2丁目24 |
| 山崎朔三 | 神戸市東灘区魚崎町上松原729の8 | 高瀬一三 | 大津市栗津西町 |
| 藤井多鶴子 | 金沢市馬場崎町16 | 山田哲子 | 京都市東山区新門前通梅本町253 |
| 井阪節子 | 三重県伊勢市尾上町 | 安福八郎 | 京都市中京区西ノ京御興町9-1 |
| 石原薫 | 京都市南区上鳥羽村山町 新和荘 | 黒野猛 | 京都市中京区室町通六角下ル
宮井KK内 |
| 元井登古代 | 京都府乙訓郡長岡町開田 | 中嶋茂雄 | 大津市松屋町22 |
| 村田吉男 | 京都市上京区油小路一条上ル556 | 吉竹弘 | 京都市東山区大和路五条下ル2丁目 |
| | | 草野文彦 | 京都市北区小山下内河原町46 |
| | | 加藤正嘉 | 岐阜市鶴田町2 |
| | | 竹中正次 | 大阪府北河内郡交野町宇私部 |
| | | 中井克己 | 枚方市山之上1-116 |
| | | 坂東義徳 | 豊中市服部48の1 ひまらや荘 |
| | | 高山京子 | 京都市北区小山東大野町20 |

アンデパンダン展に出品して

京都アンデパンダン展については観覧者側からいろいろ批評がきかれたが、一方出品者は、この展覧会を作品発表の場所としてどう感じ、自己と全体の仕事についてどのような評価と感想を抱いたか。5人の作家に手記を求めた。

和氣史郎



初めてアンデパンダンに出品してみたが他の展覧会にない実に楽しい気楽さがある。団体展、グループ展、個展等にはいつもヘンなものがあるのだがアンパンにはそれが無い。「ヘンなもの」とは一寸言葉にはならないし、たくさんあつて、書き切れない。したい仕事をするのが作家であるのにそのヘンなものを為に幾分かヘンな個性が発生している。ヘンなものをなくすると気



富谷道信

京都のアンデパンダンには、初めての出品

だつたので、この展覧会について私なりの見方をしていた訳だが、京都市が主催になつて行つたアンデパンダンの意義が、大変深いものであることを再認識した。彫刻の作品を出品したので、彫刻作品には期待と興味を持って見た訳ですが、全般的に、絵にくらべて彫刻が低調だとなう感じを受けた。出品数だけでも、或る意味において



小笠原誠次

〇初出品です。

〇新しい「場」で、自分を見つけたかつた。〇「何でもかかると」ことは、それだけに出品者の絶対的責任が痛感されました。〇よい仕事が出来て、めでたかったです。〇主催者の熱意に感謝し、こんごの研さんのかたとしたい。おおかたのご理解によつて、こ



市村 司

私の作品も並ぶ会場を眺めてみて一番強く

感じたことは、出品作が二つの種類に大別されるといふことである。はげしい言葉使いの、いわゆる陽性の作品と、無言に近いようなかたくな作品とである。これを雄弁は銀、沈黙は金という格言にもとずいてあつさり切つてしまえば、現代絵画の一つの表現方法として、黙殺する誤りを犯すことになると思うが、私としては表現のこのような両極をみつめたうえで、いろいろな反省や感想やらを抱いた。それは作品がほんとうに人に語りかけるためには、すなわち立派な言葉をもつためにはどのようにな表現の体制がもつともふさわしいかということと作家の一人一人が考えてみなければいけないということである。

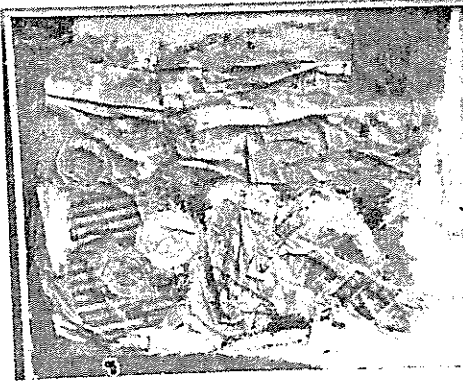
単に元気があつたということでもいけないし、「沈黙は金」といふような格言に右へならえをやることも無意味である。個性的でかつ自然な表現方法を探究しなければならぬと思つている。(画家・京都市在住)



バーンステイン

出品されてる絵の大多数は今やりの

私には絵の多くが心理学的治療法の一種の形式的な解放以外の何ものでもないかのように感じられる。この種の絵は作者自身にとつては欠くべからざるものなのだろうが、見識ある観客にとつては何らの関心を抱かせるに足らないものだ。治療法が芸術でないのは、腹を立てた子供がピアノをガンガン鳴らして出す騒音が音楽でないのと同じことだ。又ある絵は自然の新しい姿に心を奪われていることを示している。電子顕微鏡や大望遠鏡など科学機械によつて新しい色々の世界が私達の前に開けて来た。私の考えでは、自然のこれらの新しい姿は正当な出発点ではあるけれどもそれだけに終るものではない。(五頁下段へ)



四年あまり前のこと、京都市がアンデパンダン展の世話をすることの可否について、意見を求められた。最初は若干のためらいを禁じ得なかつたけれども、結局は賛成した。お役所とアンデパンダンの結びつきはいくらか奇異にひびいたのであるが、しかしそのうちに、何もかまうことはない、大いにやってみよう、という気になったのだ。

かく新風が吹いて来ても、その本質がつかまるより前に権威化し、せつかく激烈たる運動を開始しても、まもなく動脈が硬化してしまふ。発端においては颯爽としていたはずの在野の美術団体までが、二十年三十年のしにせを誇るうちに官展化してしまつてゐる。うちに官展化してしまつてゐる。うちに官展化してしまつてゐる。うちに官展化してしまつてゐる。

延びあがろうとする若い魂が一度はそこをくぐらねばならぬとすれば、一体どういふことになるだろうか。よほど不逞な反逆精神ならば拒絶され、かえつて燃えさかりもしようが、根が淡白な大和魂であつてみれば、息切れがして敵の軍門に降るか、猛獣使いに色目をつかつて飼ひならされるのがおちであらう。そうした危険が比較的に少なく燃えらるるだけ燃えることのできる場所が設置できれば、良いことであるにちがいない。もとよりみずから手その場所を築くことが理想ではあ

るが、個展やグループ展ならばともかく、少し規模の大きな展覧会となると、実際には不可能に近い。それを京都市が世話しようというなら、やつてもらへばよい。そこでは飼ひならされる心配がないのだから、作家諸君は餌だけ食つて大きくなればよいのである。

京都市は古い日本の象徴のよう一面をもつけれども、他面では、文化都市の面子にかけても、純粋な文化創造に意を用いようとする良心も持ちあわせている。友禪染の流れる川のほとりに最初の市電を走らせたように、豆日展のような京展と並んで、アンデパンダンを計画した。とかく文部省とかお役所とかが勧進元となると、さしたる見識も教養もないくせに、権威をもつて号令したがる。シャボン玉に泥水をつめようとして、ブルトナーを動かして花壇の整理を試みたりしがちである。それでいて特定権威に盲従したがるものだ。しかし京都市の場合、その懸念は少ないし、また少なくあつてもよい。今後とも心ある人々の見守りが必要かも知れない。

京都アンデパンダン展 四年の歩み

井島 勉

もの考へ方にもすぐ音がはえるが、芸術上の動きにまで音がでるか、せつ

うな作品が減つて、地域的にも流派的にも多様性を増してきた。主張を一にする同人展ではないのだから、出品者にとつても観賞者にとつても、変化に富むほど有意義となる。最初はただ荒々しい怒号を發していただけの人たちも、制作に密度を加えてきたし、単なる材料の実験にとどまつていた人々も、これを生命化し始めてきた。

(二頁から) 故ならそれらは非人間的なものだからだ。従つて人間の芸術的な哲学に役立つよう手を加え調節しなければならぬ。

- | | | | |
|-----------------------|---------------------|--------------|--------------------|
| 山下啓介 | 京都市北区紫野西野町7 | 田中時子 | 京都市東山区門山町 |
| 早川昭一 | 京都市中京区二条通室町東入ル | 小野鈴子 | 京都市右京区松ヶ崎堂の上町 |
| 高島朝生 | 京都市東山区今熊野南日吉町 | 小牧源太郎 | 京都市北区小山下板倉町32 |
| 松宮良平 | 福井県小浜市駅前通25の818 | 山本敏子 | 京都市東山区東大路古門前 |
| 河野藤茂 | 京都市左京区新東洞院通り仁王門上ル | 木本美智子 | 京都市北区紫野蓮台町23 |
| 内藤又福 | 京都府相楽郡加茂町字口畑 | 本庄富佐子 | 京都市下京区堀川通木津屋橋上ル |
| 川口福男 | 京都市東山区山科御陵西鳥向町21 | 小泉玲子 | 京都市右京区椋原宇治井町3 |
| 中塚和夫 | 京都市東山区下馬町渋谷通東入ル | 雨森良三 | 京都市北区紫竹下緑町17 |
| 中田武一 | 京都市下京区木津屋橋サメガイ西入 | 広畑美代子 | 京都市北区紫野上門前町 |
| 市村秀夫 | 京都市下京区下魚棚通大宮東入ル | MURRAY JONES | 京都市上京区上御霊前馬場町362 |
| 大橋本吉 | 京都市下京区下魚棚通大宮東入ル | 荒木絢子 | 京都市伏見区桃山筒井伊賀西町31 |
| 山口敬次 | 京都市南半田東町13 | 広重明 | 京都市東山区泉涌寺山門町25~17 |
| 山誠益 | 京都市左京区鹿ヶ谷御所之段町3 | 福沢忠夫 | 京都市中京区壬生高樋町65 |
| 河村恵子 | 京都市伏見区深草西一の坪町36 | 渡田純二 | 京都市左京区吉田下河達町10 |
| 熊谷直久 | 京都市左京区鹿ヶ谷御所之段町3 | 木村幹子 | 伊丹市山田7 |
| 瓜生昌夫 | 京都市東山区今熊野南日吉町23 | 小倉浩二 | 京都市東山区本町15丁目北門町 |
| 後藤名明 | 京都市東山区今熊野南日吉町16 | 新富英典 | 京都市左京区浄土寺西田町77 |
| 古川節男 | 京都市南区九条高島町23 | 東儀一 | 宇治市小倉町寺内77 |
| 不働村耕夫 | 京都市左京区下鴨中川原町29 | 津三男 | 京都市左京区吉田泉殿町59 |
| 野井章夫 | 京都市北区小山西大野町42 | 今川泰三 | 京都市上京区寺の内通千本東入 |
| 野島佳浩 | 京都市左京区下鴨下川原町47 | 吉田安 | 京都市左京区聖徳院蓮華蔵町43 |
| LAWRENCE A. BERNSTEIN | 京都市東山区今熊野南日吉町23 | 大垣禎平 | 京都市中京区夷川堀川東入 |
| 池田市太郎 | 京都市左京区高野泉町40の5 | 江原平 | 京都市東山区山科西野岸の下町37 |
| 池谷勇 | 京都市上京区新町下長者町上ル | 松岡弘子 | 京都市左京区川端通二条下ル |
| 田中守光 | 京都市下京区五条大宮西入 | 南沢弘介 | 京都市左京区川端通二条下ル |
| 和田益美 | 京都市東山区今熊野日吉町22 | 吉田和正 | 京都市左京区吉田本町5 |
| 河村一夫 | 京都市東山区東山通三条下ル | 西川正彦 | 京都市下京区中堂寺庄ノ内町41山崎方 |
| 園角太郎 | 京都市東山区山科日の岡堤谷町24 | 榎本淳二 | 加古川市西本町2丁目 |
| 八木千枝 | 京都市上京区新町通鞍馬口下ル南側 | 西村嘉夫 | 京都市上京区下立売相合園子上ル |
| 尾崎道信 | 宇治市五ヶ庄西浦22 | 古川陽子 | 京都市北区小山上花の木町44 |
| 富谷道彦 | 京都市伏見区丹波橋筒井西町13浜崎方 | 岸正豊 | 西宮市苦楽園三番町62 |
| 藤本忠彦 | 京都市上京区堀川通上立売上ル芝垣方 | 和氣史郎 | 大阪府三島郡本町広セ |
| 辻波利 | 京都市東山区今熊野本瓦町660 青山荘 | 森康屯 | 西宮市大井手町15 |
| 榊家利 | 京都市中京区姉小路通高倉東入 | 高木清雄 | 大阪府三島郡島本町桜井668 |
| 多田越一 | 京都市中京区神泉苑通姉小路上ル | 森本岩良 | 京都市伏見区深草ススハキ町28 |
| 小倉一夫 | 京都市右京区嵯峨河原町25の3 | 野崎一良 | 京都市伏見区桃山毛利長門西町 |
| 小武内栄 | 京都市中京区聚楽廻西町中部186 | 井上平八 | 京都市伏見区深草開土町89 |
| 中川栄 | 京都市北区平野宮敷町36 | 宮永理吉 | 京都市東山区東大路五条下ル |
| 水田ひろぞう | 京都市東山区渋谷通常盤町472 | 叶モリ | 京都市左京区吉田泉殿町 |
| | 京都市上京区今出川寺町東入ル上ル | 津カカシ | 宇治市広野町三丁目 |
| | 京都市東山区今出川寺町東入ル上ル | 本郷隆造 | 大津市膳所行啓町 |
| | 京都市東山区今出川寺町東入ル上ル | 松山芳樹 | 大阪市旭区今市町1の129 |
| | 京都市東山区今出川寺町東入ル上ル | | 大阪市東住吉区田辺西の町 |

かくて四年たつた。よほど育つてきたような気がする。落選の心配がないから持ちこんだというよ

現代においては芸術は病気を癒やす機能をもっている。私は、画家の魂の奥深いところにある世界、自我の遙か彼方の世界、秩序、愛、喜びがあたかも一つの花園の子供達のように生きてゐる世界をあげて見せるのが芸術の第一の目的であると、本心に信じている。それには画家の側の厳しい訓練が要求される。私達の幾人が過去の横暴と同じく現代の横暴をも振り捨てて勇気をもっているだろうか。

展覧会案内

美術館	4月	梅原竜三郎展 京都劇場美術展 新制作日本画展 京都陶芸家クラブ新作陶芸展	24日まで 12日-17日 16日-21日 16日-20日
	5月	第十二回京展	3日-15日
	4月	京都府キヤラリ	3日-15日
	4月	美工窓園陶芸展 上原卓個展 田中吉之介染織アイデア展	20日-24日 25日-29日 30日-5月2日
	5月	朴土社日本画展	6日-10日
	4月	べんてる画廊	6日-10日
	4月	西大路文化学園児童画作品展 トキワ・アトリエ展 カレィ会小品展	12日-17日 19日-24日 26日-1日
	5月	御苑子供美術教室展	3日-8日

マロニエ画廊	4月	美大ADQPPXF会展	14日-17日
	4月	岩井昭・山本正道小品展	22日-25日
	5月	丘道会展	29日-5月3日
	5月	三輪晃久・志村比呂志・西阪晃一 三人展	5日-9日
	4月	大丸画廊	5日-9日
	4月	春のお茶道具展 春苑会日本画展 双春会日本画展	12日-17日 19日-24日 26日-5月1日
	5月	緑洋会展(油絵)	3日-8日
	4月	丸物画廊	3日-8日
	4月	第四回谷本教室ローケツ染作品展	9日-14日
	4月	芹沢織物研究所新作展	16日-21日
	4月	第四回創風会展(日本画)	30日-5月5日
	4月	京都国立博物館	20日まで
	4月	中国書画特別陳列 (月曜休館) (上野理一氏の収集になる中国絵画、書跡および法帖四十七点を展観)	20日まで

奈良国立博物館	4月	春季特別展「天平地宝展」	5月10日まで
	4月	大阪市立美術館	29日まで
	4月	第十回関西展	29日まで
	4月	大阪阪急美術部特陳室	29日まで
	4月	住谷登根東洋画展 福田新生遊欧油絵展	12日-17日 19日-24日
	4月	フジカワ画廊	12日-17日
	4月	彫刻十人展(清水多嘉示、本郷新 ほか)	5日-15日
	4月	伊藤研之個展	18日-23日
	4月	大阪大丸画廊	26日-5月1日
	4月	清水六兵衛新作陶芸展	26日-5月1日
	4月	藤田美術館	19日まで
	4月	中国古美術名品展 茶馬師と古美術展	22日-5月31日
	4月	市立神戸美術館	24日まで
	4月	南蛮美術展	24日まで

第12回京展 作品募集要項

主催 京都市
会場 京都市美術館(左京区岡崎公園)

会期 昭和35年5月3日から5月15日まで

募集作品

- 1部 日本画 10号以上のものに限り、外別に制限はない。
- 2部 洋画 同上
- 3部 彫塑 特に大きいもの外別に制限はない。
- 4部 工芸 堅二・四米、横一・五米以内とし、格張りしたものに限る。軸物、帳、巻物の類は受付けない。
- 5部 書 同上

(各都共一人 三点以内)
出品料 一点 五百円、三点まで 千円

搬入 各部共左記期間に美術館へ。
4月25日(月) 26日(火) 午前10時から午後4時まで。

搬出 入・落選共5月16日・17日

授賞 市長賞 其他新聞社賞等
入選発表 5月1日午後3時当館玄関に掲示すると共に文書でも通知します。

審査員(略)

申込用紙は搬入の際受付でお書き下さい。但し予め御入用の方は当館事務所又は絵画材料店にて御請求下さい。

京都市 美術館二ユース No.30

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和35年5月31日発行

常設展特集

七月開設の予定



村上華岳 当館蔵 <聖者の死>

戦前、美術館では常設展列を開いておりました。さて規模の大きな展覧でもなかつたのですが、読者の中にはこれについて、今なを、静かな好い印象を抱いておられる方が多数あることと思ひます。近く当館では再びこの陳列を常置することとなりました。長く年月も経過し、その間時世も激しく変りましたので、陳列再開にあたり簡単にこの施設について紹介しておきたいと思ひます。

当館には凡そ三〇〇点の美術品を収蔵しています。これら収蔵品は勿論一般の鑑賞に公開されるべき性質のものですが、先ずこれを中核にして陳列して行き

たいと思つていきます。これらの作品は昭和九年の開館以来年々努力して集めてきたもので、戦後は長く中絶していましたが、最近三年は再び蒐集を始めています。ただ館としては蒐集に当り、何か特異な意見、一定の主張を持つてゐるものはありません。年々増目する現代美術品の中から代表的な優秀な作品を集めて来たのです。

館では、年間殆んど休みなく、色々の展覧会が開かれてゐることは大方御承知の通りです。これらの会は何れもその主催者(団体・個人)の個性的な意志、明確な主張のもとに開かれてゐます。

そこにこそ、これら諸展覧会の性格と魅力があるでしょうが、常設展はこれらの会とは少しく趣を異にしてゐます。陳列すべき館の収蔵品が、第一、明確な一つの意志と主張を現わす構成には成つていないのです。勿論収蔵品のみでは不足ですが、諸方面の御好意によつて名品を借用して陳列しますが、これら名品ととも、展覧構成の要素としては、何か特異な主張の表現として用ゐるものはありません。謂はば常設展は館が何か一つの意見一つの主張を抱き、これを表白しようとする機関ではないのです。

それでは展覧の性格が余りに曖昧模糊としてゐるとの批判があるかも知れません。しかし、その模糊たる中から一つのきれいな、かなり明瞭な、映像が浮び上つて来るのではないのでしょうか。この展覧は今世紀の美術品から成るものですが、明治・大正・昭和にかけ

常設展への予言

当館学芸主幹 加藤 一雄

の激しい時の流れ、哀歎の交錯した時世に思ふ。そこにかなり鮮かに浮彫りされるように思ふ。われわれとても平素時の流れについては微かな感情は持つてゐます。が、それは、漠然とした心象にすぎません。しかし、そこは流石に芸術家です。芸術と云ふものはこの仄暗い心象に明確な決定的な美しい実在を与えてくれます。老人はこの展覧を見て、恐らく、自らの過去を振り返り無限の感慨を抱かれるでしょう。若い人は父母の時代を今はずきりと眼の前に見て、これ亦、恐らく複雑な感情を禁じ得ないでしょう。そして、両者共に、この過去が現代の一点に激しく凝収してゐる状を見ては、驚異と共に、考へ学ぶところも亦少くないことと思ひます。

常設展には、主として、京都の美術を陳べたいと思つてゐます。この京都——山紫水明の自然に抱かれ、一千年の文化を荷う古都は、現世紀を生き抜くために、激しく、しかし、美しく苦んでゐます。このきれいな劇的な京都のドラマが、この展覧に於て、はつきり見られることと思ひます。当市々民に対してはもとより、観光の人々にとつても、この優美な苦悶する京都の姿は痛切に鮮かに想えるところがあるに違ひありません。

しかし、何よりも、常設展と云ふ一つの場所にはゆとりのある静かな場にしたいたいものです。現代において最も求められてゐるもの、ある意味で peace の極限は静謐です。都会の喧騒と焦燥をのがれ、静謐と内省の場は最も強く、広く、求められてゐます。しかも、これ程手に入れ難いものはないのです。常設展は、規模は小さからざるを得ませんが、せめて静かな場と時間とを提供したいと思ひます。それでこそ一般の希求に答へる、ある意味で、apex の施設と云えるのではないのでしょうか。

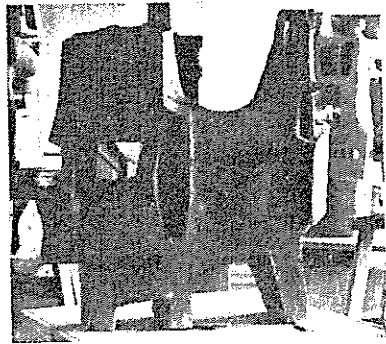
かつまた、云うまでもありませんが、芸術と云ふものは、痛切な呼かけ、強い力を持つものです。そして、この力と呼かけとは静かな形式の裡に在つてこそ始めて十全の生命を生き切るものなのです。

最近の収藏品

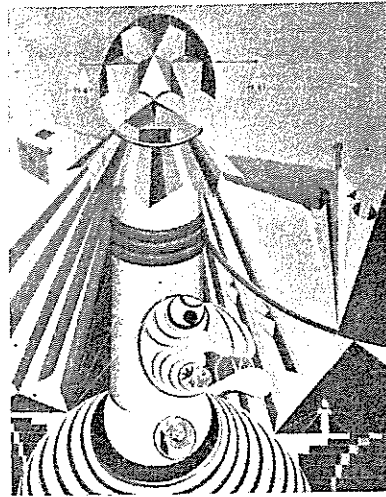
収蔵年度	作者名	作品名	制作年	種別	備考
昭31	安井 曾太郎	白画 像	明39	洋画	寄贈
"	"	田口 風景	明38	"	"
32	田中 佐一郎	黄土 B	昭12	"	"
"	三宅 鳳白	花送り 且火	昭5	日本画	"
"	三内 柄一	雨送 雨	大5	"	"
"	竹内 竹	冬花 日	明44	"	購入
"	小野 中池	冬花 青	昭3	"	"
"	田中 池	花青 年	昭31	洋画	"
"	"	ギリシヤ の	昭23	彫	寄贈
"	"	"	昭13	"	"
"	堂本 印	無清 水	昭32	日本画	購入
"	宇山 荻	桜権 寺	昭32	"	"
"	西山 翠	権 島	昭30	"	"
"	西谷 賢	由布 花	大12	"	"
"	伊北	探索 嶽	昭30	洋画	"
"	"	眠れぬ夜のため	昭13	"	"
"	"	"	昭12	"	"
"	三輪 平	坐静 像	昭33	日本画	"
"	福井 弘	狗盛 器	"	洋画	"
"	上田 金	盛漁 辞	"	彫工	"
"	久岡 静	父 (草稿)	"	書	"
34	中池 大	髪華 髮	昭8	日本画	寄贈
"	池下 村	池畔 (草稿)	昭2	"	購入
"	大野 秀	コラージュNo.21 (コンポジション)	昭32	"	"
"	伊藤 久	作道 品	昭34	"	"
"	小竹 中	神話 57	昭32	洋画	"
"	桑佐 田	神話 57	昭26	"	"
"	"	鳥作 品	昭28	"	"
"	"	品 57 (柳)	昭34	工芸	"
"	"	品 51	昭35	彫	"
"	"	品 52	昭33	"	"
"	"	品 53	昭34	"	"



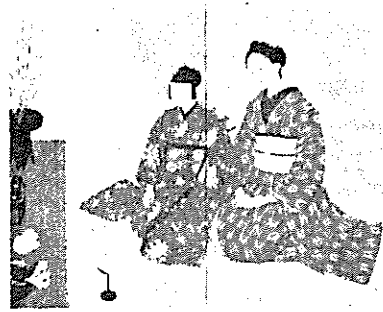
下村良之介 **池畔**



辻 晋堂 **馬と人**

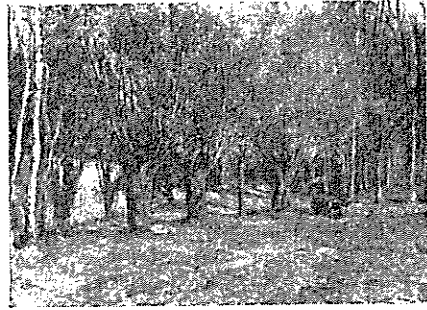


小牧源太郎 **道祖神図**



北沢映月

娘



浅井 忠 **ハタレの柳**

当館の所蔵品について

京都市美術館には日本画、洋画、彫塑、工芸の各部門を合わせて二八六品の収藏品がある。昭和八年の当館開設以来、購入あるいは寄贈によつて館の所蔵品となつたものである。

昭和八年の「大札記念京都美術館報」によると、館の経営方針の第一項には「本館規則第二条により新美術品及び美術工芸品の常設陳列をなす」と記されており、貸館や特別展覧会のほかに常設陳列を行うことは開館当初からの目的であつた。事実戦前には常設展が開催されてきた。

したがつて館の美術品の収集も常設展での展示資料であることを念頭に行われてきたことは論をまたない。

もつとも収集は十分ということ

これよりさき、昭和三年、大札記念事業として当美術館を建設するため市内の美学家、美術家によつて大札奉祝会が発足したが、美学家から同会によせられた美術品のなかから榎原紫條「獅子」福田平八郎「菊」安本一洋「候春」中村大三郎「ピアノ」石崎光雄「春律」清水六兵衛「大札臨仙果文花版」が美術館に寄贈されている。

作品の寄贈、購入に当つては評議員会が審議に當ることになつていたが、開館当初の評議員は市会議長石田吉左衛門、実業家飯田新七、日本画家西山翠峰、富田淡仙、竹内柄鳳、菊池契月、洋画家

鹿子木益郎、工芸家清水六兵衛、学識経験者植田寿蔵の各氏であつた。

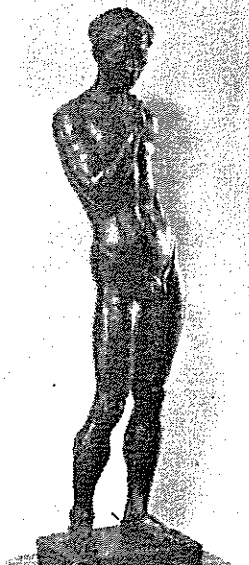
購入美術品は、当館に陳列された作品から選ばれることになつたので、前記の大札記念京都美術館美術展以降、昭和九年の第二十一回院展、第十五回帝展、昭和十年の第一回京都市美術展覧会(市展)……と続く諸展覧会の中から購入品が決められていった。要するに帝展、文展といった官展と京都市主催の市展以外の展覧会からの購入はごく少数にとどまつたということである。しかし、当時各部門とも京都市作家は多くが官展系に所属していたので地元の家々の作品はほほもつたことができた。

購入に關して一つの特徴的な事例は昭和十五年第五回市展が開か

れたときのことである。たまたま市展と会期をほぼ同じくして毎日新聞社が現、日本画展を開催したため、在洛藝友会によつてその方に出品、市展への出品は閑散とする見通しになつたため、美術館は東京在住洋画家を招待するとよによつて穴をうめた。そしてその洋画の中から南雲進、小糸源太郎、木下孝則らの作品が購入されている。

例年、購入に當つては委員が会合して、予算をまず各部門別におけたのち、会場を回つて作品を選定したという。作品は場中の秀作には相異なかつたが、奨励の意味がふくまれており、必ずしもその作家の最高作というわけではなかつた。

購入品と並んで所蔵品中かなりの比重を占めるのは寄贈品であ



菊池 一雄 **青年**

評議員会の中合わせもあつて、京都在住の大家は作品を寄贈するならわしがあつたし、死去の場合、草稿を寄贈することも戦前まで行われてきた。これらの寄贈品は所蔵品の内容を高める役割を果し、館蔵品の中核をなす作品が多い。しかし所蔵品全体として見た場合も、戦前までの美術資料としてかなりのまとまりをもつていないことは事実である。

このようにして続けられてきた美術品の収集は昭和二十三年以後は全くとだえていたが、昭和三十二年から予算を得て再開された。評議員会とは別に美術品購入審査委員の制度が設けられた。

購入の方針は、京都關係の作家を中心とし、いままでの所蔵品の足りざるを補足すること、その作家の代表作であつて、個性が明瞭にでているもの、また美術研究上の資料として適切なもの(たとえば画稿のような)などの諸点、かかれてはいる。なお同年以降、寄贈品は若干の点に達している。



神原紫峰<雲中竹小禽>

健康な氏は歩き乍ら話をしよう
と云われる。従つて、以下の氏の
言葉は、鴨の河原・河原町通を歩
き、喫茶店でコーヒを飲み乍ら断
片的に語られたのを録合せたもの
である。継ぎ目のモルタルは筆者
恣意の手仕事である。幸にして氏
の真意をデフォルムしてなければ
幸甚である。尚その上、話中には
歴々自動車の警笛・行人の足音・
点滅するネオンライトの光までが
は入つてくる——しかし、これら
はお読みになる方の御想像に任せ
る外に途がない。

云えるのです。決してムード一つ
で漠然と出来るものでない、むしろ
深い男性的な
仕事です」
「こんな眼で
この頭脳創作
協会の人々を改
めて振返つて見
てゐるのだがね。
勿論京作一見る
眼と東京の眼と
は多少違つてし
よう。けれども
何れにせよ、あ

クリティク

(4)
国立近代美術館
事業課長
河北倫明氏

河北倫明氏が京都に来られたので会
うと思つたが、氏も仲々忙しい。漸く下
鴨の光影堂で用務中の氏をつかまえ、暫
く話をする機会を獲た。

つて更に一步決めて行くのが観念
——一種の精神性でないでしょう
か。精神家揃いの国画創作協会の
中でも華岳はその点一際深いこと
は周知の通りです。ところが不
義なことには華岳には精神家通有の
イヤ味もないぢやありませんか。
僕の思うには彼の精神のすぐ更に
美しい直観像が支えてると思うの
です。僕は華岳が精神や観念に
悩んだと云うより、むしろ、直観
像の豊饒と多形に悩んだものと見
たいのです。彼こそほんとうの
仏教徒でしょうか——ガンス河
畔のジャングルの中から涅槃と悪
夢を織り出したきた原始仏教の児と
しての——彼の晩年の絵に乱れ
と驚の出で来る所、あのへんも好
いですね。王蒙よりは近代的だ。
せつないと云うより遙かに深い切
迫感があります」
「入江波光さん、生前の氏を僕
はよく識らないですが、作品を見
ると大変好いぢやありませんか。
美しさの底に一抹にがいながい所
がある。氏こそほんとの京都人だ
でしょう。僕ら東京市民には解らな
い古い歴史の錬成がある。現代の
画家はほとんどが東京風の中産階
級です。だから、芸術はあつても
生活がない、この輪切りになつて
いる抽象の世界で充分だと思つて
るのです。芸術には生活上のリア
リティが要らんと云う考えです。
ところが波光氏にはこのリアリテ
イが濃厚に見えますね。質素で奥
深い京都市民の生活的な知慧——
氏は古画に深い造詣があつたそう
ですが、氏を古画に引寄せたもの
は、恐らく、抽象的な造型上の問

「絵と云うもの、それは色々解
釈できるでしょうが、僕は絵と云
うものは本質的に画くこと、測す
ことだと思つて居るのです。混
沌とした自然から人間秩序を測し
出して来ること、それ自体は意
味のない現実から決定的な意味の
世界を画き出して来ることでしょ
う。だからこそ絵は drawing と

の人たちの鮮明な個性はよく解り
ます。ええ、華岳の価値は東京で
も決定的です。当り前でしょう、
九百万人口の砂漠の中にあの静か
な柔かさを置けば強烈い印象をあ
たえずにおきません。大体日本
人は人間秩序を測するとなると、
とかく適当なところで裝飾になる
ものですね。この安易な裝飾を救

です——綺麗な純粋な彼の直観
像、これは初期の『騎馬と夏草』
『二月の頃』以来つと華岳の一
生を支えています。この世のもの
とも思えぬあの仏面群を裏打する
ものは実はこの直観像です。こ
れこそほんとの思想であり、真
の意味の日本画の裝飾観はこの思
想にシカに柔らかに立つているも

体の必要を感じ」二十三年一月九
日東山建仁寺方丈において開会式
を行った。

もうその時分からすでに参考品と
して古美術品をも陳列していた。
京都博物館が出来る約十年前のこ
とである。

見	聞
紀	談

-12-

岡部三郎

新古美術品展覧会

明治三〇年代の京都
の美術展覧会 (一)

後

美術協会のほかにもう一つ
明治三〇年代の京都の大
展覧会に京都美術協会の主催した
新古美術品展覧会がある。

京都派と云うと明治以後の京都
の隆興期の日本画家、とくに竹内
栖鳳によつて代表される同時代の
画家群を広く指しているようだ。
その栖鳳が登場して来る舞台が明
治三〇年代の画壇で、栖鳳にとつ
ても、京都派と呼ばれる一流派が
誕生するのにも重要な役割を果し
ているのである。

新古美術品展覧会には後素協会が
出来る数カ月前に創設されたもの
で、日清戦争後の明治三〇年代、
つまり第四回内閣勸業博覧会の京

都開催が大成功をおさめたこと
が京都の画壇の近代化を早めた
結果、とかく立ちおくれがちで
あつた京都の展覧会活動は急に
活潑となり、京都に近代絵画隆
興の時期を測する三〇年代の一
番に大きな展覧会であつた。

第一回展覧会を開いたのが明
治二十八年で、十月十五日から
十一月十五日まで三十二日間。
同時の第四回内閣勸業博覧会の
旧会場を使つて居る。展覧会の規
模や形式は大体今日の日展や京展
とよく似た綜合展で、絵画及び
書、彫刻、工芸品が出品された。

たから種々な日本画展である後素
協会の展覧会とちがつて、出品作
品のレパトリーも広く、出品者も
年輪世代をとわず広く全京都の作
家層を網羅したし、ことに参考室
を設けて社寺や個人の装蔵になる
古美術品を集めて陳列したから、
栖鳳、芳文、春華らの新進画家が
推進力となつた後素協会展に比べ
ると綜合展にありがちな保守的な
面も多分にあつた。しかし、この
展覧会の起りは後素協会と同じく
明治の新しい時流の反映に外なら
なかつた。後素協会が出来た時も
幸野楳嶺・久保田米庵らの美術行
政上の新時代感覚が多分に啓蒙的
な役割を果しておるうちに、この
新古美術品展覧会も楳嶺らの新し



い美術行政上の業績が彼の死後に
発展して出来たものである。楳嶺
は日本画には如雲社の如き立派な
母体をもつていたのに対して工芸
界には何らの組織をもたないの
理由に東京の日本美術協会になら
つて京都美術協会設立の提議をし
た。明治二十二年の末、十二月で

本会の主旨は「美術工芸の進歩
全部殖産の拡張を期す」もので、
事業としては毎年展覧会を開き、
雑誌「京都美術協会雑誌及び京都
美術」を刊行した。一説によると
と、森寛斎が経営に當つていた如
雲社では楳嶺の意見が通らなかつ
たから活動家の楳嶺はこの協会の
創設を思いついたといわれてい
る。恐らく事業の経営には彼の自
説が反映したことは十分に推察出
来る。

第

二回には第一回同様鑑査
はなかつたが審査が行わ

あつた。楳嶺・米庵の外に飯田新
七・西村総左衛門外十数名が木屋
町の月下亭に会し同会設立の案を
議したと伝えられている。しかし
同会創立十年記念式の記事による
と、明治二十二年十二月第三回
勸業博覧会出品について京都の美
術家実業家が度々会合した時「個
々の運動の不利をさとり茲に同

新古美術品展覧会をはじめ種
種を主要な目的として出発した。
毎年春秋冬に各一日陳列会を開
き、夏季には博覧協会に合同して
長期の陳列会を開いた。春秋冬と
云うのは陳列会を三分し、第一部
陳列会を畫画、彫刻、漆器、木器
の四種とし、第二部陳列会を金
屬、七宝、陶磁器の三種とし、第
三部陳列会を織物、刺繍、染物、
糸組物の四種とし、夏季の京都博
覧会を避けて夫々春秋冬の日を
陳列会のためにさいしたのである。

それから五年後に新古美術品展
覧会が出来たのであつて、これら
の第一部、第二部、第三部を綜合
して前述のように明治二十三年秋
臨時大陳列会を開いたのが第一回
展である。出品は新作二八〇四
点、古美術品六八〇点、計三四八
一点。戦前の市展、戦後の京展に
比して遜色はない。経費も京都市
が三分の一を後に半分を補助し
た。第二回展以後は会期を四月一
日から五月三十日まで六十日間と
した。

(文責在加藤)

美術館ちかごろ

日本の超現実主義絵画を開拓した前衛画家北脇昇の遺作を当館に寄贈する旨夫人のかね氏から申出があった。

北脇昇は昭和二十六年十二月十八日京都で死去したが才質豊か

京都・パリ陶芸交換展

計六十余点が出陳されることになり、京都陶芸界の大勢がフランスに紹介されることになろう。

セーブル製陶所は一七三八年の創立で歴史もふく、歐洲における最大

製陶所の一である。先年のフランス美術展にも散見されたように硬質磁器を心に優麗な器物を産している。また彫像陶器も有名でかつてロダンもここで働いたことがあり、日本人としては沼田一雅もこの地の陶像を学んで輸入した。

- 出品を依頼した作家は次の通り。
- 改見隆三、石黒宗麿、伊東陶山、宇野三吾、永楽善五郎、叶光夫、河合卯之助、河井寛次郎、清水洋、清水六兵衛、楠部弥次、藤悠三、鈴木清、滝一夫、富本憲吉、沼田力三郎、三浦竹軒、森野嘉光、八木一夫、森吉左衛門、鈴木治



改見隆三の「雨」

北脇・梅原氏の作品寄贈

昭和十四年美術文化協会の設立とともに会員になり、前衛絵画運動の中できわめて特色ある画風をきりひらいていつた。遺作は長らく夫人の手許で保存されてきたが、今回国立近代美術館と当館に寄贈されることになったもの。当館に寄せられる作品は下記の五点である。(い

- 「朱と紫」 十三年
- 「周易理解図」 十六年
- 「変生像、親相学シリーズ」 十二年
- 「流行現象構造」 昭和十四年
- 「一章表」

美術家の経歴調査進む

今春以来、当館では美術家の協力を求めて、作家の経歴調査を行っている。京芸家三百五十人に調査票を送ったが、六月末現在二百十人の回答があった。作家組織的にあまり行われておらず、とくに中堅以下の作家については資料がほとんどなかった。こんどの調査票は美術館運営の参考にする眼目である。

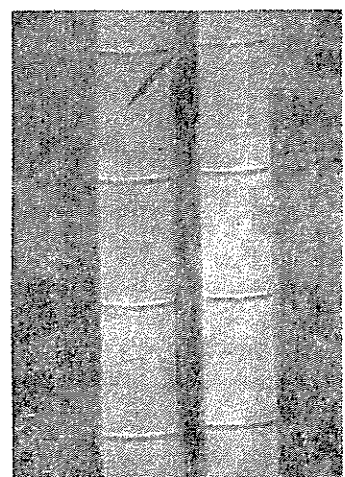
項目は出生地、美術家を志した動機や環境、経歴の概要、著書著述、初入選、受賞、自選の代表作十一点などにわたつて

作家によつては自己の経歴を逐一記入して保存している人もあるが、一般にはそうはいかないので、経歴の長い作家では昔の記録や記憶を引き出すのに相当の努力を払つてもらう場合もあるようだ。記入ぶりも作品の個性同様さまざまだ。たとえば「美術家を志した動機」については「家業なれば致し方なし」などごく簡略なものもあるが、全般に細密に記入されてお

氏の邸宅何有群は、筆者の心も知らぬげに、折柄の青葉に埋れてひっそりと静まり返つていた。通された広い応接間で浩堂氏は老練嬰孺と事務を処理しておられた、背後の床には福田平八郎さんの「杜若」が掛つている。

「わたくしどもは別に申上げる程の事も持つておりませぬ。それよりも一層貴方からお尋ね下さらんか、お尋ねに対しハイとかイイエとか位はお答もできます」と、氏は謙虚に口を切られた。さあ弱つた、今にして思えば、つい目の前には福田画伯のことも話題にのせれば好かつたのだが、そこは筆者痼疾のボンヤリである、つい「何有群とは何んですか」などと愚問を發して了つた。果して氏は微笑をもちられた。

しかし話自体は氏は静かに始められた(因に云えば、氏の唇辺から微笑の消えることは決してない、そして語調は常に静謐である。ただ知慧に充ちた眼から時々深い英機が閃きでる)。「ハイその事は誰方もお尋ねになります、わたくしの事でございませぬから別に深い哲理のある訳でもありません。いづか深草の元政上人の書かれました薩摩何有群に遊ぶの記を読みまして、そこから借用したものでございませぬ。わたくし別して趣味や贅沢を考えておる訳ではありませぬ。七、八年前神経痛を患ひ、まして別府に参りました。土地を變



福田平八郎の「雨」

一度土地や空気を變えてみようと決心しました。直ちに、此処へ引移つて参りました。ハ

停滯し淀みまするとそれは身の破滅となりませぬ。これは誰方とも同じ事でございませうが、将来の路を揆ぶ明、その路を行きまする勇、その路を測る智、この明勇智の三者はわたくしどもには殊に大事であります。この大事が空気の淀みによりまして即坐に曇りますので、わたくし絶えず空気の転換頭脳の更新を考えております。これも一に事業大事ゆゑでございませうか」

「わたくし絵は好きでございませぬ。大正の初め頃から年々展覽會は観ております。平素物質に繁

付られておる頭脳が絵を觀まするとスツキリ転換致します、これ程有難たいことはございませぬ。尤も、わたくしどもも美術界の一隅に生きておる者でございませぬ。現代はわたくしの世界でございませぬ。従つて現代画を愛しております。現代人は現代を生かす責任があると存じております。かく申せば余りに物質的とも聞えませうか——しかし、この現代を生かすには矢張り仲々物質が大事と存じます。画家の方で申せば墨と絵具にも当りませうか、大観先生が千金の墨をお用いになつたと聞いてわたくし頭が下がりますが、良い墨、良い絵具を用いて腐化褪色に耐えますことはこれこそ真に現代を生かす途ではございませぬ。高い貴い精神の価値もこの確りした物質の礎石の上に成立つものと存じております。栖風先生あの喚びたる線、福田画伯の京菓子のようになつたらした色、皆様方のこの立派な精神価値も良い墨、良い絵具を以て始めて發揮されるものと思ひます」

「好きなものは絵だけではございませぬ。ご批判もありませうが、わたくし物質に対し一心不乱

クリティク

(5)

京都市美術館
美術品購入審査委員
大宮浩堂氏

大宮浩堂さんとは筆者年も通うし、社会的statusも全く違ふ。氏にインテリブユすることは、先方に対して迷惑であり、筆者にとつても苦手なのであるが、館務洵にやむを得ない。梅雨前の曇り空の下を南禅寺畔金地院の塀に沿うて躊躇しつつ歩いて行つた。

これは一度土地や空気を變えてみようと決心しました。直ちに、此処へ引移つて参りました。ハ

停滯し淀みまするとそれは身の破滅となりませぬ。これは誰方とも同じ事でございませうが、将来の路を揆ぶ明、その路を行きまする勇、その路を測る智、この明勇智の三者はわたくしどもには殊に大事であります。この大事が空気の淀みによりまして即坐に曇りますので、わたくし絶えず空気の転換頭脳の更新を考えております。これも一に事業大事ゆゑでございませうか」

「わたくし絵は好きでございませぬ。大正の初め頃から年々展覽會は観ております。平素物質に繁

の楽しみを見つけております。ハイ幼い時から真に辛勞し物質を貯蓄しようと思ひ定めました。一銭二銭であります。そろそろ登れ富士の山で、それを千円にためてその千円を一気に使つて存じておりました。物質と申ししても、妻子珍室臨終不随であります。好機を以て一気に散らす——茲に物質の醍醐味があると思つております。先日も高山さんからお話がありまして、貧しい方々の子弟の学資金のためこの好機の一つを得ました。実に頭がすつきりする気が致します」

「わたくし自然も美術も物質もみな同じ様なものと存じます。枯木も山の脈と申しまして自然は一方に片寄らせぬ。青木もあれば枯木もある。春は花が咲き秋は葉が落ちます。大きな自然は片時も淀み停滯を見せたりませぬ。わたくしにとりましてこの自然は洵に良い鑑でございます。丁度芸術を見てると同じ感慨に打たれます。これはわたくし一人の考ではあります、物質とてその集積と放散とはこの自然の大きな流れに倣いたいものと存じております。わたくしやつとこの所まで参りましたが、まだ仲々前途は遠慮でございます。閑をみて益々禅林高僧伝なり、芭蕉、良寛なりを讀みまして遅々たる歩みを進めたいものと存じております」

(文責在加藤)

訪中日本画展

日本画家前田晋吾氏を团长とする「訪中画家代表団」は現代日本画の巡回展を行うとともに中岡各地の美術事情を視察している。団員は日本画家吉岡堅二、岩橋英遠、西山英雄、評論家河北倫明、日中文化交流協会の北川桃雄氏らで、日本からもつて行つた作品は五十点ほど、京都の画家では西山英雄、麻田鷹司、上村松篁、徳岡神泉、福田平八郎、宇田萩郎の作品がふくまれており、当館所蔵の西山英雄「桜島」も出陣された。



TOPIC

六月の鳳雛書道展、龍門社展、行余書院展、平安書道展、七月には水明書道展、さらに書道展の大小があるにはあるが、いづれにしても出品作は数千を数える。お習字、書道、書と、筆をとる人によつていろいろニュアンスはあるが、その数の大さでは絵画は足もとにもおよばないだろう、いづれの会場もお茶席や売店が設けられてお祭り気分だが、中には

イルミネイシ ヨン絵画展

アメリカのライフ社による「万人の世界名画展」が七月十七日まで大阪高島屋で開かれている。原寸大のフィルムに復写して、裏から照明をあててみせる仕組みである。原画と同じ大きさであること、色感もほぼ完全で、名作の複製としては画期的であると評判がよいようだ。

出品作は十四世紀の初期ルネサンスから現代まで、ジョット、ダ・ビンチ、レンブラント、ベラスケス、ドラクロア、アングル、ルノアール、セザンヌ、ピカソ、クレールの五十点である。いづれも各国の美術館、寺院を飾る名作であるが、エル・グレコの「オルガス伯の埋葬」は五メートルに近

美術館夏期講座

夏期講座も第三回を迎えて次のように開催することになりました。多数の御参加を待ちしておりますが、人数に制限がありますので早くお申し込み下さい。

講座の概要
期間 7月19日、23日の5日間 毎夕6時半から9時頃迄

会場 京都市美術館
募集人員 申込先着順 一、二〇〇名
受講料 全期間1名につき 二〇〇円
(友の会会員は一〇〇円)

申込は 受講料をそえて美術館へ(おそくなつた方は電話で一応お尋ね下さい)

講師と演題 19日 日本洋画の変遷 黒田重太郎、20日 国展までの京都画壇 岡部三郎、21日 欧米人のみた日本美術 森脇、22日 ルーブル美術館の名画 木村重信、23日 美術とその周辺 矢内原伊作

今年の市民美術展

当館では毎年8月に美術の好きな市民のアマチュアのために市民美術展を催していますが、春の京展は主に専門家が参加する鑑査のかなり厳しい展覧会ですが、それに比べて市民美術展はアマチュアだけの極く気軽な展覧会です。夏の暑さしのぎに絵をかくのも一興かと思えます。その成果をふるつて出品されるよう期待します。今年は大体次の要領で開く予定です。今年から作品を御用意下さい。

期 8月23日、28日
会 8月23日、28日
場 京都市美術館
入 8月21日(日)
集 京都市美術館
日 京都市美術館
本 京都市美術館
画 京都市美術館
展 京都市美術館

出品資格 京都市民或は京都市内に勤務又は通学する人。但し専門家及び中、小学生を除く。
出品料 不要
審査員(交渉中)
(日本画) 奥村厚一、桑野博利(洋画) 桑田道夫、竹中三郎、保地謙哉(彫塑) 岡本庄三、堀内正和(全般) 重達夫

彫塑 三科とも寸法の制限はありませんが、陳列に不適当なものは受け付けません。一人2点以内。

洋画 (水彩、パステル、版画を含む)
出品資格 京都市民或は京都市内に勤務又は通学する人。但し専門家及び中、小学生を除く。
出品料 不要
審査員(交渉中)
(日本画) 奥村厚一、桑野博利(洋画) 桑田道夫、竹中三郎、保地謙哉(彫塑) 岡本庄三、堀内正和(全般) 重達夫

見聞談

岡部三郎

日本南画協会 明治三〇年代の京都 の美術展覧会 (三)

鉄 斎の作品が国際的に紹介されてから鉄斎の世評が急に高まったのも戦後でも最近である。

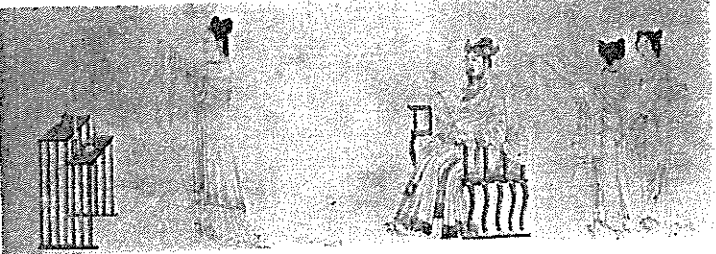
地元の京都では鉄斎を生前から「鉄斎さん」と呼んで一般市民から親まれて来たのに、別に文展へも出品せず他の花形画家のような派手さがなかつた鉄斎を、地元の画壇ではアウトサイダーとして別格に位置づけるのが普通である。戦前でも一部では鉄斎を近世の大画家の一人として非常に高く評価するものがいたけれども、不思議にそれは概ねに親しむ側の京都人には少く、鉄斎の熱心な観賞家は今日でも古美術関係か或は洋画関係の側で、日本画家の側には少い。

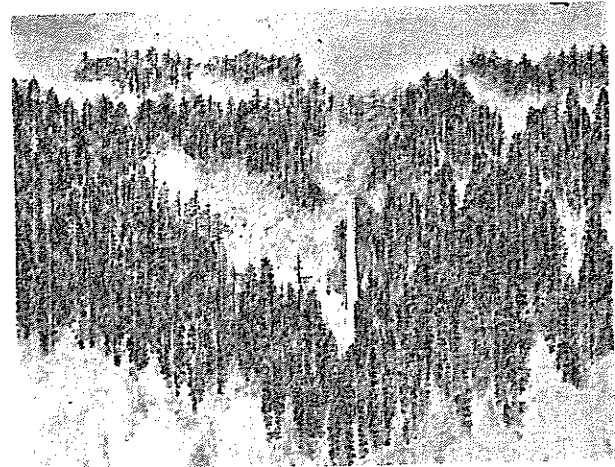
この京都画壇と云う枠の内側と外側とから見たとも解せられる二つの鉄斎評価はまた芸術批評の時代差から生れたとも解せられる。鉄斎の絵が西歐人の目にどのよう映つたかはまだ十分にわからないが、鉄斎を或る特定の一方の時代の画家としてまでは恐らく

見てはいないだろう。云はばこの最近の評価は西歐風の芸術作品の純粹観賞へつながらず超歴史的な立場で可なり自由なものである。他方鉄斎を画壇のアウトサイダーとする見方は京都画壇と云う歴史的概念を前提条件としたものであることは云うまでもない。前者は今後の課題として残る問題だが、後者は京都画壇と云う特定の概念の成立経過を振り返つて見ることによつて一層この立場の具体的な背景が浮び上つて来るのである。南画と云つてもそれはいろいろある。私は明治の極く初期に全国的に流行した南画と云われるものは江戸の末流芸術でしかないと思つている。私はこの既成の芸術が維新後のまだ世情騒然とした中で何故に南画だけが独り栄えたかはよくわからない。一般には地方出身の多い、新興明治官僚の嗜好にマッチしたからだと云う風に説明されている。兎にも角くにも新時代の文明開化を謳歌するただ中時代の寵児洋画と対抗して自立出来たのは伝統絵画の中では南画(文人画)だけだった。京都でもこのような風潮が明治一五年頃までつづいたと云われている。要するに絵かきは南画を描かなければ生活が出来なかつた時代だった。

向、少くとも著しい偏向がまだ残つており、現代から次第に過去の作品へ目を移して行くと、模範・寛斎の時代から更に来章・文麟の時代へかけて余りに「前時代的」な急な深い陥没地帯を形造つて歴史の時代に驚かされるのである。それれこそ今云う南画への偏向から来るものなのであつて、模範らの四条山山の画風と雖も当時の南画と同様に末期的な常套芸術にちがひないのに南画への偏向の度合が強いほど一層末期的な味香くさい印象にとらわれるから不思議である。それは一口に云うと明治一五年にフニノサによつて提唱された新しい日本画観、極言すれば南画を強くしりぞけた別の新しい目で見ているからなのであろう。

明治後の京都でも初めは田能村直入・谷口福山・池田雲樵・村田香谷ら当時著名な南画家は決して少なくなつたけれども、その後次第に衰勢を加へ四〇年文展が創設された頃から決定的な斜陽芸術へ転落して行く。南画界の長老鉄斎翁の画歴はこの明治から大正にまでたがり、帝室技芸員・帝國美術院会員にも推挙されている。ただ鉄斎の評価における当時の他の南画家と区別される特異な点は単に江戸の末流芸術の継承ではなかつたことであり、フアナティックな文





近作 自評

麻田 鷹 司
雲 煙 那 智

このニュースが私に与えたスペースつづしの命令にそむいて「私の現在の仕事、また考えている今後の仕事等、楽屋になしを、こゝのべようと云う気はない。」「如何に抱負を語つても、苦心の程を吐露して見た処で、自己の仕事が、それを語らない限り、作家として意味もないことだから。」と言いつつ、黙して、実は楽屋裏をのぞかれたくないと云うケチな根性でないが、自己の仕事について何か語ると云うことはむづかしいことだこの種の文章は、大抵ヒトリヨガリ。読むものは迷惑。意屈なもの相場はきまつている様で、またまた書きつらい。一と引きのぼして見ても、原稿用紙のマス目は、まだ規定の半分残つている。

実風に描かれたりして、表現に統一がない。蘭画風のかき方が無意識のうちに出ているのだから。共同制作も然るに行われているらしく、民族談事堂には四五間もあると思われるような大きな壁面がかかっていた。私達は杭州の美術学校を見学した。その建物や設備、組織などは実に立派でうらやましいほどであった。ここは大学で入学するといつて四寄宿舎にはいり四日間勉強する。国画、油絵、彫刻、工芸にわかれており、工芸のなかに版画、構成、圖案などの各科がある。とにかく敷地も広く、みんな悠々としていた。作家の養成はどのようになっているのかと聞く。「個人の個性を尊重して、伸ばしていく」ということであつた。ただ実際の授業では日本と大分違った点があつて、有名な齊白石の絵を写本にしてそれを模写するというような方法をとつていた。全部が全部そうではないだろうが、写本という考え方はまだ残つていようように思ふ。

せてもらい、感想をのべ、批判もした。中国の絵画で一審すぐれているのは、この国画ではなく、版画とか切紙細工であると思つた。これらは表現が自由で豊潤で、いかにも中国らしい感覚がいきついている。それからみると国画はおくれているように思つた。たとえば表現にちぎはくなどところが目立つのである。一枚の紙があるとして、山は南朝風に描かれているが、手前の倒れている人や赤旗は写

と聞く。「個人の個性を尊重して、伸ばしていく」ということであつた。ただ実際の授業では日本と大分違った点があつて、有名な齊白石の絵を写本にしてそれを模写するというような方法をとつていた。全部が全部そうではないだろうが、写本という考え方はまだ残つていようように思ふ。

中国は文化の保存と発展に実には大きな力を注いでいる。美術館や博物館、劇場などの施設がほとんど建てられていて、考古学上の調査、発掘も盛んで、新中國になつてから支那山のような遺跡がこつそり発見されたこともあるが発掘にともなう価値あるものは細大漏らさず保存しようという方針らしく、大きな歴史博物館が各地に建てられている。北京の北の昌平県にある明の十三陵も美しく整備されている。以前は相当いたんでいたときいて、これによつても文化を大事にしようという中国の意気込みがわかる気がした。(談)

わが師 わが友

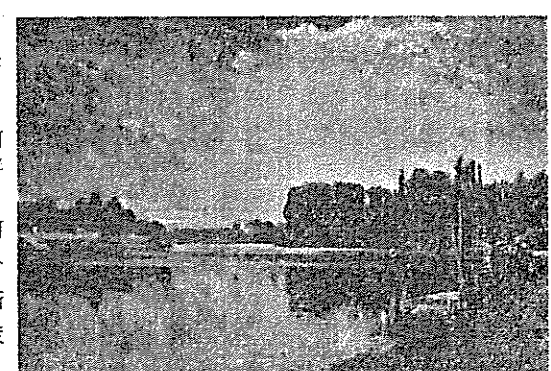
黒田重太郎

河合新蔵さんの思い出

私が正式に洋画の修業をはじめたのは、浅井先生の京都来住後二年、明治三十七年の四月末か五月はじめである。その時には既に聖護院洋画研究所が出来ていたのであるが、不案内な私は、そう云うものゝあることも知らねば、第一浅井先生が京都に來ておられることすら、いくらかあとになつて知つたわけである。

最初に教へを受けたのは鹿子木孟郎先生であるが、これに先立つて、洋画家としての私の生涯を決定してくれた人がある。河合新蔵さんである。鹿子木先生も河合さんも、共に小山正太郎氏の不同舎出身で、同窓の満谷四郎、丸山曉波などと云う人たちと一しよに、アメリカに渡り、そこで学費を作つて、フランスに留学した。この年三月、両者は相携へて帰国したのであるが、恰かも日露戦争勃発の時で、帰航の途中、ロシア海軍の臨検を受けた。乗つていた船が外國船で、船の人たちが、おれはシナ人だと云つてくれたので、危ふく抑留されるのを免れたと云ふ話を聞いている。

河合さんは私と同じ大阪船場の商家に育つた人である。血の繋がりはなかつたらしいが、この人の生家と私の家とは、何代かに亘つて親類づき合いをしていた。おとなしい



七一ノ河畔 河合新蔵

人で、小さな時から絵が好きで、大阪の鈴木雷斎や、神戸の前田吉彦の教へを受けたが、画家になるとも云い出し兼ねて、二十才を過ぎるまで、家業の呉服商に従つていた。幸い次男であつたのと、衷心の希望を察した兄榮七氏の計らいで、それが容れられ、東上して五姓田芳柳の門に入り、転じて不同舎に学んだのである。

小学校卒業後、本家の主人であつた伯父の援助で東京へ出て、慶応義塾普通部へ入つた私は、その前後から文学や絵画に興味をもつて、学業の傍ら文章を書いたり、大下藤治郎氏の「水彩の榮」などに影響されて、下手な水彩画を描いたりであつたが、もともと商人にする積りであつた伯父や、商人に学問は不要だと考へていた父の意に添はなかつたので、中途退学を強いられて大阪に帰つた。明治三十六年四月である。止めたら絵の勉強をさせてやると云ふ約束であつたが、掃るといや応なしに、花街まわりの呉服屋であつた家業に従事させられた。それでむほんが起きて、文学書をあさつたり、当時西区の鞆にあつた泰西学館の夜学部へ通つて、英語や漢文を学んだり、いまの新淀川に改修される前の、中津川附近など、大阪近郊などを、鉛

筆や水彩絵具をもつてうろついていた。それが父の怒りに触れたのは云ふまでもない、京都にいる二番目の伯父の家や、本家に預けられたが、すぐ飛び出して帰つて來るので、父も我慢の角を折つたらしい。

そこへ帰つて來たのが河合新蔵さんである。河合さんも年少時代に同じような体験があるので、すぐ私の気もちを理解してくれた。父に説いて、このまゝ押し行けば、商人でもなければ、画かきでも文士でもない、中途半端な人間が出来てしまふ、思い切つて画家にして見たらと云うようなことで、鹿子木さんを紹介して下さつた。河合さんと鹿子木さんは、帰国直後京都に居を占めておられたので、河合さんはそれから間もなく東京に移住されたが、何年か経つて、また京都に戻られた。

「集団現代彫刻」 生れる

各美術団体の彫刻家三十八人によつて「集団現代彫刻」が結成され、第一回の発表会を来る九月十八日から西武百貨店で開く。メンバーには建島寛造、山口勝弘、朝倉警子、毛利武司郎、向井良吉ら有力作家が加わっており、京都関係からは橋本惣介、堀内正和、野崎一良、小谷謙、三林暢夫、井上平八郎らも加わっている。主旨書には「彫刻の仕事はもとも地味なものであり、作品が多くなるとの目に触れる機会にめぐまれなかつたことが、彫刻家たちを一層ばらばらの地点に追いやることになつた。——この度、彫刻家がそれぞれに声をかけ自分たちの作品を批判しあう機会を得たことはまさに日本の近代彫刻史にかつてない企てだと信じ、またそれを自負するところだ」と述べている。

二十代の陶芸家たち

二十代の陶芸家のグループ「京都二十代作陶集団」ができた。



TOPIC

田和夫、川端信二ら十五人。また女性ばかりの洋陶家グループ「フエミナ」も結成された。小野鈴子、河村恵子、本庄富佐子、多田越子、広畑美代子、飯本美智子、田中時子、山本敏子小泉玲子の新進が参加している。

京都書院画廊再開

改築のため閉鎖していた四条河

原町上ルの京都書院画廊はこの七月から開店、清水六兵衛陶作展をかまきりに個展、グループ展が開かれていく。また土橋画廊も四條鳥丸東入に移転、こけら落しに祇園会展を行つた。また寺町高辻上ルにサンケイ画廊が開設されている。

堂本尚郎の新作

購入

フランス滞在の堂本尚郎氏は京都出身の新鋭画家として有名であるが、京都市美術館はその新作一点を購入した。作品はさきごろ東京で開催された第四回現代日本美術展に出品の「作品60ノ1」で国立近代美術館賞を受けている。堂本尚郎の近作はいづれも純然たる非形象絵画であるが、はげしくドマチツクなものや優雅繊細なものが完全に融合してきわめて特徴的である。

堂本尚郎は昭和三年京都生まれ、京都市立美術専門学校日本画科の卒業で日展で特選を重ねた。昭和三十年から渡仏、個展各種の展覧会、に出品して有名になつた。昨年十二月帰国、東京両西廊で個展を開いたが、この六月再び渡仏した。

九月中旬から 常設展開設

七月開設を予定していた当館の常設陳列は都合で延期されていたが、いよいよ九月中旬から開幕の運びとなつた。会場には一階南半館が当てられる。

陳列品は京都関係作家の日本画、洋画、彫刻、工芸の各部門にわたるが、まず開設の当初の展覧は日本画では菊池契月、西山翠嶂、西村五雲、橋本閑雲、川村曼舟、土田斐徳、中村大三郎ら近年の大家、および橋原紫峰、福田平八郎、堂本印象ら現存の大家に及ぶ。洋画は伊藤快彦、浅井忠の昔から現代作家まで、工芸も神坂雷佳、清風与平、清水六和から現代の第一線作家に至る。

またこれとは別に現在の京都美術界の状況展望にもポイントを置き、新進作家もよくめた一室も設ける。

このような陳列が一定期間を経たのちは、順次企画替え、作品のさしかえを行うが、その場合、明治時代に活躍した諸大家や、とくに有名でなくても、美術史的な意味をなす作家の秀作を蒐擷して展覧する予定で、常設展では京都を中心とした美術の流れと現状とが総合的に示されることになる。



見聞 紀談

岡部三郎

である。三年後京に出て模範につくことになるのだが、はじめは余技ぐらゐにしか考えていなかつた。岡部三郎は、戦前や戦中、肥後型の若者にそがれた師匠の目も次第に信望に変つて行つたのである。後には選ばれて、塾頭になつた。芳文の作品は今では殆んど残つていないが、文展図録で見ると「若竹」「仔雀」などは優等生らしい先生好みのなかなかの筆致を示しており、標原などの優秀な塾生をさしおいて芳文を塾頭に選んだ模範の気持がわかるような気がする。

これら顔振れを見ると戦前の京都画壇を構成していた老大家ばかりで三〇年代に進出した精鋭でもあつた。京都画壇と云う言葉自体はこのようにせまき解さるべきものでないだろうが、戦前や戦中しなかつた京都画壇と云われるものはこの辺を上限としていたと解してよい。ここに後年の京都派と呼ばれる画家達は殆んど皆がこれらの塾が美術学校でこれらの大家に学んだ。

を払拭したと云われるが京都でも三〇年頃は近代化への重要な曲角となつたことは大体一致する。たゞ京都では観念論的な面では全く緩慢な反応しか示さず、むしろ政府の殖産政策から生れた美術振興策の線に沿つた活動をつづけて来たのは東京とは反対であつた。明治五年以来毎年京都御所で開かれた京都博覧会は殖産が主要目的であつた。日本画が維新の騒擾の中から復興して来る線に二つあつた。一つはフニノロサの新日本画運動で観念論的な基礎概念の確立、もう一つは明治政府が外貨獲得のために取り上げた美術振興策である。明治六年ウイン万国博覧会における日本美術の好評から教えられた政策であつた。前者は在野の画家達から多く支持をうける結果になつたが前者は政府の政策に一貫して見られる考え方である。若し京都で前者の線の上に浮び上る絵画運動を挙げれば、ずつと後の大正後半の国展がたつた一つあるだけと云つてよい。しかもこの頃になると京都でも画家なりの確信をもつた新しい基礎概念の上に立つた日本画家も多く出て来る。

明治三〇年頃に 出来た京都の画塾

この頃に出た画塾の一つに菊池塾がある。明治二

八年或は九年であつたかも知れない。菊池芳文が師匠根原の死の前後に、師匠の塾を継承して創められたもので、養子婿の死まで二代にわたる由緒深い画塾であつた。翌月がなくなつたのは戦後の昭和三〇年だから六〇年余りも続いたことになる。標原の竹板塾や翠峰の清中塾などはまた別の風格をもつた塾であつた。

芳文が入塾したのは十九才の時であつた。同年の秋、肥満の若者は相撲では威力を発揮したから塾生仲間の人気もあつたらしい。性格の方はまづ

て温順で芳文の誠実な態度は塾の衆望を集めていた。画技でも早くから才幹を認められた。明治十五年、入塾二年後に第一回内閣絵画共進会に「雨中修学院園」を出品し、三等賞銅印をうけている。また同年京都博覧会に「岡谷処女園」を出品。褒状。

三〇年代の驚くべき業績を見ず、二八年二月逝去した。塾頭である芳文は塾の後始末から塾生らの面倒をも見なければならなかつた。塾は勿論解散されたことであらうが、芳文はそれをつくつたまゝから塾生を継承したらしい。それの中には川北俊家・山田耕云・正田芳沼の名を数々

は知つてゐる。これが菊池塾の歴史である。丁度この頃に同門の標原・香嶽・華香も独立して夫々画

現代日本画の最も特徴的な性格

展覧会案内

8月

京都書院画廊	1日-5日	丸物画廊	24日-26日
住高俊美術展	1日-5日	日本画所作小色紙展	7日-29日
長興会	12日-15日	児童画展	6日-11日
創造作家クラブ展	19日-22日正午	複製西洋名画即売展	13日-18日
グループブレイ洋画展	22日正午-26日正午	大丸画廊	
御苑サマースクール展	9日-10日	マロニエ画廊	
市民美術展	23日-28日	日吉ヶ丘OB五人展	18日-20日
京都府キヤラリー		写真絵画彫刻三人展	28日-30日
鈴々会展	7月30日-3日	べんてる画廊	
綜研展	5日-7日	三輪屋勢画展	8日-14日
扇子図案展	9日	瀬装展	17日-21日
室内装飾織物展	10日-11日	日本画六人展	23日-28日
アロコブレー作品展	27日-31日	吉田翠鳳画展	30日-9月4日
		東福寺写生会展	2日-7日
		富有小学校美術教室展	9日-15日

市民美術展

入場無料
 当館では毎年8月に美術の好きな市民のアマチュアのために市民美術展を催しています。春の京展は主に専門家が参加する展示のかなり厳しい展覧会ですが、それに比べて市民美術展はアマチュアだけの気軽な展覧会です。夏の暑さしのぎに絵をかくのも一興かと思えます。また多くの人々の鑑賞を期待します。

会期 8月23日～8月28日
 場所 京都市美術館
 換入日 8月21日(日)
 募集作品
 日本画 (必ず背をつけて下さい。掛軸に受けまかせ)
 洋画 (水彩、パステル、版画を含む)
 彫塑
 三科とも寸法の制限はありませんが、陳列に不適当なものは受け付けません。一人2点以内。
 出品資格
 京都市民或は京都市内に勤務又は通学する人。但し専門家が及び中、小学生を除く。
 出品料 不要

(前頁から)
 の一つは洋画と云う異質の価値概念に接触することから生れる変質である。それは一層自由な豊富なフォルム(形式)を積極的に要求した。同時にテクニック(技術)の更新をも必要とした。この二つの関係から多種多様なフォルムを創り出す可能性だけは見付け出したようであった。しかし一方では過去のフォルムとかテクニックの回想にしばられる矛盾を体質の中にもつていた。この形式多様化の原理から新古典主義の問題と心懸に取り組んだのが契機であった。とにかく菊池塾は京都画壇にとつても重要な三〇年代から隆興期までにわたる京都の最も典型的な画塾であった。

館は契月の最も代表的な出品作品「南波照間」「散策」「交歓」「教盛」四点をもっている。外遊後の、白描か淡彩の人物画を描いた新古典主義に入る極初期のもの。「南波照間」は契月の最大の作品。芳文の作品は残念だが館にはない。

写真
 「南波照間」 昭和三年第九回 帝展出品 (或は部分)

京都市 美術館ニュース No.33

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和35年9月30日発行

常設展を開いて

館長 重達夫

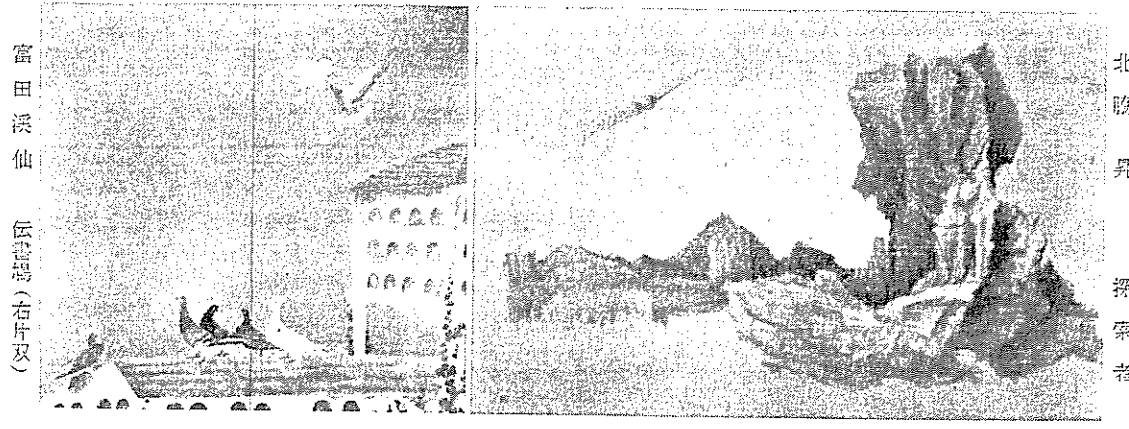
京都の美術館があれ程立派な建物を
 持ちながら、いつ行つても京都の現代
 美術が見られる常時陳列がされてない
 ということは、とても淋しいという意
 見が各方面から出ていました。全く同
 感で、私共としましては、常時陳列
 と、特別展の開催と、作家への会場提
 供と、この三者を当美術館運営の中軸
 とすることを理想と考へ、特別展と会
 場提供とは逐次成果をあげて参つたつ
 もりですが、常時陳列だけは速急に実
 現することは不可能で、ある程度の準
 備期間を必要としました。戦後中断さ
 れていた作品購入の再開だとか、陳列
 ケースの新設だとか、諸準備に二、三
 年を要し、このたびようやく常設展を
 開設することが出来た次第です。

戦前にも常時陳列を行つておしま
 したので秘密には再開ということでは
 ないが、時代も距つていますし、全く想
 を新たにしてお出し、作家、所蔵家を
 始め一般鑑賞家の方々の御理解と御協
 力の下に、今後常設展の充実を力

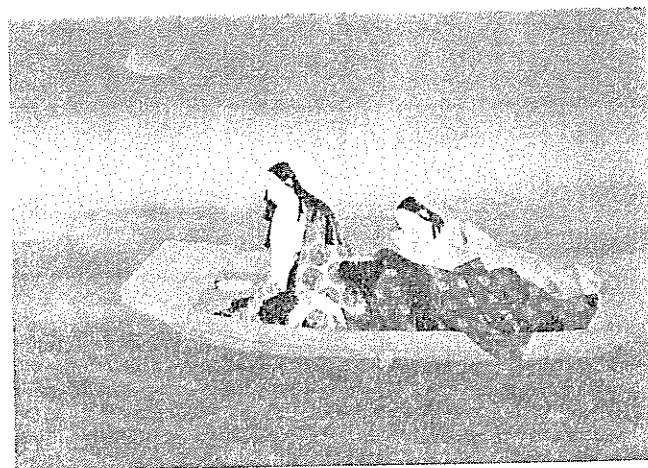
たいと思つています。長い将来に亘る
 ものでもありますので、あせらずに皆
 様の御意見もよく承り、京都美術館ら
 しい特色を徐々に盛り上げて行きたい
 と思つて居ります。

ただお断りしておかねばならぬこと
 は、会場の関係で常設展と称しますも
 の、当市主催の特別展の開催の際は、
 会期前後を通じ相当長期間遺憾ながら
 閉鎖しなければならぬことです。こ
 の点御諒承をお願い致します。

館長就任当初、鎌倉近代美術館長の
 村田良策氏から、京都のような大きな
 美術館をフルに運営することは大変な
 仕事だとおどかされ且激励されたこと
 を今にして想い出します。常設展を期
 に、ようやく全面的な美術館活動が結
 についた今日、意を新たに当館の
 施設や陣容の強化をはかり、国際文化
 都市にふさわしい美術館の実現に一層
 の努力を致す覚悟で居りますので今後
 共御協力の程お願い申し上げます。



北 島 昇 深 索 者
 富田 溪 仙 (右并及)



常設展の前と後

岡部三郎

なく、作者や愛蔵家からも作品を借り出して、にもかくにも終戦の前日までつづけて来まし。この日から美術館の苦難の数年がつづきま。たしか終戦の翌年でしたか、館が米軍のために接収されて野戦病院となつたからです。接収までにはいろいろのいきさつがあつて、最終的には館の一隅にあつた吾々の事務所だけが残され、美術品や陳列用具は一際七条の博物館に移してしまいました。ところが更に面倒なことが起りました。館の収蔵品を収めた部屋がまた米軍に接収され、部屋の出入りも、館の収蔵品の出入れも一切禁じられてしまつたので、例えば常設展のような展覧会は全く出来なくなつてしまいました。

館接収の話がもち上つたのは米軍が当地に進駐して来た直後でした。米軍の意見は吾々にはわかりませんでした。が、終戦事務局の意見は二つに別れていました。一つは文化施設を接収することは出来るだけ避けるはずだと云う

この九月から常設展が再開されることになつた。今日では常設展と云つただけでは、皆様は何んのことだか一寸戸迷いされると思いますが、実は美術館が出来た当初は、文帝展(旧日展)や市展(旧京展)などが主な事業で、平常は館が自主的に企画する展覧会はなかつた。それから数年を経て館にも収蔵品の数もだんだん増え、それを展覧しようとする動機からこの展覧会が出来ました。二階の半館を会場に当て、殆んど毎月陳列替えをするようになった。これを常設展と呼ぶようになったのです。その後は館の収蔵品ばかりで

や陳列用具は一際七条の博物館に移してしまいました。ところが更に面倒なことが起りました。館の収蔵品を収めた部屋がまた米軍に接収され、部屋の出入りも、館の収蔵品の出入れも一切禁じられてしまつたので、例えば常設展のような展覧会は全く出来なくなつてしまいました。

館接収の話がもち上つたのは米軍が当地に進駐して来た直後でした。米軍の意見は吾々にはわかりませんでした。が、終戦事務局の意見は二つに別れていました。一つは文化施設を接収することは出来るだけ避けるはずだと云う

いささか希望的な予測ともう一つは私有建築物の接収は公共建築物のそれよりも、交渉手続が容易だと云う交渉現場の結論です。

食糧事情がむづかしくなつてすぎ腹をかゝえていた吾々はレジスタンスなどとはありませんでしたが、吾々も市も終戦事務局も接収されたくないことで同じでした。吾々はありつただけの収蔵品を館いづばいに陳列しました。吾々に見れば米軍へのはかない誇示でした。いさ開いて見ると米軍のG・Iさんが沢山来ます。けれども大抵は「I can not appreciate」(私にはわかりません)と云いながらも写真のよう丹念に写生した油絵の前ではここにこしました。

「彼は余りにも長い間、過剰な洗練の中に埋没していた強烈な芸術にとりもどすために、自己の鋭敏な感覚と格闘する。同時に彼の右手は左手から真新しさを学ぶために、右手の熟練を無視する。……右手ほど訓練されず、オートマテックな技術でも熟練して、ない左手はゆつくりと、いねいに対象の輪廓を追つて移動する。」

最近の洋画は洗練された技巧の拒絶しかも、どう拒絶するかが大きな課題の一つになつて、います。戦後は京都の若い世代の作品にもこのような新しい傾向が目立つようになりまして。そして日本画でも陶芸でも同じです。

さて私は、そうして河合さんの手引きで、洋画を学ぶことになり、京都へ来て、先づ鹿子木先生に教をうけた。その頃鹿子木先生の住居は、室町丸太町上ル西側にあつた。三四軒南には望月玉泉さんの家があり、筋向いの東側には室町教会があつて、日曜日や夜などには、オルガンの音が聞えて来た。京都裁判所の佐々木と云う判事の旧宅で、表は二軒になつており、一方は紅柄格子の普通の民家であつたが、それに隣つて瀟洒な門構えの、擬つた庭樹や石のたすまい、小さな表庭の奥に玄関があり、玄関の右手は後に私たちの「室町画塾」となつた書生部屋で、左手は茶室めいた四畳半、これが来客の応接に使われていた。

最初私は室町二条下ル辺の伯父の家から通つてしたが、間もなく内弟子として、先生の家におるようになった。忘れもしない、この弟子入りの最初の日のことである。手紙を二通持つて、

浅井先生と池辺義象さんの所へ使いにやらされた。池辺さんの方は吉田で、これは大した苦勞もなしにわかつたが、浅井先生の家がわからなかつたに云うのが、ずい分無茶なので、丸太橋を丸太橋はまたよとして、クマノ神社をニヤ神社なんて教えるものだから、京都の街の勝手を充分に知らなかつたその頃の私には、到底わかりようはなかつたのである。

あの頃の丸太町通は、いまの電車通りのように、まっ直ぐに東西に通じてはいなかつた。御所の南側について東に行く、角のところで寺町につき当り、少し北にふれて、また東へ行く。それを寺町通りでつき当つて、北へ行く、東の方を見ると橋があり、橋の向うに赤い鳥居がある(この鳥居もいまはない)と教はつたものだから、赤い鳥居のある橋をさがして、寺町通りを北へ行く中に、とうとう出町へ出て、

すぎた大学生に尋ると、手紙の封筒に「熊野神社東横」とあるのを見て、君、これをニヤ神社と尋ねていたんでは、日が暮れるまでかゝつてもわかりはしませんよ、と云つて、教えてくれた。

それで漸く使命を果して帰ると、朝九時頃から出て正午をとうに過ぎていたのだから、何か道草でも食つていたと思つたのである。先生の御機嫌甚だ斜めであつた。そこでわけを話して、弟子入り早々、云いつけられた用が足りないでは、将来覚束ないと思つたので、浅井先生の家がわかるまで、帰つて来ないつもりでした、と云うと、先生の顔色が次第に和らいで、君、その心がけは、忘れないようにしまえ、で済んだ。

方々あるいた。天候の具合か何かで、出来なかつたり、半仕上げだつたりすると、大変機嫌がわるく、一旦外に出た以上、風も吹かうし雨も降るだろう、その度に止めていたのでは、一生絵らしい絵は出来ないぜ、と云うので、省略法を知らないで、こんな樹の葉の描き方があるかとか、この屋根瓦の描き方は何だとか、小言を食う。ではどう云う風にと聞くと、そこが君の工風ぢやないか、と云はれる。

鹿子木はやかましい男だがね、と弟子入りする前に、河合さんが云はれた。たび／＼親類へ預けられて、すぐ戻つて来る前歴があるので、それを案じられたのであろう。絵のことだけでなく、その他のことについても、それは事実であつたが、でも私には大して気にならなかつた。何でもやり抜かうと云う、腹がきまつていたからでもあろう。



鹿子木 孟郎 京末亡人の肖像

わが師わが友

- 3 -

厳しかつた
鹿子木さん

洋画家
黒田重太郎

石の鳥居が見えるから、それかも知れないと橋を渡つて下鴨の森へ迷い込んだ。そう云つてはわるい、道なぞを尋ねる場合京都の人はどうも血のめぐりのわるいところがある。少し気を利かせて、所書がありますか、とか聞いてくれればわかるのと、あとで愚痴も出るのがあるが、行き遭う人も、逢う人も、へえニヤ神社、知りまへんなで、下鴨へ入つてからもずい分迷つた。その辺に下宿していたのであろう、書物を抱えた通り

「彼は余りにも長い間、過剰な洗練の中に埋没していた強烈な芸術にとりもどすために、自己の鋭敏な感覚と格闘する。同時に彼の右手は左手から真新しさを学ぶために、右手の熟練を無視する。……右手ほど訓練されず、オートマテックな技術でも熟練して、ない左手はゆつくりと、いねいに対象の輪廓を追つて移動する。」

展覧会案内

- 美術館
9月 25日-27日
私学展
10月 7日-9日
笹瀬悦子アトリエ展
京都学生書道連盟展
9日-12日
前衛機構「具現」作陶集団
「マグマ」合同展 11日-16日
市政自治記念児童生徒美術展
12日-16日
不思議の園子供アトリエ展
14日-16日
行動美術展
14日-16日
梅本・児玉彫刻二人展
18日-23日
勤労者文化祭展
18日-23日
パンリアル展
25日-30日
立命館早稲田交換展
25日-30日
墨人展
28日-30日
京都府キヤラリ
9月 30日-10月4日
京都青年美術家集団展

京都市 美術館二ユース No.34

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和35年11月15日発行

- 10月
墨光社展 7日-11日
萃岐美術協会展 13日-17日
新匠会版画展 21日-25日
全日本学生油絵京都展 27日-29日
京陶青年部展 31日-11月2日
京都書院画廊 23日正午-26日正午
9月
紫野高校美術部展 23日正午-26日正午
10月
丘道会展 7日-10日正午
フォート京都写真展 10日正午-17日正午
立命館高校美術展 24日正午-28日正午
野尻勇・大野繁二人展 28日正午-31日正午
土橋画廊 10月
加藤頭清彫刻展 5日-9日
森俊三作品展 19日-23日
豊秋半次個展 28日-30日
べんてる画廊 10月
大原野小学校作品展 4日-9日
安本音楽学園美術展 11日-16日

- 大妻小学校作品展 15日-20日
丸物画廊 9月 23日-29日
創業四十周年記念刀剣展
10月
フランス製複製西歐名画コレクション展 1日-6日
第二回大和古社寺拓本展 8日-13日
第七回吉田吉彩画展 15日-20日
京都写真サロン展 23日-27日
京都人形展 30日-11月3日
逸翁美術館 10月
開館三周年記念陳列 1日-30日
主な陳列品は、小間のお茶床を再現した床の間七趣のほか上代様古筆切、蒔絵物、国焼陶器、樂焼茶わん・器物、書画など五十五点
阪急(大阪) 10月
桑山舟舟絵画展 4日-9日
浜田庄司、河井寛次郎、棟方志功、黒田辰秋、芹沢銈介工芸五人展 11日-16日
加藤十右衛門茶陶器展 18日-23日
東洋古陶展 25日-30日

- 丸物画廊 9月 23日-29日
創業四十周年記念刀剣展
10月
フランス製複製西歐名画コレクション展 1日-6日
第二回大和古社寺拓本展 8日-13日
第七回吉田吉彩画展 15日-20日
京都写真サロン展 23日-27日
京都人形展 30日-11月3日
逸翁美術館 10月
開館三周年記念陳列 1日-30日
主な陳列品は、小間のお茶床を再現した床の間七趣のほか上代様古筆切、蒔絵物、国焼陶器、樂焼茶わん・器物、書画など五十五点
阪急(大阪) 10月
桑山舟舟絵画展 4日-9日
浜田庄司、河井寛次郎、棟方志功、黒田辰秋、芹沢銈介工芸五人展 11日-16日
加藤十右衛門茶陶器展 18日-23日

10月4日から 一部陳列替え 常設展

当館の常設展はさる9月11日から開設され、予想以上の観賞者を迎えているが、来る10月4日(火)から一部陳列替えをして展観する。

常設展の作品は日本画、洋画、彫刻、工芸の各部門にわたっているが、現代美術の常時展観がめずらしいということ、古いよき時代の作品もみられる点で好評のようだ。なお常設展は11月に開かれる小林古径遺作展のため10月23日で一たん打切られる。次いで12月、明年1月は日展が開催されるので常設展の再開は2月になる予定。

- 10月4日から新たに陳列される主な作品は次の通り。
▽日本画 竹内栖鳳「ベニス」
「夕暮」 村上善岳「聖者の死」 西山英雄「桜島」 秋野不矩「立像」 広田多津「二人」
▽洋画 堂本尚郎「作品60」
「今井憲一」 「ペレルの塔」
▽工芸 富本憲吉「飾皿」 福田力三郎「白瓷壺」 春日井秀雄「染屏風かちぜんまい」

小林古径 遺作展

11月27日まで



清姫 (部分)

小林古径は三年余前の昭和三十二年四月、東京で七十四年の生涯の幕を閉じたが、現代日本画壇の最高の一人であったことはよく知られている。

古径は謙虚謹厳な人柄で、自作に対しても容易に相許す作品のないことを常々周囲にもらしておられたので、展覧会の実現に当っても故人の遺志をうけつづけて慎重な考慮が払われた。死去から遺作展の開催までに三年有余というかなり長い日時を要したのも主にこのためである。

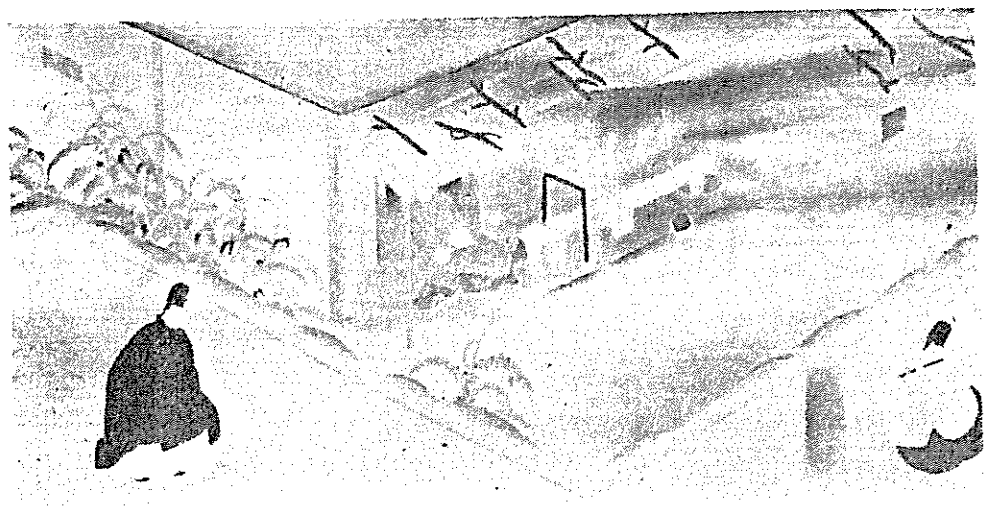
古径は明治十六年新潟市に生れた。幼少のころ古径は不幸であった。というのは四歳のとき母を失い、十歳で兄を、さらに十一のとき父を失い、孤獨のうちに少年時代をすごさなければならなかったからである。古径の峻厳で深沈な画風によつて来たところをこの少年時代の不幸な体験に求めようとする見方もある。父を失つてから古径は郷里で日本画を学びはじめたが十六才のとき(明治三十二年)東京に出て梶田半古の弟子になった。

半古は有能な大和絵師であった。歴史的風俗画を描き、大和絵の画風を新時代の感覚の中に生かすことに努力し、一境地を開いていた。古径も彼のもとで精進した。半古は日本美術院と関係があったので、古径も美術院と日本絵画協会主催の絵画共進会に毎年作品を発表し、受賞するという好成绩であった。こんどの遺作展に出ている敦盛(明34)撰取(明38)すみれ(明40)開草(明40)などはこの期における古径の水準を示すものである。また紅児会に加わったことも大きな刺戟となつた。紅児会というのは今村紫紅や安田靉彦を中心とした青年画家の集団で明治三十一年に創立されたが、明治四十三年、古径は前田青邨らとともに入会した。古典の新しい解釈や、表現、技法の研究が行われ、新しい日本画の温床となつたが、古径も近代的な自己の画風を展開するうえで多くのことを学んだ。

古径が画壇に認められたのは明治四十五年の第六回文展に出品した「極楽舟」あたりからであるが、大正三年、再興院展に出した「異端」で一躍声価を高めた。「異端」はキリシタンの踏絵を主題にした優雅で浪漫主義的気分の濃い作品であつたが、以後毎年のごとく名作を院展に送り賞讃のまこととなつた。すなわち阿弥陀堂(大4) 竹取物語(大6) いでゆ(大7) 妻(大8) 罌粟(大10) 機織(大15) 鶴と七面鳥(昭3) 清姫(昭5) 髪(昭6) 弥敷(昭8) 唐蜀黍(昭14) 不動(昭15) 牛(昭18) 楊貴妃(昭26) などがその代表的作品である。

もつともこの間四十年の歳月が流れており、前期の浪漫主義的な画風から清澄端正な古典的洗練への昇華がみられるけれども、このように長期にわたり間断なく名作を描き続けたということは古径の天才と精進とをいかになく物語っている。このことに関して梅原竜三郎に次ぎのような言葉がある。

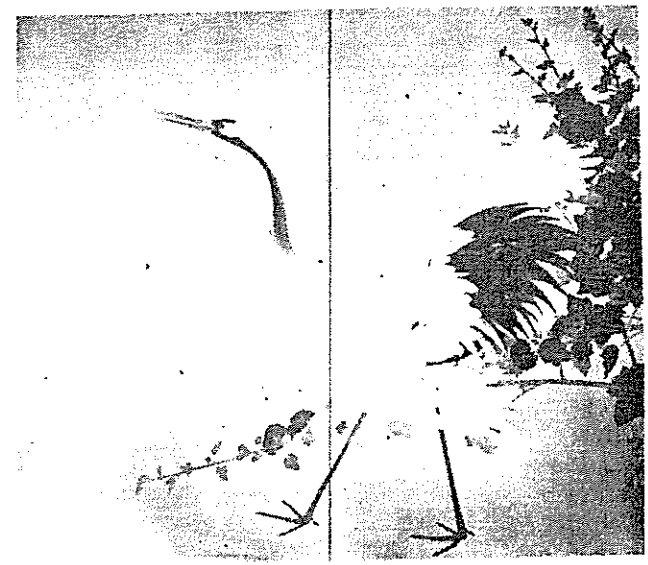
「今日の日本美術の代表的なものを求めれば古径の作品を推すより仕方がない。日本人以外の誰も、持ち合わさない日本画の美しさが完全に、そして自然に現代感覚に於て表われているからである。昭和の初め前後十年間に年々古径の力作が生み出された。名のある人は甚だ多い。良き素質の人も少なくない。然し代表的な作品の多くある人は甚だ少ない。」



鶴と七面鳥 二曲一対の屏風のうちの右半双である。銀地に大きく鶴と七面鳥を対置させ壯麗なものである。昭和三年の作で古径の代表作の中でもとくに有名であるが、緻密な描写と深化された構成感のせめぎ合いが、画面を緊張させ、独特の美しさを現わしている。

古径の作品

極楽井 江戸初期の風俗をテーマにした作品で明治四十五年の作。江戸の傳屋敷の近辺の寺に、昔から種々のいい伝えのある霊水があり、当時の少女たちがよく水を汲みに来たという。古径はその状況をコマンテックに描いているが、その清浄で典雅な画調は、それ以前の歴史的風俗画の制約をすてに照し、後年いよいよ明瞭な形を現わしている古径芸術の端緒がみられる。



竹取物語 かぐや姫の物語りは日本の古い小説として有名だが、古径は大正六年、これを一巻の絵巻に仕立てた。「清藤」とともに古径の名を重からしめた画業であつた。本図は巻の尾形へ夕べに忍び来る「清藤を描いた一段である。

宮崎与平 二ハカキ (西川純宛)



はれ上つた頬を片手でござえて、歯が痛んでしようおへん、すみませんがおしっておくれやす、と云う。こゝは画描きだ、と云うと、へえ、歯医者さんと違えますのか、と何度も駄目を押しながら、指すのが軒灯であら。

入門の当初、鹿子木先生の家にいたのが、奥さんと御母堂のほか、画生としてはまだ私一人であつた頃のことである。いまでも時々思い出すのであるが、夏の夜、うす／＼明けようとするある朝、けたましく表の戸を叩く者がある。昼間の接れでぐつすり寝込んでいた私は、夢を破られて、あけて見ると、中年位の女の人が、

恨めしかつたのはその女ばかりでない。時計を見ると四時を少し過ぎたばかり、も一度寝直そうとするにも、いまは何なのと、年よりのことで、夜ぞとい母堂が起きて来られるので、その日は一日睡気が取れずに弱つた。軒灯の洋字はそればかりでなく、同志社に近かつたので、多分通りがかりの学生の眼にでも止つたのであろう、投書が来て、「あんな間違つたことを書いて、麗々しくかけておくのはよろしくない、早速改めるように」とあつた。馬鹿な、フランス語を知らないのか、と先生

はとり合はなかつたが、おせつかいと云うものは、何処にもあるものと見える。それからしばらくして、宮崎与平君(後に渡辺雄)が入門した。宮崎君は長崎の人、早熟大逆の才人で、小まわりの利く画風であつたが後に中央に出て、挿絵では竹久夢二と併称され、第四回文展に「ネルのきも」を出して三等賞となつたが、明治四十五年二十五才で歿した。この人については、また後に詳しく取り上げるが、当時は市立美術工芸学校在学中で、また十代であつたが豪酒家で、酔つてやつて来ると、よく持来うんと金をこしらえて、長崎港へ入りする船に赤い帆をかけたせて、ベニス

ないかと思う。この人は七条油小路の造幣油屋の三男であつたが、大戦末期頃、山梨県の疎開地で病歿した。また画塾に關係はなかつたが、大津石山にいた伊庭慎吉君も時々訪れて、先生の指導を受けていた。先生はその頃「非美術画報」と云うのを、芸興堂から出しておられた。菊倍版以上の大形の漫画雑誌で、日露の將軍や政治家たちの似顔を描いてあり、浅井先生の作や、池田義象さんの漫文も載つていたかと思つたが、絵葉書流行の折で、やがて絵葉書形に形を変えて、便利堂から発行された。ついでに「室町画塾画ヘガキ」と云うのを、宮

(4頁下段)

わが師わが友

— 4 —

鹿子木さんの門人たち

洋画家 黒田重太郎

PEINTEUR, A.R. とある。フ、モント、うのは、何でも洋行中、マネチヤの展覧会に出品した時受けた資格だと聞いている。女の人はそんなことは知らないから、あそこに出てあるのと違いますか、と云う。洋字で書いてあるので、アメリカ婦りの敵医者と思つたらしい。恨めしそに、軒灯をふり返りながら帰つて行つた。

ついで入門したのは西川純で、家は薩摩の手ひねり鏡の密元であつた。漱石の「虞美人草」の宗方君関西漫遊のくだりに、この店の描写がある。父君はもと大阪遊藝局のお役人であつたが、退職後薩摩で手ひねり鏡をやつて白通していた、三はと風流人である。西川君は厳しい父君のしつけで、毎日、それこそ雨が降つても、雪が積つても、薩摩からあるいて通つて来た。電車の通つていなかった頃で、汽車に乗るのもたまのことであつた。



宮崎与平 ネルのきもの

展覧会案内

今井憲一 個人展	10日-14日	新制作京都展	22日-26日	マロニエ画廊	
京都書院画廊		山賊会有名人余技	28日-29日		
11月		中町進・幸田曉治二人展		11月	
グループ・フニナ第一回展	11日正午-14日正午	新制作等々会展	6日-11日	樺家利治油絵個展	19日-22日
染色グループ展	14日正午-21日正午	大丸		小林文司写真個展	23日-29日
12月		電村美術織物展	8日-13日	同大・立大合同漫画展	30日-12月1日
第二回日展	14日-27日	武者小路実篤小品展	15日-20日	立大写真部展	2日-7日
第三回日展	14日-27日	金工会展	22日-26日	現代美術研究所グループQ油絵展	
京都府キヤラリ		上島一司書道作品展	22日-27日	べんてる画廊	
11月		現代大家彫刻展	29日-12月4日	11月	
皆川月華作品展	9日-10日	丸物		柳美会展	8日-13日
日本彫刻家クラブ関西支部第八回展	12日-16日	11月		弥栄中美術部展	15日-20日
「位双」日本画展	18日-22日	第6回アンファン展	12日-17日	カレー会	22日-27日
電本印象デッサン展	25日-29日	第2回書月会日本画展		五条少年補習委員写生会展	29日-4日
12月		水原勇次郎書道作品展	9日-13日	12月	
京都二紀クラブ展	1日-5日	琴月会展	26日-28日	中部支部版画展	6日-11日
面生会新作能面展	6日-8日	12月		竜谷大学美術部四人展	8日-13日
		下保昭、池田道夫、石川巖ら七人展	1日-4日	芥文会展	3日-8日

(3頁より)
崎君や西川君や私などに描かせて刊行させられたが、あんなもの、売れたか知らんと、いまでも気になっている。
佐々木判事の旧宅に買手がついで、先生は吉田仲大路に居を移され、室町画塾はこゝに終りを告げて、西川君と私は聖護院洋画研究所に入り、宮崎君は近年市立美工卒業後東京へ行った。斎藤与里君が鹿子木先生のところへ来たのは、私たちが研究所へ入った明治三十八年秋のことである。

小林古径展
11月27日まで

小林古径遺作展は画伯の生涯の画業を一堂に集めて当館で開かれていた。出品は絵巻、軸物、額のほか草稿、スケッチなど百数十点であるが、17日から作品の一部陳列替えを行った。

入場料

大人	一〇〇円
学生(高校・大学生)	七〇円
小人(小学・中学生)	四〇円
団体割引入場料 (二十人以上)	
大人	八〇円
学生	五〇円
小人	二〇円



京都府美術館

